

司の長に往けり。

マタイ傳第十章二十八—三〇。九月一日頭註三五—一頁を見よ。

同第十二章二〇、三二。

卷末補遺八月二日の下を見よ。

同四三—五〇。七月廿五日頭註二九五頁六行より次の如く續く。

イエス人々に語り居る時、その母と兄弟

かれに言はんさて、外に立ちれば、或人イエスに曰いけるは、爾の母と兄弟なんぢに言はんさて外に立てり。イエス告げし者に答へて曰けるは。我母は誰ぞ。我兄弟は誰ぞや。手を伸べ、その弟子を指して曰けるは、是れわが母、わが兄弟なり。そはすべて我が天

基督に接し得るこゝ、丁度直に家族的關係に入るこゝなくして、現今生存せる人に畢竟接し得る如くではなからうか、否な之よりは遙に容易ではなからうか。爾は先づ第一に信仰に附屬して居る一切を抛棄せよ。其か猶ほ爾に疑惑を起すならば、今日の如何なる教會に附着するこゝさへもすな。爾は先づ情の充分なる欲求から、「主よ、助け給へ」と言へ。此祈は既に多くの人を助けた、而して特に神經衰弱若しくはヒステリシ稱せらるゝ凡てに於て、意志力も見識も最早毫もない位に病患が進んでしまふに先ち、此方法が好時期に捕へらるれば、唯一の根本的救助手段である。馬太傳第十一章二八—三〇。同第十二章二〇、三二、四三—五〇。

十月五日

人若し、彼が神に與へ得る而して神が之のみ價値を措く唯一の贈物なる彼の意志を（他のものは實に總て神の賜物である）、全く神に贈つてし

まへば、厚がましく聞ゆるけれども、神は此人に彼の意志をも與へて其有さなさしめ、同時に以後凡て彼の願（然し此願は神自身が導く）を彼に與ふ。今や彼は只だ願ひ且つ受けるこゝのみをして差支ない、而して神自身詩篇第八十一篇にある「なんぢの口をひろくあけよ、われ物をみたまめん」なる語を以て、爾に之を促がす。

蓋し神は、吾人苟も彼に就いて知る限りに於ては、無限に親愛ある存在であり、而して其の要求の旨は、人間の爲めに多であり、否な凡て、あらんこし、而して既に此地上に於てでさへ、彼の弱き性質を損するこゝなくして出来るだけ多くを彼に贈り得んこゝするのである。遺憾ながら弱き人性は、一度には可なり僅少の幸福しか善く堪ゆるにまは出来ない。

十月六日

基督教は、半ば救済を求めつ、半ば繁り蔽ひつ、絶えず其に推寄する

に在ます父の
旨を行ふ者は
、是れわが兄
弟、わが姉妹
、わが母なれ
ばなり。

十月九日

ヨハネ福音書
第三章。卷末
補遺を見よ。

十月十日

マタイ傳第五
章二日、以下
ヨハネ傳第十

三九二

凡ての不健全な病的のものゝを征服せん爲めには、其自身全く健全なるもので在らねばならぬ。

是れ基督が數々彼の弟子さもから離れ、而して淋しく山にて新らしき強壯を求めなければならなかつた理由であつたらう。

殊に精神的に不健全なるもの、群集が絶へず推寄する儀式的の「祈禱治療院」は、それだけ一層誤れるものである。誰人も長い間には害なくして之を堪ゆることは出来ない。

十月七日

人一度全く愛の國に入つたら、世界は、如何に不完全であつても、麗はしく且つ豊かになる。何故なれば世界は愛を爲す機會のみから出来るからである。

十月八日

八章三七まで
卷末補遺を見
よ。

十月十二日

ヘブライ書第
六章一一、一
二。

爾らおのゝ
終に至るまで
疑を懐かざる
望を保たんか
爲に、以前と
同に懇懇を表
はし、怠らず
して、かの信
仰と忍耐とを
以て約束を嗣

十月九日

統治の合法は、神の命令に従ひ、統治者が最早毫も自分自身のことば考へないで、只だ總ての人の僕たることにあるのである。凡ての他の合法は誤謬である、而して凡ての統治者は其に従ひ判断すべきである。

基督教全體は、人若し其の簡短なる説明を有し而して其を會得せんことを欲せば、實に約翰福音書第三章に包含せられてある、而して約二千年以前に在つた同一の其に就ての誤謬が、現今猶ほ基督教國の眞中に吾人の間に在るのである。

吾人の自然性が變ぜぬ以上は、今日もまた何等の教義も、何等の科學も、何等の實行も。眞正の生活に至るやうに充分に吾人を援けない。之を異つた言葉にて言へば、基督教の欲する所のことは、人に自然的にな

ける者に倣は
んことを我儕
欲へり。
同第十二章三
一六、二九。
なんぢら倦疲
れて心を喪ふ
こと莫からん
爲めに、悪人
のかくおのれ
に逆ひしを忍
びたる者を思
ふべし。なん
ぢら悪を争ひ
拒ぎて、未だ
血を流すに至
らず。また子
に告ぐるが如
く告げ給ひし
言を爾ら忘れ

たり。曰く我
子よ、爾主の
懲治を輕んず
る勿れ、其罰
賞を受くるこ
き心を喪ふ勿
れ。そは主そ
の愛する者を
懲らしめ、又
すべて其納る
所の子を鞭て
り。
夫れはわれら
の神は燬盡す
火なり
黙示録第二章
一〇。
なんぢ將に受
けんことを苦
を懼る、勿れ

三九四
り、而して凡ての自然的のものがあつた如くに、親しく且つ自明になり、
従て彼が最早其に就いて毫も熟考することゝせず、若しくは斯様な事
を決心することゝせず、而して却て基督教に反した。こ
が、自然性の嫌厭を引起し、且つ征服に値するやうにならなければなら
ぬ。斯うなつて来るに、約翰が明かに彼自身の経験からして、彼の第一
書中に主張して居る「神の命令は毫も六ヶ敷無い」といふ平生は信じ難い
事が實に始まつて来る。蓋し凡て自然性となつたものは困難ではない。
爾之に就いて熟考せよ。爾も亦た此に達しなければならぬ、又た此に
達するであらう。それまでは心靜に爾自身を予に於ける如く只だ基督教
の朋友及び生徒に念へ。吾人はかくすれば兎もかく全然善き仲間にいる
のである。蓋し予は予が生涯中未だ多くの全く自然的である基督教徒を
見たことはない。然し斯様な信徒は(茲に充分に眞實に敬意を表して言へ
ば)新舊兩教に可なり一様に分配されてあり、而して男子中に於てよりは

更に多く女子中に分配されてある。

十月十日

「基督教徒」は、人が躊躇なく離るゝことの出来る實に奇怪なる語で
ある。何故なれば基督教徒は次の中の一であるからである。即ち彼は吾人の
如く一様な種類、一様な生活条件の人間である。此場合別に特別の基督
教を要せないで、彼の經歷と事業とを説明する善き傳記が必要であり、
又た充分であらう。然し確かに未だ誰も斯様な傳記を書かなかつた。他
の場合は之とは異つて、彼は少なくとも神から或る程度に、もつとよく
言へば、空前絶後の方法にて靈魂入れられたものである。此場合、此性
質若しくは言ひたければ此二重性を説明することは全く不可能である。
彼自身之に關して毫も曖昧の所なく繰返し語つた、而して有らゆる説
明を斥けた、然し彼の本質に就き間違つた考を抱いた者を斥けはしな

悪魔まさに爾
らの中の者を
獄に入れて爾
らを試みん
す。爾ら十日
の間患難を受
くべし。爾ら
に至るまで忠
信なれ。然ら
ば我生命の冕
を爾に賜へ
ん。
同第二十一章
六一八。
一二〇頁を見
よ。
イザヤ書第三
十八章乃至第
四十五章。
引用省略す。

十月十三日

マタイ福音書
第七章二九。
一一七頁頭註
を見よ。
ヨハネ傳第七
章四六。
一一六、一一
七頁頭註を見
よ。
箴言第二十章
一二。
聞くところの
耳を視るそこ
ろの眼を、
さもにエホバ

三九六

つた。是よりは彼に對する誠實なる好愛が重要である、而して所謂基督
教徒の幾千人が、彼等が最初了解するここの出来ない基督の本性に關す
る傳來の教條説に由りて、基督教から怖らし去られた。

爾宗教問答篇の定義に多く頓着するな。寧ろ基督が自分自身に就いて
言つて居ることに固着せよ。さもなく信仰に基き斯くせよ。何故なれば
現今何時の如くに其以上の説明は不可能であるからである。

馬太福音書第五章二〇、第八章二二、第十一章二七、第十二章三一、
三二、四八—五〇、第十五章七、八、一四、第十七章五、第二十一章四
二、四四、第二十三章九、一〇、第二十四章三五、第二十六章六三、六
四、第二十七章四三、六三、第二十八章一八。馬可福音書第三章二八、
二九、第十三章三一、三二。路可福音書第五章一七、第七章二三、第九
章五〇、六〇、第十章二二、第十一章五二。約翰福音書第二章二五、第
三章三六、第四章二四、第五章二二、三〇、第六章三七、四〇、五一、

第七章一七、三八、第八章三一、三二、第九章三九、第十章三〇、三四
—三六、第十一章二六、第十二章四四—四六、第十四章一〇—一三、二
三、第十五章七、二六、第十七章三、第十八章三七。

十月十一日

眞實の患難さ苦痛ミがあれば、之が爲めに常に神を有つこゝが出来ぬ。
只だ想像された若しくは誇張された其等には、之が餘り出来ない。吾人
は出来るだけ多く堪へなければならぬ。

何れの大成功にも、其が爾を害せずにあるべきならば、神が一滴の苦
味を混ぜなければならぬ。

十月十二日

三九七

の造りたまへるものなり

箴言第三十章

五、六。

神の言はみな

潔し、神は

彼を頼むもの

に盾なり。汝

その言に加ふる

こと勿れ。

恐らくは彼な

んちをせめ、

又なんぢを誑

る者となした

まはれ。

詩篇第十二篇

六。

エホバの言は

きよきことば

なり。地にま

うけたる爐に

て七、きよめ

たる白銀のご

とし。

箴言第二十九

章二〇

なんぢ言を謙

まさる人を見

しや彼よりは

却て愚なる者

に望あり。

傳道の書第五

章一、二。

汝エホバの室

にいたる時に

は、その足を

慎み進みより

て聽聞くは愚

なる者の犠牲

にまさる。彼

最も堅固なる信仰といへども、折々再三新たに試験せられ、言はゞ振起されねばならぬ。さもなくば其信仰は容易く墮落し、而して單に教會的の共同感情になる。此場合半盲者が半跛者を導くやうなことが屢々ある。若しくは此信仰はキプリングのパーラム・バアガットに巧に描寫されてあるやうな抽象的考察に墮落する。

是は其次には、中世の神秘家がまた示して居る如く、汎神論に似て而して非なるものにて終り、若しくは「寂靜に絶對への没入」を以て最高の人間生の目的とする無効果なる婆羅門知慧にて終る。

人折々一日間位、信仰ある生活に普通の生活法に従ふ生活との差異を他人に於てのみならず、自分自身にも再び實際に經驗し、而して前者の價値を新に尊むを學ぶことは、人間は恒に弱きものであるから、實に善きことである。斯様な絶わざる試験がなければ何等の確乎たる信仰が生ぜない。

希伯來書第六章一一、一二、第十二章三—六、二九。默示録第二章一

〇、第二十一章六—八。以賽亞第三十八章乃至第四十四章。

十月十三日

眞實を言ふことは、特に熱中する多くの道學者が思ふ如くに、そう容易のことでない。

先づ第一に、人は、彼等が猶ほ彼等の思想生活に於て、此世界の事物より甚だしく影響を受くる以上は、毫も眞實を見ることが出来ない。それであるから基督の言葉は、當時の學者どもの言葉よりは全く異なりて聞けた。

馬太傳第七章二九。約翰傳第七章四六。箴言第二十章一二。

其次には、人が知る眞實さへ、何等の誇張なく、全く正しく且つ剴切に語ることは、また容易のことでない。凡ての誤解や爭論の頗る大なる

等は其の惡を行ひたることを知らざるなり。汝神の前にありては軽々しく口を開くなかれ。心を攝めて妄に言をいだすなかれ。そは神は天にいまし、汝は地になればなり。然れば汝の言詞を少なからしめよ。

ヤコブ書第一章一九。

是故に我が愛する兄弟よ、

四〇〇

部分は、其自身承認されて居る事件に説明の斯様な缺陷があるからのみに因つて起るのである。此理由からして、「神の言葉」は人間の普通の言葉より異つてある。吾人は聖書の言葉と人間の言葉とが直接に相並んである説教に於て、最も明瞭に之を見る。人々は此本に於ても之を見るであらう。箴言第三十章五、六。詩篇第十二篇六。

最後に人々は大抵餘り速に餘り多く語る。箴言第二十九章二〇。傳道の書第五章一、二。雅各第一章一九。

現今は何でもかでも、其が其を書く人自身にも充分に明瞭になるに先ち、直に新聞、雜誌、會誌等に載せられねばならぬやうになつて居る。

一の思想若しくは努力の萌芽が、既に其の「機關」を有たなければならぬ、而して其萌芽は之が爲めに窒息することが屢々あるのである。

然し「道學者」は、彼等は只だ主觀的眞理、換言せば確信通りの言語を要求する言ふが、彼等は、主觀的確信が誤つて居り若しくは成熟して

人打のく、聴くことを速かにし、語ることを徐くし、怒ることを徐くすべし。

十月十五日

出埃及記第二十二章二〇—二二。

エホバを打ちて別の犠牲を献くる者かば殺すべし。汝他國の人を憐ますべからず、又たこ

居ない場合に之を發表せば、頗る多くの害を爲し得ること、而して此確信は屢次單に偏見に過ぎないことがあり得ることを忘れて居る。虚言せぬこと、即ち能く知れることに反して語らぬことは、成程疑ふべからざる道徳的要求であるけれども、全く消極的の要求である。之に反して眞實を語ることは、指圖の受けられない全く異つたものである。人は正に之を言ふことが能はなくてはならぬ。長い間虚言を吐き慣れた者、若しくは吾人の交際社會の多くの人がある如く、一般的虚偽の空氣に生活して居る人は、之が能ない。多くの人は深く且つらく之を感じて居るけれども、それでも眞實を言ふことが出来ない。彼等は單なる倫理學に由りては、此幽囚より全く確實には脱出せないであらう。

十月十四日

敵を愛することは、基督教的獨斷説が大に誇示して居る頗る麗はしき

四〇一

れを虐ぐべからず。汝らもエジプトの國に在る時は他國の人たりしなり。汝すべて寡婦あるひは孤子を憐ますべからず、同二五、二七三〇。

言葉を附かな言葉である。然し基督教國の實行に於ては、吾人は多く之に氣が附かない。

此愛は、人が神との關係が出来て、人間を畏れるこゝを忘れてしまつた時のみ實に起るものである。そうなる人は初て、吾人の生活に於て敵が最大の奉仕を吾人に成したこゝを洞察する。そうするに此大奉仕の爲めに、誤解さへ生じなければ誰人をも抱擁するこゝが出来るやうな氣分が起るこゝが出来る。

四〇二

十月十五日

人若し祈禱せんを欲するならば、彼が有する物に對する感謝から始めなければならぬ。是は吾人の情を正しき情調に至らしむるのである。其次には自己の意志を神に委ね、最後に今日の信仰と愛とを願はねばならぬ。其次に初て當座の必要な事の祈願が來なければならぬ。人自己の意

そはその身を蔽ふものは是のみにして、是はその膚の衣なればなり。彼何の中に寝んや。彼われに呼ばれば我きかん。我は慈悲ある者なればなり。

汝また汝の牛と羊をも斯くなすべし、即ち七日母と子にもをらしめて、八日にこれを我に與ふべし。

志を委ねた時のみ、吾人の祈願への神の意志の傾向を充分の信頼を以望むこゝが出来る。然らざる場合には人は實に自分で自分自身を助けなければならぬ。

然し其後ち、人自己の意志を委ねてしまひ、而して此間違のない指導に對する堅固なる信頼を以て、歩一步未來の闇黒に進み入り、而して之を豫め見んを欲せざれば、其時可能である人生の確乎平安なる幸福が始まるのである。出埃及記第二十二章二〇—二二、二五、二七、三〇。

十月十六日

忠實は實に最も美しく最も重要な性質である。是は動物さへもを頗る高尚になし、之が爲めに其が殆んど人間的價値と品位とに上る位である。忠實が全然缺くる場合には、最も才智あり最も教養ある人も、危險なる動物に過ぎない。

四〇三

十月十九日

エレミヤ第三
十二章一七—
一九。

あゝ主エホバ
よ汝はその大
なる能力を伸
べたる腕をも
て天と地とを
造りたまへり
。汝には爲す
能はざるこ
ろなし。汝は
恩寵を千萬人
に施し、又た
父の罪をその

十月十七日

世には多くの悲慘がある。然し正しき處に求むれば之に對する強き救
助も多くある、而して最後に人若し拒まなければ此悲慘の全き救済があ
る。

外的境遇が人生の幸不幸を決定して、内的性向が之を爲さぬやうに思
ふことは、極めて多數の不幸者が陥つて居る不運なる誤謬である。酷だ
しき例を用ゐて言へば、文明國に於ける刑罰囚人さへも、たゞひ彼等が
頗る單調の生活を送るけれども、心配の無い貧乏、謙遜、從順なる義務
遂行を以てし、而して神を信ずる。こゝが出来。以上は、絶わざる壓迫す
る心配、最も必要な物質の苦々しき缺乏、憎惡と忿怒、若しくは神の
命令への絶わざる實際の反抗を有ち、而して神の接近無くして生活せね
ばならぬ多くの自由なる人より餘程矩合がい、何故なれば此等後者は

何等の信仰を有たぬからである。無政府主義者の警語「神無主無」は、只
だ彼等の不完全なる心理を表はすだけである。何故なれば是れ人間の最
も忍び能はざる所であるからである。此自由はやがて彼等の堪へ難き空
虚となり、而して彼等は是から出で、他人との結合に由る一種の奴隷
状態を求むる。斯様な状態は、倫理的及び社會的秩序の普通の束縛より
更に多く酷である。こゝが屢次ある。

十月十八日

ゲヌアの聖カッターナ(フィエスキ・アドルノ伯爵夫人)が、「自己の惡き
部分(我)は、其が名を呼ばるゝ度毎に喜ぶ」ミ言つて居るのは正當である。
是が非難的に呼ばるゝ時でさへそうである。人々は毫も多く自分の事を
考へぬやうに、而して此意味にて眞に全く自分自身を委ねるやうに己を
慣らさなければならぬ。然し是は、人々が人性の深き腐敗を経験に由り

後の子孫の懐
に報いたまふ
。汝は大なる
全能の神にい
まして、其名
は萬軍のエホ
バさまうすな
り。汝の謀略
は大なり。汝
は事をなすに
能あり。汝の
目は人のこゝ
もらの事の途
を鑑はし、お
のののの行に
循ひその行爲
の果によりて
之に報いたま
ふ。

十月二十日

哀歌第三章二

二一三三。

卷末補遺を見よ。

十月廿二日

ヨハネ福音書

第四章二四。

神は靈なれば

、拜する者も

また靈と眞な

もて之を拜す

べき也。

同第六章六

五。

て認め、而してまた幾何かの經驗に由りて全く異つた存在の事實的可能が彼等自身に於て證明されてあるを見てしまつたまでは不可能である。

凡て人間の運命の秘密はゲヌアの此女聖が次のやうに言つて居る數語に在る。「人の精神は愛せんを欲し、而して愛に於て福祉に在らんを欲する。造物主またこのやうに人を決定して居る。人は浮世の事物を以て此衝動を満足し得るを望めば、彼は自己を欺き、而して彼が眞正の愛を聖き喜びを見出し且つ全く満足するであらう最高善即ち神を求めずして、此愚事を以て、彼に贈られてある尊き時間を失ふのである」。是れ實にそうである。然し實際に之を信するこゝは頗る困難である、而して之には大なる患難の時期が必要である。此時期の經過の後ち、人は初て約百の如く、「われ汝の事を耳にて聞るたりしが、今や目をもて汝を見る」約百記第四十二章五)と言ふこゝが出来る。

「ポリクラーテスの指環」は、心理的に全く正當である考の物語である。

イエスマた曰

けるは。是故

に我とくに我

父あたへざん

ば、人よく我

に就るなしと

言ひしなり。

同第九章三

九。

九月四日頭註

三六〇頁四行

を見よ。

同第十四章

六。

一一五頁頭註

を見よ。

ガラテヤ書第

五章二二。

靈の結ぶ所の

實は仁愛、喜

人若し所有の喜から脱却せんを欲するならば、最も珍重する物を抛擲せ

なければならぬ。そうする人は總て他のものへの執着を失ふ、而して

此執着たるや、多くの人に取つては、彼等の財寶、家屋、書庫、蒐集、

繪畫、若しくは他の貴重品に對する奴隸的從屬の状態にまで亢進するこ

とがある。「その靈魂が土に附着して居る」他の點に於ては全く善良である

人々は、ダンテの淨罪界第十九歌に於て、法王ハドリアン五世(またゲス

アのフイエスキ)の例をもて隨はしく描寫されてある。

十月十九日

人苟も神を信ぜんを欲するならば、亦た彼の正義を彼の親切を堅く

信ぜなければならぬ。何故なれば、此特性がなければ、神は吾人に取つ

ては一の不幸、しかも最も大なる不幸に過ぎないとも限らぬからである。

そしたら吾人は、彼が斯様な不幸でなければいゝ、願ふに相違ない。是

れ思惟せられ得る最大の褻瀆である。さはいへ、是が悟性にさへさんな
に明瞭なこゝであつても、吾人は吾人の運命の何か一部分を不満足に念
ひ、以て日々實に此罪を犯すのである。耶利米亞第三十二章一七—一九。

十月二十日

予は初め基督を、軍職の類比に由り、寧ろいくらか實際的に了解した、
而して其の最も興味ある聖者は、予に取つてはベテロやパウロでなくし
てフォン・カーベルナウム大尉及びコルネリウス大尉であつた。それだけ
救世軍は時代の要求、或る程度までは凡ての時代の人間の要求を本能的
に正當に捉へたものであると思ふ。

地上の生活は、吾人の平常の情調が忍耐を命ぜねばならぬやうに出来
て居る。然し人々は時機が來たら、敏捷に元氣を以て行動するこゝが

樂、平和、忍
耐、慈悲、良
善、忠信、溫
柔、撻節。
ヨハネ福音書
第六章三七。
凡て父の我に
賜へし者は我
に就らん。我
に就る者は、
我がならず之
か棄てず。
マタイ傳第十
一章二八。
九月、日頭註
三五一頁を見
よ。

十月廿七日

出来なければならぬ。耶利米亞哀歌第三章二二—三三。

十月二十一日

約百記。摘要。約百は、如何なる事情の下に在つても、彼の朋友とし
て神を固守せんミ決心するに至つて、先づ第一に心の平靜を得た。然し
彼は、彼が神を見る前には、此決心を全く信仰にて爲さなくてはならな
かつた。然らずば未だ害なくして彼の患難から脱するこゝは出来なかつ
たらう。彼は其次には、目に見ないでも、罪人に對しても善人に對して
も、總て世界支配に於ける神の正義を最早疑うてはならなかつた。彼は
最後に、彼自身。患難に就いて、是にも神慮が在るさいふ外に何等の説
明を得ずして、此患難を衷心、神から來り、而して兎角彼の福祉なる
善事として受取らねばならなかつた。神の正義への此絶對。服従の後ち
或る註釋者が正當に言つて居る通り、「このよく試されたる忍耐家に對す

ルカ傳第五章
一七。
一日イエス教
を爲せる時。
パリサイの人
と法法師ガリ
ラヤの諸卿ユ
ダヤ、エルサ
レムより來り
て、此に坐し
ぬ。彼等の病
を醫すべき主
の能顯はれた
り。
同第十四章三
四。
鹽は善物なり
。然れど鹽そ
の味を夫は、

何を以て之に味を和んや。マコ傳第八章三六
もし人全世界を得るも、其生命を喪はば何の益あらんや。
ヨハネ傳第七章三八
我を信する者は、聖書に録し、如く、其腹より活ける水、川の如くに流出べし。

十月廿九日

四一〇
る神の豊富なる慈恵の表示には、最早何物も妨碍になるものがない。戦闘は戦終へられた。而して勝利の獲物が彼に渡されるこゝが出来た。彼を誤解し而して等閑に附した人々また所謂朋友に對する正義を、後になつて神は、此内的に高められたる正しき者に用意し與へた。彼自身之を心配するに及ばなかつた。彼は寧ろ、彼を尋ね而してそれ無くば彼等を容赦せない彼の仲裁を得るやうに、神が彼等を強ひるこゝいふ最も願はしき位置に來た。斯様なこゝは今日でも屢次現はる。

十月二十二日

約翰福音書第四章二四、第六章六五、第九章三九、第十四章六。吾人は此世に於ては神は何であるかを知るこゝは出来ない、また基督が何であり、聖靈が何であるかも知るこゝは出来ない。之に關して宗教問答篇や教條的教課書に載つてある凡てのこゝ、又た多くの人々が、毫末も自

創世記第二十章六。
神又夢に之に言ひたまひければ、然り、我汝が全き心を以て之をなせるを知りたれば、我も汝を阻めて、罪を我に犯さしめざりき。彼に觸るゝを容ざりしは是がためなり。
同第二十一章二二。
當時アビメレク其軍勢の

分自身更によく知らない是や彼やの教會教師の意見に由るも正當に此を了解せないが爲めに此等の書籍に由つて其存在を許さねばならぬ凡てのこゝは、多少正當に構成解釋する人間的表象の産物である。吾若し、神の確實なる存在、基督の信仰の力、吾人の靈が有たないやうな他の靈の光明性等に就いて、吾人自身の經驗を有たないならば、誰人も、實に何時でも多くの人の信仰であつた又た猶ほ現にあるやうな斯様な人間的指令の死んだ教會的信仰以外の他の信仰を有つこゝは出来ないであらう。吾人は、之にて満足が出来なければ、基督の言葉から、彼が超自然的事物に就いて考へた、又た之が考へられたを欲した見解に達するやうに努力し、而して之に附着せなければならぬ。然し多くの人の慰藉として兎もかく此に附言し得るこゝは、「信仰告白」書に於ける教會的定義は、斯様な定式に苟も表はされ得るだけ眞理に近きものであり、それで之を以てすれば誰人も全く誤れる途を歩くこゝはない、然るに之からの如何な

る乖離も容易に一層危険な途に人を導き、而してまた最早決して只だ近似的に一般的である承認を得ないであらうことである。

聖靈は、他の點に於ては全く善き基督教徒である多くの人には、猶ほ珍らしきものであり、彼等が之に對して多少の臆氣おそひを有する殆んき奇怪なるものであるが、事物や人間を其が眞實ありのまゝに見る眞理の生ける見張する靈である。吾人は有らゆる人間的關係を纏綿する半虚偽及び全虚偽から脱せん爲めに、此靈を有たなければならぬ。

然し此靈を有する人に於ける此の「果」は何であるかは、爾はパウロの加拉太書第五章二二に於て、爾自身之を拾集め、而して之に由りて、此靈が爾及び他人に既に現存してあるか否やを、容易に判断することが出来る。然し之が未だ全く正しく行かず、若しくは貧弱に出来ても、爾は其の爲めに既に實際「神の兒」であり、而して全く安全好良なる途に在り

長ビコル、ア
ブラハムに語
りて言ひける
は、汝何事を
爲すにも、神
汝ささもに在
ます。

同第二十六章

二六—三一

卷末補遺を見

よ。

同第三十一章

二四

神夜の夢にス

リア人ラパン

に臨みて、汝

慎みて善も惡

もヤコブに道

ふなかれさ之

に告げたまへ

り。
同第三十三章

四。

エサウ趨りて

之を迎へ、抱

きてその頭を

かへて之に

接吻す。しか

して二人とも

に啼泣けり。

詩篇第百〇九

篇三〇。

われはわが口

をもて、大に

エホバに謝し

、おほくの人の

のなかにて讃

めまつらん。

同第九十一篇

八一—一三。

得るのである。是れ此使徒が同書第三章二六に於て、頗る缺點ある此同

一の加拉太人に告ぐる所であり、吾人に取つても弱き時に於ける大慰藉である。

多くの不幸なる人々は、彼等が「救はれ」であるかといふことに就き、幾多の而して無益な考を起す。斯様な考は、餘り安心し過ぎることの如くに有害である。彼等は此事に就き、折々無分別で熱心過ぎる懺悔説教師、若しくは聖書或は宗教問答篇の誤解せられた個所から強めらるゝ。

之に關して聖書に在る最も確實なることは、既に屢次言つた如く、約翰福音書第六章三七及び馬太福音書第十一章二八に包含せられてある。

此には誠實なる求道者には何等の除外が見出されない。然し自然的感情に取つては、最も確實なる特徴は、人が基督の言葉を(他の人の言葉ではない、使徒若しくは豫言者の言葉も絶對的ではない)完全に了解し、完

なんぢの眼は
たゞこの事を
みるのみ。な
んぢ惡者のむ
くいを見ん。
なんぢ屍にい
へり、エホバ
はわが避所な
り。なんぢ
至上者をその
住居となした
れば、災害な
んぢにいたら
ず、苦難なん
ぢの幕屋に近
かづかじ。そ
は至上者なん
ぢのためにそ
の使者輩にお
ほせて、汝が

全に承認し、しかも之への何等の矛盾を最早自分の心に感ぜざる時にあ
る其である。人々は基督を凡て彼の行爲及び言葉に於て、如何なる他の
歴史的現象より更に善く、凡ての弟子や後の教父より更に善く、凡ての
古典の記者及び古代の偉人、若しくは中世の神秘家より更に善く、宗教
改革者、近代の哲學者及び神學者より更に善く了解するに至ることは可
能である。只だ是のみが實に完全なる基督教である。

十月二十三日

人毎朝目が醒むるや否や、彼が自分に擔はなくてはならぬ彼の十字架
を考ふるならば、是は彼に屢々餘り重く見わるであらう。當日若しくは
將來が一般に持來たすことのあるあり得ること考ふるならば、凡ての感情
の最も不愉快なるものなる恐怖が彼を襲ひ易い。
然し復た吾人を興起さした神の慈恵を考へ、神の國の爲めに成すの義

あゆむるも
ろの道になん
ぢを守らせた
まへばなり。
かれち手にて
なんぢの足の
石にふれざら
んため、汝
をさへん。
なんぢは獅と
蟻とをふみ、
壯獅と蛇とを
足の下にふみ
にじらん。
詩篇第八十四
篇五十七。
その力汝にあ
り、その心シ
オンの大路に
あるものはさ

務ある奉仕を考うるならば、活動的の人が此國の爲めに爲すことが出来、
また爲すことが許される事の感情に由り、終日持續する欣恬の情が、容
易に彼を捕ゆるものである。

十月二十四日

一生の大部分の間、最良の人でさへも、彼等が値する以上多く善きも
のを受取る、否な人の最大多數に於ては、一般に彼等の全生涯の間、是
が實際であるのである。

斯様な場合に於ける最も意義ある時期の一は、或る僅少の人に於て、
彼等が直に神を疑ひ若しくは神から背くことなくして、神が在來よりは
多少少なく彼等に與へ、慈恩寛容の見地に於てでなくして、彼等に對し
て言はゞ法の見地を取ることを始め得る、言はゞ之を敢てする時である。
是れ神が彼等に爲し能ふ最高の名譽であり、彼等が毫も了解せず、しか

いはいなり。
かれらは涙の
谷をすぐれど
も、其處を多
くの泉あるさ
ころさなす。
また前の雨は
もろくゝの恵
をもて之をお
ほへり。かれ
らは力より力
にすゝみ、遂
におのゝシ
オンにいたり
て神にまみゆ
同第七十一篇
七。
我多くの人に
あやしまるゝ
ごこき者みな

も斥くるごこきへ充分屢々ある最高の名譽である。是れ預言者イザヤが、
シオンは公正を以て購はれねばならぬ」(イザヤ書第一章二七)と言つた以
所である。たごひ代表する正義は、實際は常に慈恵であつて公正でなく、
而して基礎に在る問題を實際に解決せぬけれども、基督の苦難に依る凡
ての人の救済の或る哲學的了解は、正に此に在るのである。

四一六

十月二十五日

人若し一旦彼の生涯の或る時に於て、悪意ある誹謗讒誣を充分に堪へ
ねばならなかつたならば、其後は人間の稱讚に對して平氣になる。斯様
な薔薇水は、最早彼の靈魂から此汚穢を洗はない。只だ恢復する神的正
義の火のみが之燃ゆ除くのみである。

兎もかく、大概は實際頗る水つほい人間の稱讚は、悪意が其の灼熱の
箭を射込み而して殆んど癒し難い癩痕を残した心臓の層までは全く浸入

せない。

十月二十六日

自分自身に苦まなかつた人には、如何なる苦難者も信頼を置かぬ。若
し吾人の主にして十字架に死せず、而して彼の經歷の牧歌的開始が悲
劇的終局なくしてそのまゝであつたならば、彼の生活は「麗はしき物語」
であつたであらう。然し貪しき者、惱める者の救済者は、若し苟も斯様
な者があるならば、恐らくはパウロであつたらう。それで、「かくならぬ
ばならぬ」の基督の言は、人此犠牲を神への何等の關係なくして只だ人
間の本性と氣質とのみに顧慮を置き、全く人間的的心理的に解釋してさへ、
極めて深き意義を有して居る。

今日でもこの通りである。純粹の冠は凡て高き程度まで棘の冕である。
他の冠は選ばれた者自身にも、また彼等から支配され導かれたる者にも、

四一七

れり。然れど
なんぢはわが
堅固なる避所
なり。
同第六十八篇
一八一二〇
なんぢ高處に
のぼり、塵芥
をさりこにし
てひきお、禮
物を人のなか
よりも、叛逆
者のなかよ
りも受けたま
へり。ヤハの
神に住た
まはんが爲め
なり。日々の
われらの荷を
おひたまふ主

善き効果を及ぼさない。

十月二十七日

社交に關しても、多くの他の事に於けるが如く、只だ中庸のみが正當なるものである。人間との絶わざる交際は、精神的に利益なくして誰人も堪へざる所である。基督自身も時々之を中止し、而して彼の父と獨り在らねばならなかつた。常に人間から包圍せらるゝ餘り多く要求せらるゝ僧侶、教師、諸種の經營の主事等に於ては、程なくして彼の力の減退を充分明瞭に覺るこゝが出来た。ブルムハルトは最後に人間から餘り酷だしく取巻かれたる彼の生活の終に於て、「悲慘に埋められて」あるこゝを嘆じた。是れ決して起つてはならぬ、而してさうしても基督の摸倣でない。かくして多くの人は最後に、彼から最早何等の力が生ぜず、而して其「塩」は味を失つた者となるのである。

われらのすくひの神はほむべきかな。神はしばしばわれらを助けたまへる神なり、死よりのがれうるは主エホバに由る。
同第六十六篇 一〇—一二。
神よ、なんぢはわれらを試みて白銀をねるごさくにわれらを錬りたまひたればなり。汝われらを網にひきい

路可傳第五章一七、同第十四章三四。馬可傳第八章三六。約翰傳第七章三八。

之に反して孤獨の傾向は、たしかに健全ならぬものである。尤も恐らくは現今吾人は之を柔和に判断せんとの情切である。何故なれば吾人は人間との過度の接觸の結果の爲めに一層多く悩まねばならぬからである。孤獨の傾向は人を我儘になし、世に遠ざからし、且つ善を爲すに懶からしむるものである。それであるから吾人に於ては、聖なる仙人を信ぜない。此聖は餘り低廉に得らるゝ聖である。

人は皆な彼の本性は如何なる惑溺を割合に多く有するかを知らねばならぬ、而して之に反對の運動を生ずるやうに、相當な時期に處置を講ぜなければならぬ。

或者は餘り閑暇で、而して全く無益で、他の者は餘り苦められ過度に働かされてあるこゝは、特に婦女子の運命である。彼等の健康の障害の

れ、われらの腰におもき荷をおき、人々をわれらの首のうへに磨こはしめたまいき、われらは火のなか永のなかをすぎゆけり。されど汝その中よりわれらをひきいだし、豊盛なる處にいたらしめたまへり。
同第六十四篇 七、八。
しかはあれど神は矢にてか

れらを射たまふべし。かれらは俄に傷を受けん。斯くてかれらの舌はその身にさからふがゆゑに、遂にかれらは置づかん。これを見るものみな逃れざるべし。
同第六十篇一
二。
われらは神によりて勇ましくはたらかん。われらの敵をふみたまふものは神なればなり。

多くは實に此缺陷に歸すべきものである。時期餘り遅からざるに先ち、一方の者は有益にして彼等に興味ある活動を以て、他の者は休息の内的平靜の機會を以て救助せられなければならぬ。

四二〇

十月二十八日

多少落付いて觀察する人に取つては、彼等が一人物から受けた最初の印象が、最も正鵠を得て居り且つ常に標準的である。落付の無い、無情な若しくは狡猾な眼、神経質の若しくは差控ゆる手、感覺的の口、品性無き顎、一般に上半面より下半面の優越、是等は掩ふべからざるものである。女性に於ては（吾人の幸福なこゝには）、無邪氣の表情（是は年取つた婦人に多くありて今日の若い婦女には無いこゝが多い）、全く模倣し難いものである、而して是が缺けて居る場合には、何物に由つても補ふこゝの出來ないものである。誰でも婦人から欺かれるものは、いつも彼にも同じく罪がある。

同第十七篇
一一。
神よ、れがはくば白からを天よりも高くし、光榮をあまねく地のうへに擧げたまへ。

十月三十日

ルカ傳第十一章
三六。
二一五頁頭註
を見よ。

此表情を有たない婦人に對しては、絶対に爾自身用心せよ、而してさういふこゝがあつても彼等をして爾の生活に重大なる影響を及ぼさしむるな。之に反してかやうでない婦人との交際は、精神的に頗る矩合のよきものである、而して女性の輕蔑は常に悪き徴候である。
婦人はまた彼等の方に於て、若し彼等が間違つた文化や教育に由つて毀はれてなければ、誰がわらい人であるかに就いて、頗る確實なる本能的感情を有つて居る。

十月二十九日

人 通例、吾人が吾人自身を知るより却て善く吾人を知つて居る。彼等は凡て、一般に而して利害の打算に因つて眩まされずは、此點に就いて世人が思つて居るよりは遙に明敏に且つ正當に判定するものである。

四二一

彼等は只だ彼等の稱讚のみを口外して非難を洩らさぬものである。此方面に於ける最も慰藉ある言は、箴言の作者の保證である。箴言第十六章七に曰ふ、「主もし人の途を喜ばゞ、その人の敵をも彼と和らがしむべし。」然し是れにては敵に對する保護は未だ彼に充分でない。

之に就いては下を参照せよ。創世記第二十章六、同第二十一章二二、同二十六章二六—三一、第三十一章二四、第三十三章四。詩篇第百〇九篇三〇、第九十一篇八一—一三、第八十四篇五—七、一一、第七十一篇七、第六十八篇一八—二〇、第六十六篇一〇—一二、第六十四篇七、八、第六十篇一一、第五十七篇一一。

凡て非難、若しくは批評及び反對のある場合には、其に於て如何なる正當なるこゝがあるかを、極めて良心深く吟味せなければならぬ、而して將來に對する利用を其から得なければならぬ。然しこもかく、殊更先方の言が全く正當である時には沈黙を守らなければならぬ。

新聞の場合には、誰が其を言ふか、其が先づ第一に重要である。是非個人的な考へられたる「新聞」でなく、況んや既に「輿論」になつたものでもなくして、大抵の場合、單に一定の人であつて、其人の提議が、猶ほ其新聞の讀者からの是認を要するのである。

十月三十日

吾人は性來皆「怒の兒」である。是は自然的人に於ては、老年になつて益々明らかに現はれて来る、それで多くの老人は、之が爲めに自身自身他人との厄介になる。

決して弱さでない真正の柔和親切は、一層高い生活の段も完全なる證據である。斯様な生活は、人の自分の生活が、「破滅の荒野」を通過して「結婚」神への接近の意味か！譯者の聖地に達した時に初て其人に現はれ得るのである。然し一步進んで之に就き語るこゝは多く益がない。是は異つた世界からの音

であつて、之に對して耳の開いた人は少ない。

十月三十一日

路可傳第十一章三六。吾人の内に起る最良にして最も決定的のものは、一般に常に電光的性質のものである。其は一の他の世界からの慈惠の光線であり、光の放射である、而して大抵は單に見識であるのみならず、同時に活潑なる行動への刺戟である。そうするに、一樣に急に此決心を爲し、而して直に之を實行することには、人間のする事である。然し此決心を爲したらば、其決心は平生は越へ難い障害を越へて激しく吾人を牽連れ上る黄金の羽毛の鷹である。天國への途は、學修の普通の規則にては全然測量することの出来ない全く獨特の途である。然し之を経験せなかつた人は、之を信すること欲しない。

葉落

晩秋は山また路をさすらひ、
紅葉落つ。

鳥は鳴かぬ、

これらの森の廣間の何處にも。

やがて霜と雪とは、

錦織なす森を蔽ふ。

いかに汝は今度痛なく言ふ、

「あゝ、もつと早く其が来ればいいのに。」

予は自分の性に敵まなつた、

其は捨てしまはれた。

今や眞面目の友達死が来る、
彼の次に生命来る。

十一月一日

若き人々には大抵は怖ろしきものである死の考は、正規の境遇に在り且つ良心の心配が之に加はらなければ、死するこゝの蓋然性が増加する割合には、此恐怖の性質を失ふものである。

然る時には死は、日々の睡眠覚醒の過程より根本的には餘り多く相違のない單なる過程として思はれる。吾人は勿論此過程の確實なる何等の報知を有たぬこゝは、さもなくまた誰人も精密に睡眠の過程を心に講くこゝが出来ない如くである。他方には近代の有名なる記者(トルストイ)は、死の接近に於ける感情に就いて次の如く述べて居るが、之は多くの他の人の經驗と一致して居る。「予は平生死生に結付けた思想から益々遠

ざかつた。死は予に取つては其の怖ろしさを失ひ、而して其は熄まない生の挿話の一を現はすものであるといふ認識に日々接近して來た。予は辛棒して否な喜んで死を期待し、之を迎うるに至つた。生命の繼續の確信は、予が内に於て強くなり、有らゆる疑惑が無力に消失し、而して屢々新に生れた兒の呱呱の聲のやうに喜ばしき叫聲が予の胸より湧出でんさする位である。無限の幸福感は予が靈魂を充たし、予は好き親しき朋友を俟つ如くに死を俟つ」。

大失敗と解き難い紛亂とに取つては、神が賜へる死は兎もかく、凡ての疑問を解決する唯一の猶ほ可能的である出路であり、多くの憎惡と忿怒とを鎮める仲裁者である。之に反して「死せん」と意志するこゝは、人生の困難から遁れんとする不誠實の手段である、恰も拙にして不正直なる遊戯者が骨牌の札や將碁の駒をこちあ雜ぜするやうなものである。吾人は、吾人が最早や趣味を有たぬからきて勝手に遠ざかる爲めに、此生

に呼ばれたのでなくして、神が正當の時に吾人を呼寄るまで、吾人、他人の爲めに有益なる存在を導かんが爲めに生を與へられたのである。約百記第五章一七—二六。

自分勝手に死ぬることに、毫も事が濟んでしまふものでないらしい。之には恐らくは更に困難なる他の生活が繼ぎ來るであらう。若し然らば、吾人は慥に此他の生活を勝手に斷絶することは出来ない。

十一月二日

路可福音書第十六章一九—三一。
卷末補遺九月廿六日の條を見よ。

路可福音書第十六章一九—三一。所謂「永遠の平安」に居る人が、猶ほ地上の生活の明瞭なる記憶を有ち、且つ該生活へ影響を與ゆる力を有つや否やに就ては、聖書は予の知る所に由れば何處にも明白に之に就て語つて居ない。上記の物語は成程直接には之に反對してはないが、しかしさもなく其からして且つ自然的の論理に従ひ、只だ善ならぬ人々が後悔

十一月二日

の情深く彼等の失はれた生活を記憶するに相違ない。こゝを寧ろ假定すべきであらう。

人が此世にて偶然同時に生活した凡ての人を、恩寵を受けた者の間に於てさへ、しかも永恒に見るこゝは、毫も特別に愉快である思想ではない。是は人々が恐らくは寧ろ全然終へてしまいたい又たしかも既に此世にて終へてしまつた實際非理想的である關係の消し難い回想を豫設する。忘却は既に此地上に於ける福祉の始である。而して此福祉は、有らゆる難儀の記憶あつて、忘却が無ければ成立ち能はぬものである。

浮罪界第三十一歌。

然しながら明瞭なる記憶の此明白なる非蓋然性にも拘はらず、亡くなつた眞の愛人との繼續する結合を信するこゝは、情の斥け難い要求である。吾人はまた折々斯様な故人の記念に接近を明瞭に感ずるやうに思ふのである。

十一月三日

人々は、聖、徳、正義に就き多く語つてはならぬ。正義は、聖書に曰へる如く(イザヤ書第六十四章六、耿眼の前には實に常に「汚れたる衣」である。

人が地上にて達し得るもの、彼に有りて而して他人の爲めになるものは、神に對する愛、從て凡ての眞ミ善ミに對する愛、及び凡ての同胞に對する眞實の親切である。之を絶えず自分の中に感ずる人は、可能的の最高の人生の目的を達したものである。

十一月四日

人間に二種がある。一は吾人が幸福の時に頗る愛嬌あり世話好きであり、然し永續的の不幸が吾人に生ずれば直にそつミ退く者である。他は

屢々愛嬌は之より少ないこミがあるが、吾人の不幸に際しても吾人に伴ふ者である。親愛なる讀者よ、爾は何れに屬するか、爾自身之を決定せよ、又た何ちらが一層麗はしくあるかをも決定せよ。然しこミかく第一の種類のものこミ一旦知つたら、之をして最早爾の心に根を張らしむるな。彼等は好き時に於ける娛樂であつて、其以上の何物でもない。

十一月五日

予は信仰を論ずる書籍の音に充棟のみでないこミを知つて居る。然し希伯來書第十章三五—三九及び同第十一章が包含着して居るものに優るものが其に就いて書かれたこミは未だ決してなかつた。

是れ猶ほ現今でも、此堅固なる確信を有ち、而して如何なる事情の下に於ても之を固持する勇者ミ、見ゆるこころのもの、み信じ、而して其に従ひ自分を理むる伶俐者ミの大差別ある。人若し信仰より他に全く

十一月五日

ヘブライ書第十章三五—三九。
 十月一日頭註三八四頁を見よ。
 同第十一章。卷末補遺を見よ。

十一月十三日

マコ傳第十五

章二九。

往來の者イエ
スを語り、首
を擡りて曰け
るは、噫聖殿
を毀ちて、之
を三日に建つ
る者よ。

十一月十五日

ヨハネ福音書

第七章一五―

一八。

満足を與うる途がないこゝを一旦曉つてしまへば、彼の信仰は堅くなる。

四三二

十一月六日

頗る會得し難いこゝであるが、然し一旦之を會得すれば、吾人の全思
考に大影響を及ぼすこゝは、活躍たる幸福の感は、何時も新らしき仕事
に辛苦若しくは悲哀に對する準備強壯物に過ぎないものたるべきこゝ
(クロムエルの所謂前拂の報酬)、然し甚だしき試練に落膽は、常に新ら
しき一層大なる福祉と神の力への戸口であるといふこゝである。もし
たら人々は、不幸に居て平安になり、幸福に居て眞面目に且つ思慮深く
なる。

十一月七日

ダンテの地獄界に於けるフランツエスカ・ダ・リミニの有名なる言、*Nostrum*

ユダヤ人これ
を奇み曰ける
は、此人は未
だ學ばず、如
何して書を識
るや。イエス
彼等に答へて
曰けるは、我
教ふる所は我
教に非ず、我
を遣はし、者
の教なり。人
もし我を遣
し、者の旨に
従はば、此教
の神より出づ
るか又己に由
りて言ふなる
かを知るべし
。己に由りて

magior dolore che ricordarsi del tempo felice nella miseria 「悲慘に居て幸福なる時を回
想するより大なる悲痛はない」は異なれる生活の見解の有する全く異なれ
る作用を最もよく現はして居る。最大の不幸に於ても靈魂の最奥の核が、
之から觸れられずにあり、且つ以前靈魂に豊富に與へられたる善と美と
を感謝して想出すこゝが出来る。然し幸福が只だ歡樂のみから成立て居
たならば、上記の言葉は、何れの老年者も悲痛に經驗する怖ろしき眞理
を有して居る。

十一月八日

ゲヌアのカツタリナは、神に對する愛は凡ての他の愛を除外する、然
し吾人は同胞を愛してはならぬか、この正當の問を起して居る。彼女は
之に對する次のやうな答を受取つた。「われを愛する者は、わが愛する一
切のものをも愛する。爾は出来るだけ多く爾の同胞の精神的及び肉體的

四三三

言ふ者は、己の榮を求むるなり、己を道はし、者の榮を求むる者は異なり。其裏に不義なし。同第六章六三、六八。六月六日頭註二三四頁を見よ。マタイ傳第七章二九。一一七頁頭註を見よ。

十一月廿日

幸福を増進するやうに用意してあらねばならぬ。眞の愛は同胞を彼自身に於て、なくして、神に於て愛する。是は亦た同胞にも一層適合がい。何故なれば彼等が彼等自身の爲めに愛せらるゝ、愛は、時として獨特の動搖を受け、且つともかく不易確實が少ないからである。

四三四

十一月九日

人若し中流階級に生るゝの幸運を有つならば、二のこみを餘り少なく經驗する。即ち手段に救助を求むる爲めに他家の階段を昇降せねばならぬこみは、なんぢ難いこみである。三といふこみ、生活の所謂優美は如何に僅かの満足を與ゆるものであるこみの二である。下層階級は第一のこみを知るけれども、おのづから第二のこみを尙ばぬ。其故に彼等は言語舉止に於ては多少粗野であるけれども、其以上の階級よりは、自制を行ふ

高尚なる人物を一層多く有つて居る、而して中上流の上品は頗る無情なる自己主義のよく磨けた殻に過ぎないこみが屢々ある。最高の交際社會に於ては、時として所謂「高き生活」全體の空無を頗るよく洞察して居るものがある。然し彼等は之から脱出するこみが出来ない。

十一月十日

善及び惡への刺激は、大抵は電光的である。善には直に之に應じ且つ實行を以て着手せられなければならぬ。惡には一樣に直に意志の斷乎たる抵抗を向けなければならぬ。「かくして星辰に至る」。Sic itur ad astra

十一月十一日

人若し彼が一抔の土になる日を豫め精密に知らば、彼は恐らくは最早や烈しく人を怒らぬであらう。

四三五

詩篇第三十二篇八、九。われ汝をおしへ、汝をあゆむべき途にみちびき、わが目をなんぢに注てさささん。汝等わきまへなき馬の如く驢馬の如くなるなかれ、かれらは響たづなの如き具をもてひきこめずは、近づき來ることなし。

十一月廿一日

イザヤ書第四
十八章一〇。
三五、三六頁
頭を見よ。
ダンテ淨罪界
第二十七歌一
六一二一。
予 手をくみ
合せながら横
たはり、火を
視、嘗て焚殺
された人を見
たことをあり
くくと想出し
た。予がよき
案内者は予が
方へ向き、而
して井ルギル
は予に言つた
、「予が子よ、

十一月十二日

小心は涌溢せる自己感、生活感なる覇氣の如く、惡の精神から由來する。爾若し爾の心に之に氣付いたら、其が蔓るに先ち、斷乎として直に其から遠ざかれ。

神から起り、而して吾人がいつも出來るだけ有たねばならぬ靈魂の調子は、自己の弱きこゝ。然し同時に、凡ての行動に患難に對して吾人を堪能たらしむる神の愛ミカミの充分なる信賴の平靜なる感情である。是れ單なる弱きと熱病的興奮との反對である精神的健康である。

人若し此精神的健康を充分に有たぬ時には、出來るだけ、若しくは決して行動、例へば手紙を書くこゝこゝをすればならぬ。斯様な際にはいつも生じつかなこゝ、若しくは全然誤れるこゝが生ずる。然しかやうなこゝへの誘惑は、殊に熱病的状態に於て極めて大である。爾等常も之

に反抗せよ。

此處には苦惱
はあらうが、
死はない。

十一月十三日

馬可傳第十五章二九。「通過ぎる者彼を語る」此語は嘗て予が生涯の殊に困難なる時期に於て、「通過ぎる者」なる語に語勢が置かれるやうな獨特の矩合に予に的中した。實に今日でも、その行動所業が只だ通過的である人のみが、基督ミ彼の繼續者ミを誹るのである。

十一月十四日

結婚は決して無關心の事件でなくして、實に恐ろしき事件である。其は、個人に取り民族に取り、祝福の源泉でもあれば、また民族が最早全く起つこゝが出来ないやうな矩合に彼等の上に懸る呪詛の源泉でもあるこゝがある。是れは個人に於ても又た廣く一般に於ても、頗る數々指示

同天國界第十
七章五〇―六
九ダニエル第
三章一六―三
〇。共に卷末
補遺を見よ、
十一月廿二日
ミカ書第七章
八一―〇。
六月九日頭註
二四三、二四
四頁を見よ、
セパニヤ書第
二章三
すべてエホバ
の律法を行ふ

新地の遜るも
のよ、汝等エ
ホバを求め、
公義を求め、
謙遜を求めよ。
。さすれば、
汝等エホバの
忿怒の日に或
は置くさるゝ
ことあらん。
ハバクク書第
二章四、二〇
視よ、彼の心
は高ぶり、そ
の中において
直からず、然
れど義しき者
はその信仰に
よりにて活くべ
し。

され得るこゝである。

婚禮の日は、單に婦人だけでなく男子の生涯に於ても、最も決定的の日である。婚禮の幾多の娯樂は、事件の充分なる嚴肅を當事者其の家族から多少隠蔽する爲めの秘密なる意味を有つに過ぎないこゝが屢次あるかも知れない。

十一月十五日

眞正の智慧は何處より來るかを別に知らなければ、約翰福音書第五章一九、三〇の語は、之に就いて吾人を教ゆるであらう。基督にしてしかも此法則の下に立つたならば、吾人は吾人に對しても開かれてあり而して基督の言葉と行爲とに於て明白なる證據を有する同一の本源を求めずして、吾人自身から智慧を見出し、若しくは處世の智慧の學校に於て之を學ばんと、如何にして吾人は敢てするであらうか。

約翰福音書第七章一五—一八。同第六章六三、六八。馬太傳第七章二九。

十一月十六日

然りさいへど
もエホバはそ
の聖殿に在ま
すぞかし。全
地その御前に
黙すべし。
同第三章一六
、一八、一九。
我聞て勝を斷
つ、我唇その
聲によりて震
ふ。腐朽わか
骨に入り、我
下體わななく
。そは我患難
の日の來るを
待てばなり。
其時には即ち
此民に攻寄る
者ありて之に

眞正の聖者の大多數に就いては、遺憾ながら吾人は彼等の晩年のこゝを極めて僅かしか知らぬ。知られてある彼等の内的經驗は凡て、彼等の完成の階段の前に當る時期からである。只だ折々晩年からの稀なる發言が彼等の精神の一種の瞥見を與ゆる。かくてバイヨンのエリザベート(千六百十三年生)の晩年からの隨はしき言語がさうである、「予は生命の呼吸の如く輕き心地がする」。是れ吾人の生活が正しく經過したら、吾人皆吾人の生活の終に於て言ふこゝが出来なくてはならぬこゝである。現今教養ある人にして、彼等の哲學と共に老いたる極めて多くの人々に於ては、彼等の氣分は、人の知る如く、之は全く異つたものである。

押通らん。

然ながら我は
エホバにより
て樂み、わが
拯救の神によ
りて喜ばれん
。主エホバは
我力にして我
足を鹿の如く
ならしめ、我
をしてわが高
き處を歩ゆま
しめたまふ。
俗長これを我
琴にあはすべ
し。
エセキエル書
第三十四章二
四―二七。
我エホバかれ

十一月十七日

四四〇

予は予が生涯中、人間輕蔑者になつたかも知れなかつた時を屢々有つた。予が其にならなかつたことは、さもなく人間社會の上層の予の知合の御蔭でなくして、却つて賤しき人々の生活の氣質の洞察の御蔭であつた。

人は世界に於ける小なるものに對する眼の好愛を得るや否や、彼は吾人の時代の災難なる厭世主義から永久に安全である。之に反して若し人に、高きもの、貴きもの、現象中の顯著なるものに對する只だ秘密なりさもなく一嗜好が出来てある以上は、是れ現今教養ある及び半ば教養ある階級に於て殆んぞ除外なく事實であることであるが、「此世界の君主」が猶ほ彼の權利を失つてしまつて居ない、而して確實なる幸福は望まれ得ない。此に附言すべきことは、小なるものは、人苟も之に従事せ

らの神さならん。吾僕タビテかれらの中に君たるべし、我エホバ之を言ふ。我かれらと平和の契約を結び、國の中より惡しき獸を滅ぼし絶つべし。彼等すなはち安らかに野に住み、森に眠らん。我彼ら及び吾山の周圍の處々に福社を下だし、時に隨ひて雨を降らしめん

んを欲するや否や、遙に興味あり愛嬌あるものであることである。その造營を観察せられた蟻、或は罷勉なる蜂、或は鸞は、獅子、若しくは鷹況んや鯨なきよりは、遙に注目し値する且つ一層興味ある動物である。又たアルブスのさ、やかなる花は頗る立派なるチューリップ及び近代の簇葉植物よりは、遙かに美しきものである。人間に於てもその通りである。世界に於ける小なるものは注意せよ。是は人生を一層豊富にし一層満足を與うるものである。

十一月十八日

吾人は吾人の眞の内的生命を費やすことなくしては、外的の敵から離れることは出来ない。敵は、吾人が基督の組合の有効なる一人員になり始むるや、却て増加することゝ屢次ある。それであるから吾人は勇氣を内的の平和を求めなければならぬ。他のものは一切何等の救助を吾人

四四一

是すなほち福
社の雨なるべ
し。野の樹は
その實を結び
地はその産物
を出さん。彼
等は安然にそ
の國にあるべ
し。我がかれ
らの軀を碎き
、彼らをその
僕となせる人
の手より救い
出す時に、彼
等は我のエホ
バなるを知る
べし。
イザヤ書第四
十三章一一一
一三。

に與へぬ。吾人は所謂幸福に於てより、不幸の最中に一層幸福であり一層欣怡であるやうに、勇氣平和の力が、全く吾人の靈であるここの出來ない一の靈から、屢々頗る判然明瞭に與へらるゝここのは、單に大慰藉であるのみならず、また不可見のもの、信仰の強めである。是れ不可見の世界の實在に對する眞實の駭し難い證明法である。

四四二

十一月十九日

神に奉仕するこゝは、人の存在の有らゆる瞬間に、凡て彼の力ミ手段を神的意思の完成に使用するこゝの謂である。斯様な生活、而して只だ斯様な生活のみが、決して曇のない快活を與へる。而して神の奉仕に於ける生活の此欣怡に吾人は呼出されてあるのである。他の「神の勤」は多く吾人に益しない、而して神はまた確かに之に何等の喜を有たない。

十一月二十日

予は予が生涯屢々心配の魔、後に毫も生じもせなかつた、若しくは頗る堪へ易かつた將來の災難の空想的表象から迷はされた。而して此災難を避けやうとする企は、時としては其結果に於て災難其自身より一層悪くあつた。然るに他方には予神に信頼した時には、神は常に予を助けた。此信仰がなければ、實際あるやうな此世を一般に切抜けるこゝは容易でない。然し此信仰があれば誰人も充分に之が出来る。

此信仰は、若し之が實際に在れば、既に其自身が幸福である。何故なれば此信仰は欣怡と安心とを以て靈魂を充たし、而して此安心は、それから生ずる結局の利益と殆んご一樣に喜悅の情を與うるものである。之を反對に、厭世主義は、不幸其自身ご一樣に不幸ならしむる感情である。されば爾自身何れをか擇べ。是れ爾に屬するこゝである。

吾人は、吾人若し少なくも詩篇第三十二篇八乃至九節の教訓に従は

四四三

荒野さその中
のもろくの
邑さケダル人
の住めるもろ
くの里は
聲をあげよ。
セラの民は歌
ひて山のいた
ゞきよりよば
れ。榮光を
エホバにかう
ぶらせ、その
頌美をもろも
ろの島にて語
りつけよ。エ
ホバが士を知
く出てたまふ
、また戰士の
如く熱心を起
し、聲をあげ

てよばり、
大能をあらは
して仇をせめ
給はん。

同第四十六章
一一。

五月廿八日頭
註二二八頁を
見よ。

十一月廿四日

黙示録第二十
一章二二。

われ城の中に
野あるを見ず
。蓋主たる全
神の神及び羔
その殿なれば

んご欲すれば、吾人の生活を頗る樂に形成するこゝが出来る。

四四四

十一月二十一日

侮辱に對する恐怖は、品良き境遇に生長した人に於ては、萬事に附着し、而して彼等が爲すこゝが出来、又た爲すべきものである多くの事に於て、世人が思つて居るよりは遙に高い程度に彼等を阻止するものである。彼等の中には、實際人生の割合につまらぬ不愉快事の中に數ふべき有らゆる新聞の非難を恐怖する人がある。若しかういふ人が彼の生涯中一度屈辱の中に沈められ、而して害傷を受けずに其から出づるならば、是は神の慈恵である。是れ以賽亞書第四十八章一〇の意味である。

斯くなつたら初めて彼は最早恐怖を感じない、而して彼は特に共和國に於て、單に黨人としてより更に善きものに使用せらるゝこゝが出来る。ダンテ淨罪界第二十七歌一六—二一行。天國界第十七歌五〇六—九行。

也。

但以理第三章一六—三〇。

十一月廿五日

マコ傳第十六
章一七、一八。
三二頁頭註を
見よ。

十一月廿九日

黙示録第三章
一二。
同第二十一章
七八。

十月一日頭註
三八五、六頁
を見よ。

左右から彼を誘引し若しくは彼に甚だしき印象を與へんごする多くのこゝに對しては、現時の人は毎時も單純に次のやうに言はなければならぬ。「予は總て其等のものを渴望せぬ。其の何れも予が靈魂を充たすこゝは出来ぬであらう。予は真正の善を欲する。」

十一月二十二日

神の慈恵に由來する何れの昂揚にも、必ず人間からの屈辱若しくは輕蔑が之に先だつ。此後者は全く確實なる徴候である。人は、彼が有する意義は人間の善なる若しくは惡なる意志に由りて、なくして神命に由りて彼に屬するものであるこゝを明白に曉り、而して之に従ひ行動せなければならぬ。

四四五

十一月三十日

ヨハネ福音書
第四章一三、
一四。

イエス答へて
曰けるは、凡
て此水を飲む
者はまた渴か
ん。(以下一
一九頁頭註第
二行を見よ。)
同第七章、三
七。
箴言の末の大
なる日に、イ
エス立ちて呼
り曰けるは、
人もし渴かば
我に來りて飲

四四六

斯様な昂揚は、其故にまた人を謙遜たらしめて、傲慢たらしめない。而して斯様な屈辱は人を確乎に且つ安心たらしむるものである。是れ世の普通の行方と全く反對である。

米迦書第七章八、一〇。西番雅書第二章三。哈巴谷書第二章四、二〇、同第三章一六、一八、一九。以西結書第三十四章二四—二七。以賽亞書第四十三章一—一三、同第四十六章一一。

十一月二十三日

爾若し心が全く痛むやうな心地がし、若しくは爾の神経を最早や充分に支配することが出来ないやうに感ずるならば、爾は此状態にて人に接することを避け。之を神に訴へ。人に訴へるな。人にはモ既に再び落付の或る度を以て接せよ。之が出来難い間は、動物が病を感じて居る時に本能的に爲す如くに、爾も控ゆるがい。然し現今の人々は、かやうな

め。

同三八。

一一八頁頭註

を見よ。

同四〇。

民の中に多
の人、この言
を聞て、此は
誠に彼の預言
者なりと。
同四六—四八
下支答へて曰
けるは、未だ
斯人の如く言
ひし人あらず
。パリサイの
人いひけるは
、爾らも亦た
、感はされし乎
、有司またバ

時に初めて本當に、實際は大抵彼等を救助することに出来ない他人に押かけるのである。

人若し割合に健全なる者として、斯様な苦める意志の病氣者若しくは神経的に刺戟せられた人との交際せなければならぬ時には、彼は彼等を酷く非難してはならぬ。若しくは落付くやう警告してはならぬ、若しくは彼等の懊惱を餘りつまらぬものにして止めさすやうに説勸めやうにしてはならぬ。靜かに彼等と交り、有らゆる興奮することを除去り、平靜な快活さが彼等に缺けてあつたら之を彼等に作り與へ、彼等の一時的興奮した言葉を重大視せぬこと、是れ大概は其當座の最良策である。頗る多くの人々は、彼等の弱き時に於て、彼等は他人を救助せなければならぬといふことにて、彼等自身救助せらるゝものである。彼等はかくして最も容易に自分を興起することに出来る。

四四七

十一月二十四日

約翰默示錄第二十一章二二の言葉は、教會は恒久的のものでなくして、吾人の信仰の途に於ける時間的である頗る有力にして有益なる支持であることを明瞭に示して居る。吾人は此眼目が何んであつて其が變らぬことを看過せざらんが爲めに、常に之を眼中に置くことは實際に善いことである。

十一月二十五日

吾人が基督自身の口から知る言葉は、皆な頗る大なる「實在」を有つて居る。其等はいつても文字通りに解釋せられなければならぬ。この事は馬可傳第十六章一七、一八の言語に就いてさへも有効である。此の何物も起らない場合には、基督教は、それが有り得且つあるべきであるやうに未だ充分至らぬのである。

リサイの人の
中に、彼を信
する者あらん
や。
イザヤ書第四
十三章一九。
八八頁頭註終
より六行目乃
至八九頁頭註
四行目までを
見よ。

十一月二十六日

何事に於ても何等の種類の多くの廣告が用ゐらるゝ時には、此事を信用すな。眞に善にして且つ神の意に適ふ事物や人間は、廣告なくとも知らるゝものである、而してまた他方には、最初は頗る善きものがやうな廣告に由りて損傷せらるゝものである。基督教自身が之の古典的の例である。

十一月二十七日

人が詳に知る事は凡て、無知識とは反對に、畢竟善きことである。吾人は世界の性質の出来るだけ完全なる知識に由り、之を自分の有にせなければならぬ。

然し予に斯様な知識がなかつたら、予は人間の幸福には極めて僅少な

る直接の關係ある事物に、實に予が一生を捧けたかも知れなかつた。享樂や單の金儲よりは、幾百倍も、斯様な直接には甚だ必要ならぬまた有益ならぬ科學に一生を捧けたかつた。

特に婦人の著しき多數が、無益なる存在の日々増加する深い感情を有して、精神的及び肉體的の本當の健康を得ざること、寧ろ彼等は彼等が健康から得るものを健康に對する絶わざる心配を以て悪くし、而して最後に全く其を喪ふこと、是れ極めて思惟し易い所である。醫師は彼等に何よりも先にかう言ふべきである、「仕事をなさい。あなたがたも凡ての人と同様に働くのが使命であり、義務であります。あなたがたのつまりぬ我よりはもつと偉大なものに興味を御有ちなさい」。然らずは總ての醫學的救助は徒勞である。

十一月二十八日

仕事に於ては毎時も先づ第一に最も必要なことを爲せ。然し活潑に且つ眼目を捉へて之に懸れ。是れ時間の餘裕を有つ手段である。第二の手段は、殆んど是と同様に良き手段であるが、凡て不必要な仕事や努力を避けることである。

人若し其次に生涯の中風に、娛樂若しくは社交的義務を稱せられたる極めて不必要なるものを拋棄することが出来れば、過度の勉強もなく又た健康もよく保存して、普通の仕事の分量の二倍三倍を擔ふことが出来る。

十一月二十九日

征服即ち此生に於て有らゆる不善を醜の勝利者たることは、生活の本當の符語である。然し是は萬事を輕視し、若しくは出来るだけ戦闘を避け或は塗抹し、若しくは最後にストア的平氣を以て頭を屈し、而して

敵に路の全幅を開かしむるこゝの謂でない。否な、是れ神が闘士に與へんこゝする力を以て戦ひ、然る後ち「凡ての物を得る」(黙示録第廿一章七)の謂である。

黙示録第三章一二、同二十一章七、八。

正に一の生長である内的生長には忍耐が必要である。而して此生長の各部分は、しかも其の充分の時を要する。然しそれにも拘はらず戦闘は、屢々想像される如くに必ずしも永續せない。却て麗はしき希伯來書が云へる如く、既に此地上に於ても、「神の民には平安が現存し」、而して「此平安を得たる人は、神が彼の業から休む如くに、彼の業から休むものである」。

十一月三十日

神の存在の經驗なくば吾人は皆吾人の心の奥深き思考に於て無神論者になるであらう。凡ての教會的のものも全く之から人を保護するこゝは出来ない、又た無神論や不可知論の有らゆる無蓋然性も之が出来ない。斯様な經驗がなければ、現今の民族も急速の歩を以て全くの不信仰に向ひ、而して進化説の意見であるやうな高等動物の生活に向つて進行くであらう。

然し神は勿論大體に於て證明せらるゝ。第一に、只だ三四十年間自然科學が哲學より優越の地位を占めた後ち、既に始まつて來た深き不満足に由り、次に酷だしき誤謬を其結果としての怖ろしき運命に由りて證明せらるゝ。それで誰でも思索する人々は眼を開き、進化論的世界は成立つこゝが出来ない、従て既に數千年以來人々之を意識せずして成立たなかつた、却て其は學者の假定であるといふこゝを悟るに至つた位である。

神を信ぜない人は、彼が苟も理想的要求を有つ以上は、自分の爲めに何か人間的理想を作り(例へばゲーテの如く)、而して其が苟も完全の標準を減少せざらんには、其の有たない有らゆる長所を假作せなければならぬ。

然し之を爲すに餘り恰憫か若しくは世智のある者は、世界に於ける有らゆる善を疑ひ、而して嘲弄を以て其を超越せんを試むる絶對的懷疑説に陥る。然しさうなれば生猶ほ何の價値あるか。

基督は之からの救済を吾人に齎らした。彼は人類に眞實の理想を返し與へた。

ダーウィン自身以後英國に於ける科學的進化論の主要なる代表者は、折々次のやうな著しき言を爲して居る。(ハクスリ教授、傳記ミ書簡)。

「神の攝理は、人間を通じて作用し、而して道德を生じたミ言ふことは

適當であらう。其故に生物世界の一小部分の範圍内に道德的攝理がある。宇宙の極微的斷片の此小地點を通じて、義への傾向の流が流れて居る。かく灌漑されたエデンの花園の此頗る基本的である萌芽の外には、予は重に他の機械仕掛の作用より別に義でもなく不義でもない生存競争の手段に由る宇宙的過程の完全への目的の流以外には、如何なる道德的目的も、何物をも發見せない」。

「攝理の教理は、自然界の最もつまらぬ隅に於ける一の場所からも偶然なるこゝが全く除外せらるゝ、こゝいふ意味に解せらるべきものならば、而して其は宇宙的過程は有理的であるこゝいふこゝの強き確信を意味するならば、是れ凡ての時を通じて亂れざる秩序が宇宙を支配して居るこゝいふ信仰であるが、予は之を承認するのみならず、また凡ての眞理の最も重大なるものであるこゝ思はんこゝ欲して居る」。「連續的進行を永久に支配する調和的秩序、徐々ニ織成す物質ミ力ミの斷絲なき織物、吾人ニ無限ミの

間に横はるあの帳帷、吾人のみが知り且つ知り得るあの宇宙、是れ科學が世界に就いて畫く圖である」。

「予は社會に福祉たるべき國教の存在を思惟するこゝが出来る。是はかやうな教會である、即ち此教會に於ては、神學の抽象的命題が反覆せらるゝ爲めでなくして、眞にして正しく且つ純粹なる生活の理想を人の心の前に置く爲めに、毎週勤行が捧げられねばならぬ教會である。又た此處には日々の心配の重荷から疲れてある人々が、僅少の人から達せられなければ、凡ての人に可能である一層高い生活の觀照に於て、一時の安息を見出さねばならぬ場所である。此處には競争と事務との人が、彼が貪る報酬は平安と慈悲とに比較したら、畢竟ごんなにつまらないものであるかを考ふ時を有たねばならぬ場所である。大丈夫、若しかやうな教會が存在するならば、之を倒さんご求むる人はないであらう」。

讀者よ爾はまた之に加うるに次のこゝを熟考せぬであらうか。

(一) かやうな教會の只だ猶ほ少しく一層堅固に一層根本的に形成されたものを吾人は欲する。

(二) 「調和ある宇宙秩序」は、之を作り而して調和的に保存する靈がなければ、あるこゝは出来ない。かやうな秩序は偶然に而して自然には出来ない。

(三) 此秩序を就せる靈が只だ部分的に、しかも只だ小部分的に世界を支配し、而し大部分を其自身の運命に委ぬるこゝは、眞實たるこゝは出来ない。却て此一見無支配のやうであるこゝは、調和ある世界秩序の一部分であつて、只だ吾人が正しく了解せないだけである。全能でなく、若しくは全世界を創造せなかつた且つ支配するを欲せぬ神は、是れ無神より却て吾人の了解する能はざる所である。

人は恐らく現今また斯様な學者に次のやうに言ふこゝで出来やう。「爾は神の國より遠ざかつて居ない、爾自身思つて居るよりさへも之に接近

して居る。是れ爾の戦は眞實ある通りの神へ對しては無くして、爾が想像して居る妄想に對してあり、爾の氣に入らない人間的教會的制度に對してあり、基督の教會に對してないからである。若し爾の心に於て此意見に反對するものがあつたら、是は眞理の愛なる形式を取れる少し科學的なる自負である。然し此自負は何等の充分なる確信を與へず、さもかく何等の充分なる満足を與へぬものである。

約翰福音書第四章一三、一四、同第七章三七、三八、四〇、四六、一四八。以賽亞第四十三章一九。

X X X X X

十二月一日

老年期の始まる或る一日、人は一旦過去に結末を就けなければならぬ。不興もなく悔恨もなく之を爲さなければならぬ。過去なる巻を閉ぢ、而して最早之を開かぬやうにせなければならぬ。過去にあつた凡ての善き事に對して感謝の念を抱き、殊に万事が善き結局に導いたことを感謝し、最後に、頗る多くの事が最早起るの必要なくして、却て永久に落着いたことを感謝せよ。

其次には全く異つた生活である所の「永遠の生活」に向つて進め。此生活に入る條件は、約翰福音書第十七章三及び第六章四〇にある。前途は以後無制限である。

十二月一日
ヨハネ福音書
第十七章三、
永生は、
唯獨の眞神
なる爾と其遣
はし、イエス
キリストを知
る是なり。
同第六章四
〇。
凡そ子を見て
之を信する者
は永生を得、
われまた

これを末の日に甦へらすべし。是われを遣はし、者の意なればなり。
ローマ書第四章七章。
その不法を免され、其罪を蔽はる、者は福なり。
詩篇第三十二篇一。
その愆をゆるされ、その罪をおほはれしものは福なり。

吾等の上への巡禮中、
一層大なる一層深き教を學びつゝ、
吾等は猶ほ働の裡に祝福を受け、
決して倦まず、決して息まず、
而していつも新しき力を以て
聖きもの、眞のものに仕へかし。

デーモン・スタンリ

然し猶ほ其上或事を言はなければならぬ、即ち、其は「罪の免赦」だけでなくして、猶ほ其以上のこと、即ち罪の自分の忘却といふことである。
羅馬書第四章七、詩篇第三十二篇一は、「免し」と「蔽ふ」の此差別を爲して居るやうに思はれる。是は時間的に遠く隔りてあり得る二の異なる階段である。然し人間自身に於ける惡の有らゆる記憶の絶滅を以てのみ神の免赦は完成せらるゝ。何故なればそうするに、正に此苦しき記憶が拒ぐべきはづの後戻のあるを恐るゝ、こゝがないからである。

神の無限なる慈惠の福祉ある感情のみが残つて居るやうに、總ての罪同時に人生の有らゆる醜ミ困難ミの記憶が、一般に沈んでしまふレーテの流は、ダンテに於ては、あなたなる天堂界に在るのでなくして、猶ほこなたなる淨罪界にある。然し以前に凡て彼の過失を誠實に承認し、而して眞實に悔いた者の、みが、既に此の地上に於ても過去の一切の苦しき記憶から全然免れるであらう。
淨罪界第二十八歌一二七、一二八行。同第二十九歌三、七一行。同三十歌一四二—一四五行。第三十一歌四〇—四二行、九四—一〇三行。

八歌以下補遺を見よ。

十二月二日

マタイ福音書第十一章二十八—三〇。

九月一日頭註三五一頁を見よ。
同第十九章二十九。

凡て我名の爲めに家宅或は兄弟、或は姉妹、或は父、或は母、或は妻、或は子、

レーテ川

「免赦」は恩惠の満てる言葉である。
然し最後の言葉ではない。
吾等は慈惠の場所にて、
吾等の罪を記憶して居るを欲せぬ。

或は田疇を棄つる者は、百倍を受け、かつ窮なき生を嗣がん。

ヨハネ福音書第一章一二。彼を接ぎ、その名を信ぜし者には權を賜ひて、此を神の子となせり。
同第六章三七。
一九頁頭註を見よ。
同第七章一七。

吾等は吾等自身の胸の籠に記憶のあるを欲せぬ。
新らしき生命は今や最も明るき日の光に榮ねればならぬ。

吾等は他人が吾等に爲したことの記憶も欲せぬ。

「免赦」のこゝを語る口はいつもは心にて復たかこつ。

吾等は地上の思の達せぬ天國をぞ欲する。
吾等は最後の影も白くなる光の流を欲する。

十二月二日

「先づ基督教を試みて見よ。」吾人は凡て惑ひ且つ不幸なる者、若しくは孤獨なる人にかく叫びたい。爾は慥に凡てあられ得る他のものを試みたに相違ない。先づ基督教を試みよ。其は親しげに爾自身を其に招くのである。

馬太福音書第十一章二八—三〇、同十九章二九。約翰福音書第一章一二、第六章三七、同第七章一七。

然し凡て其の約束に責任を負ふ最も單純にして最も確かな基督教を試みよ。其は福音書にあるまゝの基督の言葉であつて、他に無い。他のものは凡て添加である。其は恐らくは頗る善且つ有益なるものであらうが畢竟添加には相違なくして、一樣な價值を要求することは出来ない。其を要求することは使徒自身も決して好まなかつたことであらう。爾は勿論初は基督の「神性」さへも信するに及ばない。基督自身が初學者には充

四五頁頭註を見よ。
マタイ福音書第十二章三二。
言を以て人の子に背く者は赦さるべし。
然れど言を以て聖靈に背く者は今世に於ても、亦來世に於ても、赦さるべからず。
ヨハネ福音書第六章六八、六九。
シモンペテロ答へけるは、

主よ、我儕は誰に往かんや。永生の言を有てる者は爾なり。又たわれら信じて知る、なんぢは活ける神の子キリストなり。

マタイ福音書第二十一章四。同第二十四章三五。共に二四九頁頭註を見よ。

十二月四日

分明瞭に之を免じて居た。若し爾彼の言葉に其の受納より生じた凡て人間の言葉との相違を感じくならば、後になつて此神性は全くおのづから爾に明かになるであらう。

馬太福音書第十二章三二、約翰福音書第六章六八、六九。

基督教は、其が成立してより千九百年、而して凡て其他の存在物の非常なる變化にも拘はらず、丁度基督の復活後の第一日に於ての如くであり、而して當時の如く一樣に確信ある従者を有て居るこゝに、此長き時期中此真理に觸れた有らゆる誤りたるこゝ若しくは誇張されたこゝは、いつも亡びてしまひ、而して此真理を只だ益々明瞭に益々説破力強きものに殘して置いたこゝに、凡て此等のこゝは實に凡て聰明なる人々に、馬太福音書第二十一章四四、若しくは同第二十四章三五に言はれてあるこゝの真理を明白たらしむべきものである。

此教の「果」もまた、古代の神話、佛教、支那哲學若しくは回々教の教

マタイ傳第二十四章三六、その日その時を知る者は惟わが父のみ、天の使者も誰も知る者なし。

の其は、全く異つたものであつた。其にはたゞひ多くの不完全なるものがあつても、其は此教の遵奉より來たのでなくして、却て其の不遵奉より起つたのである。基督教徒にして凡て只だイスラム教の民族の如く忠實する信者であつたならば、世の一般の状態は、其が現にあるより限りなく多く善きものであつたらう。

言者の言 十二月三日

基督教を知り且つ評價するこゝを學ぶに他よりは遙に優れた最良の手段であり、且つ永くそうであらう手段は、眞面目に聖書を讀むこゝであるが、爾て且敢て之を試むるならば、爾は先づ第一に恰憫に爾の弱きこゝ、場合に依りては此讀むこゝに氣乗のせない「舊きアダム」を和協せ、而して益々興味をなむ或は了解も出來ないこゝが爾の現はれて來るや否や、讀むべき智識はるなを、其のこゝにある。然し其のこゝ

イエス進みて
彼等に語り言
ひけるは、天
のうち地の上
の凡ての權を
我に賜はれり
是故に爾ら
行きて萬國の
民にバプテスマを施し、之
を父と子と聖
靈の名に入れて、弟子とし
且つわが凡て
爾らに命ぜし
言を守れと彼
等に教へよ。

聖書の各篇を皆知るこゝは、疑もなく善きこゝである。然し其の多くは（吾人之れ無くして濟ませやうと欲せないが）、此階段に於ては、初學者にはつまらぬ若しくは奇怪な印象を與ふるこゝは否むべからざるこゝである。先づ福音書から始め、是は最も重要であつて、誠實である誰人にも間違なき印象を與へる。其次には、古代の他の如何なる歴史書も比するこゝの出来ない歴史的の篇を讀め。其次には詩篇と約百記。次に豫言者の書。最後に使徒の書簡、使徒行傳、及び吾人の歴史が始まる默示録を讀め。爾は箴言、傳道の書及び雅歌を、古き詩と格言との興味ある作を見るこゝが出来ぬ。是等は、其が佛陀から由來し、若しくは吠陀にあつても、非常に貴まるゝであらう。

こゝもかく聖書の是れ或は彼の篇に對する嗜好は、全く個人的である。詩篇第三十七篇及び第七十三篇は、「人が悪しき者の、幸運」の爲めに内的誘惑に陥つた場合に、最もよく平安を與へ得る歌である。詩篇第九十篇

夫れわれは世
の末まで常に
爾らと偕に在
るなり。

十二月五日

マタイ傳第十
一章三〇。

九月一日頭註
三五二頁を見
よ。

同第十四章三
〇、三一。

風の烈しきを見
て懼れ沈みかゝ
りければ、主よ
我を救たまへと
曰

は恐らくは知られたる最も古き祈禱である、而して現今でも何時もの如く清新にして麗はしくある。詩篇第九十一篇は古來凡ての戰士及び勇者の愛唱する歌である。約翰福音書は、基督教の内的性質を最もよく闡明する書である。馬可傳は恐らくは、直接の證人の活躍たる記憶に相當するやうな事實の最も本源的の物語である。然し是は頗る簡潔に作られてあり、而して予の知る所によれば批判から論駁されずにはない。然し此等の篇に於ては、讀者が全く誠實であれば、讀者自身に於て證明せらるゝ、内的眞理が、此等のさなきだに決して全く信賴の出来ない歴史的批判より重要である。

こゝもかく、内容の豊富と刺戟力とに於て聖書に比するこゝの出来る書籍がない、また是まで決してなかつた。

十二月四日

ふ。イエス
頼て手を伸べ
、これを執ら
へて曰けるは
、信仰うすき
者よ、何ぞ疑
ふや。
同第十九章二
九。
十二月二日頭
註四六一頁を
見よ。
ヨハネ福音書
第十五章七。
三八頁頭註を
見よ。

將來のこゝ、甚だしきは世界の終に就き多く考ふるこゝは、全く無益なるこゝである、何故なれば、誰人も只だ近似的にも之を計算し若しくは豫見するこゝが出来ないからである。基督自身さへ之が出来なかつた。(馬太福音書第二十四章三六)。是に使徒パウロが誤つたこゝは(帖撒羅尼迦前書第四章一七)、一層つまらぬ誰人に取つても警告であるべきである。吾人は一般に他のこゝを心配し、考へなければならぬ。將來のこゝを考ふるは吾人に課せられてない、而して馬太傳第二十八章一八―二〇は吾人には全く充分である。

十二月五日

「彼は彼の朋友に睡眠中物を與へる」。是れ彼等は焦心、詭譎、若しくは猶ほ一層悪い手段を以て出世するに及ばぬ、彼等は是れなくても有らゆる肝要なる生活の善事、即ち仕事、生計、善き配偶、朋友、元氣、健康、

求めたるこゝ
なし、求めよ
、然らば受け
ん、而して爾
らの喜滿つべ
し。
われ此事を爾
らに語りしは
、爾らをして
、我に在りて
平安を得させ
んが爲めなり
。爾ら世に在
りては患難を
受けん。然
、我すでに世
に勝てり。
ヨハネ第一書
第五章三。

必要ならば休息等を得る。然しながら彼等は正確且つ忠實に神の命令に隨行し(「兩足跛行せず」)、仕事を爲し、神の賦與を只だ全く誠實に使用し、且つ其を以て同胞を助けんを欲しなければならぬ。

神及び基督を以てする生活は、他の生活よりは遙に容易で、世に在る最も容易なるものである。其は一種の差支なき輕浮さへをも生ずる、而して此輕浮は世の有らゆる歡樂よりは一層愉快に人の存在を形成し、しかも僅少の手段若しくは寧ろ何等の手段も無くして之をなすものである。何故なれば是には「只だ」のみなる語を用ゐるこゝが出来れば只だ神の確乎たる親交のみが必要である。是れ、之を知り而して欲するならば、決して不幸者に缺くるこゝのない彼等の眞實の救助である。

馬太福音書第十一章三〇、同第十四章三〇、三一、同第十九章二九。
約翰福音書第十五章七、第十六章二四、三三。約翰第一書第五章三。馬
拉基第三章一四―一八、同第四章二。

神の誠を守るは、是すなはち神を愛する也。その誠は難からず。マラキ書第三章一四—一八。汝らは言へらく、神に服事することは徒然なり。われらその命令をまもり、かつ萬軍のエホバの前に悲みて歩みたりして何の益あらんや。今われらは驕傲ものを幸

十二月六日

「おほよそ人を恃み、肉をその臂とし、心にエホバを離るゝ人は詛はるべし。おほよそエホバをたのみエホバを其恃とする人は福なり。彼は水の旁に植たる樹のごまくならん。其根を河にのべ、炎熱來たるも恐るゝ、まごころなし。その葉は青く、亢旱の年には憂へずして、絶えず果を結ぶべし」。(耶利米亞記第十七章五—八)。

是れ人々が初め思つて居るより眞實であり、而して其を信する人に多くの悲惨なる人生の經驗を省くものである。少なくとも予には、予が生涯中甚だしく人間に依頼した毎に、此支柱が直にはづされた。之に反して予は、神への信頼が充分に實存してあつた時に、之が欺かれた何等の場合をも想出すことは出来ない。

人々が之を信するやうになるには長くかゝり、而して之が出来るやう

になつた時には、一生が既に殆んぎ經過してしまつてある。然し其時に初て人は人間を眞實に愛し始める。其以前は只だ多分彼等を恐るゝのみである。

十二月七日

人は小事に大事に儉約でなければならぬ、然し是は贅澤は必要物さへもを有たぬ多くの人に對して不正であるからの理由に、適當に施すことを得ん爲みである。

他の理由に多くの打算からの凡ての他の儉約は吝嗇に導く。吝嗇は神に最も似ず、最も彼の嫌厭する所であり、而して凡ての惡徳中最も多く神の精神を斥くるものである。其故に聖書は、吝嗇を凡ての惡の根と云つて居る。

路可福音書第十二章一五—二〇、同二九—三四。提摩太前書第六章六。

福なりと稱ふ。また惡を行ふ者は感になり、神を試むるものすらも救はるゝ。その時エホバをおそれ、者互に相語り、エホバ耳を傾けてこれを聽たまへり。またエホバを畏るゝ者及びその名を記憶する者のために、エホバの前に記念の書をかきしるせり。萬軍のエホバ

ひたまふ、我
わが設くる目
にかれらをも
て我賢となす
べし。また人
の己につかふ
る子をあはれ
むがごとく、
我彼等をあは
れまん。その
時汝らは更に
また義者と
悪しきものと
神に服するも
の事へざる
者との區別を
しらん。
同第四章二。
されど我名を
おそるゝ汝ら

希伯來書第三章五、六。五地獄界第四歌四九、六〇行。聖澤罪界第十九章。歴代志下第二十五章八、九。

「スバルジオンは云ふ、」神の兒輩が、神が彼等に託した手段を以て、彼等の義務を成さなければ、彼は彼等に屢々破産銀行の株主たることを許す。是れ文字通りに起るこゝが頗る屢々ある。然る時には詩篇第二十三篇、第二百二十七篇及び二百二十八篇が實に一層安全なる安樂枕である。かくてそれでも爾何か贅澤を爲さんか欲するならば、「力量に過ぎて施す」こゝが、最も高尚にして最も無害なる贅澤である。哥林多後書第八章二一、四。

十二月八日

近代の倫理的、接神學的、神靈學的の會は皆、其等が基督教及び他の文明國に現はれてある實證的宗教を不満足と思つて居るこゝいふ共通の

には、義の日
いで、昇らん
。その翼には
醫す能なそな
へん。

十二月七日

ルカ福音書第
十二章一五
二〇。
同二九一三四
。地獄界第一歌
四九一六〇。
右共に卷末補
遺を見よ。

背景に出發點を彼等の教理に有つて居る。

彼等は一層甚だ善き且つ高きものにして、一種の宗教哲學を此等に代用せんか欲して居る。かやうな宗教哲學は、接神學に於ては、古印度の接神學に結合し、而して之を基督教に優つて居る精神の産物と稱して居るのである。

人若し此評價に就いて自己の判断を作らんか欲せば、先づ大體ブアガワッド・ギータ(薄伽梵歌)を福音書と並べ比べて見れば充分である。豫め基督教に對して偏見を抱いて居ない人は、吾人に傳はつて居る基督の言葉は無限に一層大なる力、一般に一層大なる精神的内容を有し、それでも無學の者に取つてさへ遙に了解し易いことを驚くであらう。然し別に之に氣附かぬ人は致方がない。彼は其を見ぬか主張するのか、若しくは一般に判断力が缺けて居るかである。凡て接神學のものは、餘り教養の無い人々には眩惑的である。斯様な人にして精神的健全なる者は、之に對

神を敬ひて足
ることを知る
は大なる利な
り。

なんぢら世を
過るに貪るこ
さをせず、有
るところを以
て足りさせよ
、それはわれ爾
を去らず、更
に爾を棄てじ
と云給ひたれ
ば也。然れば
我儕然して

して決して全く心地好く感ずることは出来ないであらう。彼は其を了解せぬか、若しくは昂奮狂熱に陥るかであらう。然し餘程教養ある人は、凡てが畢竟生活に何等の影響なくして、全くの思辯、穿鑿すべからざる事物に就いての無結果の思索に歸してしまふこと、丁度數千年以來印度の事情が之を示し、また支那に於ける哲學的倫理が、其の無効果の一樣に古い例を示すが如くであることを知つて居る。

然し是は、基督教の内的振作に頗る人を促がす現代の特徴ある警告的の現象である。

馬可福音書第十三章二二、二三。

十二月九日

自分自身に了解して居るやうな基督の基督教を眞面目に試みんご欲し、而して現今に於ても實に以前より一層善く一層容易にさへあることが出

曰ふべし、主
われを助くる
者なれば畏な
し、人われに
何をか行んと

歴代志略下第
二十五章八、
九。

汝もし往かば
、心を強くし
て戦を爲せ。
神なんぢをし
て敵の前に驚
れしめたまは
ん。神は助く
る方あり、ま
た倒す方ある
なり。アマジ
ヤ神の人に

來るやうな單純に善き人間の本當の模範たらんご欲する人がごもかく實際にあるであらうか。人はこういふ考を起すことが屢々ある。

是れたるには、毫も非凡の天赋若しくは教養を要せない、況んや或る一定の外的位置を要せない。眞實の善き意志ご眞理の誠實にして絶わざる追求ごがあれば、正に誰人でも、最良の牧師ご同じく樵夫でも、之を成すごが出来る。而して其を以て彼の同胞に彼等の途の光明たるごが出来る。

實に是より眞實なるごはない。然し爾かく思ふなら、そしたら恐らくは、一生の危機に際してタビテ王に起つたごが、多少異つた矩合に爾に起るであらう。即ち、「汝は其人である。」といふ聲が爾の耳に聞ゆる(撒母耳後書第十二章七)。然し爾は、爾が可能ご思ひ、同時に吾人の時代ご國民ごに取つて必要ご思ふごを爲せ。爾自身に比較的に價値少いご思はれ、且つ多くの他人から充分に供給せられ得る凡て。他の目的を放擲

ひけるは、然らば已にイスラエルの軍隊に與へたる百々ラントを如何にすべきや。神の人答へけるは、エホバは其よりも多き者を汝に賜ふことを得るなりと。コリント後書第八章二四。

せよ。

四七六

恐らくは其を知るこゝさへもせない他人が、何故に其を爲し、而して其を認知する爾が其から免除して貰はうと欲するが。

斯くあつてはならぬ。この爾の第一の職務を爲せ。凡て他のこゝさを止め、而して今日から其を廢せ。

撒母耳後書第十二章七。

十二月十日

眞實の僕に對する神の個人的信實は、斯様な單一人が全一國の不幸を阻むるこゝさが出来る位に大である。此不幸が避け難くならんことを際して、彼は初めて取去らるゝ。斯様な例は稀でない。最近の例は、ボア戦争前のカーライル、ゴルドン、スパージオン、及びグラッドストンの死である。以賽亞第五十七章一。列王紀畧下第二十二章二〇、創世記第

十八章一七。

然し斯様な者は、彼等が神を愛する故に自ら好んで、而して永久に其僕たらんことを欲したものゝみである。出埃及記第二十一章五、六。神の他の僕は決してかやうな權力を有たぬ。

十二月十一日

かれの惜なく施す所の富厚を彰はせり。我これを證す、彼等聖徒の爲めに、施濟を共にせん事を切に我儕に求め、自ら願ひ、其力量に備ひ、且つその力量に過ぎて施すことせり。

十二月八日

バアガワツト・ギータ(薄)

此世の生活の三の「脱却」は、既に創世記第十二章、第十五章、第十七章の初に於けるアブラハムへの神の言葉に叙述されてある。第一の脱却は、一層善き一層純粹なる生活に達せんが爲めに、阻害的作用を爲す平生の周圍に從事から離れることである。第二は神の外何物をも畏れずして、只だ神のみに注意すること、最後に、單純に神の前を進み歩くことである。是れ今日猶ほ眞正の生活に達する凡ての人の内的生活の徑路である。彼は斯様な生活を得るには此以上を要しない、只だ之を全く

四七七

伽梵歌、印度の史詩にして哲學、宗教的のもの、夙に歐人に知られ彼等の暎稱する所である。ピアーサ(昆耶婆、漢名廣博仙人)の作と稱せらるゝも、學者之を疑ふ。時代は紀元三四紀のものなるべしといふ。之を印度思想の代表作物と見るは如何があるべきか(譯者)。

且つ充分に要するだけである。然し是は適當の時期の間隔を置いてゝある。猶ほ以賽亞書第五十九章乃至六十二章を参照せよ。

十二月十二日

以賽亞書第三十二章一七、一八、「かくて正義のいさをは平和、正義のむすぶ果はまこしへの平穩と平安となり。わが民は平和の家に居り、思わづらひなき住所にをり、安らかなる休息所にをらん」。誰が近代世話が齎らす凡ての不安靜と不安心の代りに、之を欲せぬであらうか。恒久の快活若しくは實際寧ろ欣怡の此状態は、地上に於ける唯一の願ふの價值ある状態であり、唯一の天國への理性的經過である。人が老年又は病氣にて死する時の普通の感情を以ては、直に福祉ある状態に移るこゝは出來ない。然し斯様な状態は死する久しき以前より、慥に人の内部に現存してあるこゝが出來る、而して死に於ては、只だ次第

々々に衰弱する肉體の外的故障が取去らるゝのみである。

十二月十三日

基督教信仰の最も壯麗なる所は、人が最早毫も自己自身と協定し議論するの必要なくして、只だ神とのみ之れを爲せば足れるこゝに、次に神の完全は、只だ相互の意志さへあれば、極めて不完全なる者も、有らゆる人間的友誼に遙に勝り而して靈魂が充分の満足を得る友誼を結ぶを妨げざるこゝである。

惡は實際何であるかは、吾人毫も之を知らない。恐らくは其を知るこゝを全く堪へないであらう。吾人に取つては其は吾人自身の自由なる意志に由り、神との友誼の斷絶拋棄である。

其始は、常に神の約束。若しくは彼の言葉の眞實、若しくは實に屢々他人の聲からの如くに吾人の情に蒞かるゝ彼の命令の可能に就ての不信

マコ福音書第十三章二二、二。

そは偽キリスト偽預言者起りて、休徵と奇能を行ひ、選ばれたる者をも欺くこゝを得ば、欺くべければ也。なんぢら慎めよ、我豫じめ爾らに之を告ぐ。

十二月九日

サムエル後書

第十二章七。

ナタン、ダビデに言ひけるは、汝は其人なり。イスラエルの神エホバ斯くいひたまふ、我爾に膏を沃して、イスラエルの王となし、我汝をサウルの手より救ひ出し。

十二月十日

イザヤ書五十七章一。

用である。是から不信仰、疑惑、最後に背反が生じ、後に後悔が生ずる。然し決して忘るゝな、復歸はいつも出来るやうになつて居る。

十二月十四日

撒母耳前書第七章三。是れ既に古代より、零落した家若しくは意義を尊敬に於て沈倫した國民が興起し得る手段であり、而して是が凡ての他の奮起若しくは有らゆる武装を以て出来るより一層確實に出来る。然し是には眞面目がなければならぬ、而して勿論單に教會的の形式を黨與、若しくは唯だ形式的の神の奉仕にては不可である。そうするは是から生ずるこは出埃及記第二十九章四五、四六のこゝである。今や總ての文明國、先づ第一に大國が此選擇探否の巷に立ち、かくて生きるか亡ぶるかするであらう。之の始は既に用意されて現存するのである。然し是れ亦た誤たず來る吾人の運命である。

義者はほろぶれども、にむる人なく、愛しみ深き人々をさりさらるれども、義しき者の禍害のまへより取去らるゝなるを悟るものなし。列王紀略下第廿二章二〇。然れば視よ、我なんぢを汝の先祖等に歸せしめん。汝は安全に墓に歸することなうべし。汝は

民衆を基督教に復歸させるこは、少なくも現今體に問題にならない。是れには、吾人毫も遺憾を思はな が、少し以前まであつた如く、有らゆる外的強制手段が無い。基督教は今や其自身に由り、其の内的卓越に由り、人類の一部を新たに征服するであらう、然しまた他の一部分を斥くるであらう。かくて文明國民の總ての思考の間隙は、其が今既にあるより一層大に一層分明になるであらう。然し其次には、此頗る一層判明なれる全く自由意志なる思考法を以てして、個人、家族、民族に於ける前者と後者との世界觀の結果が、やがて極めて明瞭に現はれるであらう。

申命記第三十章二、一一—一九、同第三十三章二六—二九。馬太福音書第二十四章三—一四。馬拉基書第三章二、三。一七、一八。耶利米亞書第二章一九。

わが此處にく
だす諸の災害
を目に見るこ
とあらじと、
彼等すなはち
王に返事まを
しぬ。
創世記第十八
章一七。
アブラハム俯
伏て嘔ひ其心
に謂いけるは
、百歳の人に
豈で子の生ま
るゝことあそ
んや。又サラ
は九十歳なれ
ば、豈で産む
ことをなさん
やと。

十二月十五日

四八二

神の約束、即ち既に聖書に於て凡ての人に與へられた其約束、然し猶
一層、人が心の奥深く感じた、時として殆んど無言の、時としては明
白なる言葉にて受けた約束は、人が毫も何等の施すことなくして自づか
ら實行せらるゝといふことは決して無い。斯様な約束は先づ第一に其の
信頼すべきものであるといふ確乎たる信仰を以て受納せられなければな
らぬ、而して其次に其が實行せられる爲めに必要な凡ての事が、吾人
の側からも起らなければならぬ。

蓋し之に就いて忍耐は屢々頗る必要である。吾人は屢々全く明瞭に、
「なんぢ必ず用ゆべきものは忍耐より、是れ神の約束のものを受けんが爲
めなり」(希伯來書第十三章三六) といふ言を聞く。然しそれでも、早か
れ遅かれ、困難、苦痛、窘迫を以て、或は是無しに、吾人に就いて神か
ら決定されてあるものが来る。約束は變更されない、然しながら恐らく

出埃及記第廿
一章五、六。
僕もし、我わ
が主人と我が
妻子を愛す、
我釋たるゝを
好まずと明白
に言はゞ、そ
の主人これを
士師の所に携
行き、又戸或
は戸柱の所に
つれ行くべし
、而して主人
錐をもて、か
れの耳を刺通
すべし。彼は
何時までもこ
れに事ふべき
なり。

吾人の舉動態度、如何に由り、或は困難に或は容易に實行されるであら
う。

民數紀畧第十四章。約書亞記第二十一章四五。希伯來書第四章一五、
第六章一五、第十章三二—三九、第十二章一一。

十二月十六日

人生は重に決定的の活動から成立つ。此活動の次に、比較的平穩に生
活の流るゝ比較的長い時期が随つて来る。此時期中に經驗が蒐められ
主義が得られ且つ確立せられなければならぬ。そうするに活動に際して
此主義に由り、別に熟考も要せずして本能的に行動することが出来る。
此等の決定的の瞬間に於ては、現今また軍事に於ても承知される如く、
心理的要素が最大の役を演ずる。誰でも善く獲得された力に主義を以
て、勇ましく嚴然として立つて居る人は、決定的の勝利を得ることが出

四八三

十二月十一日

創世記第十二章一。

爰にエホバ、
アブラハムに
言ひたまひけ
るは、汝の國
を出で、汝の
親族に別れ、
汝の父 家を
離れて、我が
汝に示さん其
地に至れ。
同第十五章一。

エホバの言、
異象の中にア

來、而して此勝利は、割合に長ひ期限の間、彼の其後の運命を決定するものである。之に反して不確實に戦闘を始むる人は降参するか、避易するかであり、而して前進する代りに、人生の全一節を其の事業に共に新に始めなければならぬ。

如何なる決心も、原則も、若しくは信仰告白も、其等が一の活動に於て確實に現存するこゝ、して證明されてあるに先ち、之を信じてはならぬ。また爾自身未だ確立せない主義を以て斯様な活動に出會はねばならぬやうな位置に爾の身を置いてはならぬ。此兩者の何れの場合からも苦しき敗績が生じ、而して此敗績は屢々吾人の蒙むる所であり、凡ての他のこゝよりも甚だしく善き事と偉なる事とを爲す勇氣を吾人から奪ふものである。

最も確實なる救助は、神への全く確乎たる信頼と將來のこゝに對して彼が誤たず與ゆる警戒と準備とを聴く精微なる耳とである。神を信頼す

アブラハムに臨
みて曰く、ア
ブラハムよ、
懼るゝなけれ
、我は汝の干
櫓なり、汝の
實は甚だ大
なるべし。
同第十七章
一。

アブラハム九
十九の時エホ
バアブラハム
に顯はれて之
に言ひたまひ
けるは、我は
全能の神なり
、汝我前に行
みて完全かれ
よ。

る人は、正に此注意の外には、殆んゞ凡ての人智を缺かすこゝが出来る。彼は、何か重大なる事が起る時には、常に通知せられ、豫め充分に慰藉と約束とに由り強められ、而して行動に於て、彼自身出すこゝが出来る以上の勇氣さへもを以て具へらる。約百記と基督の苦難の事蹟が之の最も雄辯なる例である。約百記第三十三章一四—三〇。

十二月十七日

決して不親切若しくは無禮の言葉を言はぬこゝ、然し重大にして必要である場合にも言ふこゝ、冷淡にして傲慢若しくは少なくも傲慢に見ゆる沈黙を守らぬこゝ、是れ一大事である。何故なれば言語は行爲と少なくも一様に多くの不幸を起し、而して無禮な語は、多くの事またこの不幸をも治し且つ改善する神の慈恵がなければ、戦慄なしにはその全像を見るこゝが出来ないやうな罪を誰人にも累ね與ゆるものであるか

十二月十四日

サムエル前書

第七章三。

時にサムエル、イスラエルの全家に告げていひけるは、汝らもし一心を以てエホバにかへり、異なる神ミアシタロテを汝らの中より棄て、汝らの心をエホバに定め、之にのみ事へなば、エホ

らである。されば、此結ぶ果を善くする爲めには、樹を善くするより他に何等の方法がない。

詩篇第百三十九篇二—五、二三、二四。

十二月十八日

多くの全く善き人が、彼等が猶ほ學び而して内的に生長せねばならぬ時に行動せんを欲するこゝにて、彼等の生活を傷ひ、而して行動せねばならぬ時、書籍や祈禱を全く措かねばならぬ時に、安靜を考察に憧憬れて一様に彼等の生活を傷ふ。

「祈禱」は一般に危険なる言葉である。其は俗世の生活に深入して在る者の靈魂の。一時的昂揚である。然し或る時期からは、外的には餘り敬虔に見えない全く一様な斷絶せぬ神の接近が、内的生活の遙に高い階段である。

十二月十九日

無活動を以て人は此地上に於て内的に進歩すること出来ぬ。是れ、教團生活が若し單に冥想のみに耽らんことをすれば、其の大誤謬であり又た一般に所謂「國中の靜なる者」の多くの誤謬である。人々は先づ第一に基督を通じた神への正しき關係に由り、實に彼自身「地上の天國」に達しなければならぬ。然し是が起つたら、其後ち是に入るやうに他人を助けなければならぬ。是が生きるの謂である。

然し此最後の事は餘り早くやつてはならぬ。そうでないに、「盲者が容易く跛者を導き、而して兩者共に坑に陥る」。

十二月二十日

申命記第五章二五—三〇、此等の言葉は申命記の次の第六章乃至第十

バ汝らを、ペリシテ人の手より救ひいださん。出埃及記第二十九章四五、四六。我イスラエルの子孫の中に居て彼らの神さならん。彼等は我が彼らの神エホバにして、彼等の中、住まんにて、彼等をエジプトの地より導出たせし者なるを知らん。我はかれ

らの神エホバ也。

申命記以下マラキ記まで卷末補遺を見よ。

エレミヤ第二章九。

十二月二十日頭註四九四頁を見よ。

十二月十五日

民數紀略第十四章引用省略す。

ヨスア記第廿一章四五。

一章の言葉が含んで居るより、只だ人爲的に蔽はれる人生の凡ての雑多なる悲惨に對する一層明瞭なる救助の約束を爾は望むこゝは出来ない。此約束が今日でも猶ほ有効であり、而して的中するや否やは、爾は慥に之を試むるこゝが出来ぬ。然し爾は、人が條件附にて事を約束した場合に、彼に對して其を試みねばならぬ如くに之を試みねばならぬ。嚴密なる人が爾に對して爲すであらう如くに、そんなに嚴密に神は條件をなかく守らぬこゝさへ爾は經驗するであらう。但し是は只だ爾の情が實際常に誠實である限りに於てである。然し完全なる福祉は、福音は其實行に他ならぬ此等の古語に循へる充分なる善行爲の結果に過ぎない。既に幾十億萬人は、若し彼等が欲するならば、彼等が是迄有つて居たより更に幸福なる生活を有つこゝが出来たのである。

少なくなきも現今誤れる途を歩ける人々の可なりの部分は、此途への

エホバがイスラエルの家に語りたまひし善事は、一だに缺けずして悉くみな來りぬ。
ヘブライ書第四章一五。
そはわれらが荏弱を體恤し、さ能はざる祭司の長は我儕に非ず、彼は凡ての事に我儕の如く誘はれたれど、罪を犯さざりき。

同 第六章一

元來の傾向からして此途を踏んだのではない。是れ彼等が、他の方法にて現今の世を渡るこゝは正に不可能であるとの廣く世に廣がつて居る意見を抱いて居るからである。此意見の代りに、既に舊約書には、此が反對の明瞭なる保證の多くがある、而して此保證は知らるゝ限り未だ誰人をも欺かなかつた。少なくも吾人は、比較的長い生活の經驗に基き(生半な、元氣なき一時的の試みだけに基いたのでなくして)、之を主張するこゝの出來た人を見たこゝがない。然し有らゆる「俗世の途に由り」て自分の一生の幸福を根本的に失つた人は、今日幾百萬を以て數ふるこゝが出来ぬ。

馬拉基第三章一三—第四章二。耶利米亞書第二章一三、一七、一八、一九、第三章二五、第八章七、一一、第三十二章一九、二三、三八—四二。以賽亞第四十八章一八、第四十九章一一—一六。
其が既に舊約に於て猶太の民族に對してそうあつたならば、吾人は元

五。かれ忍びて此の如く約束のものを得たり。同第十章三三—三九。一〇三頁以下頭註を見よ。同第十二章一。

四九〇。來何の爲めに基督教徒になつたか、而して吾人若し今ま一層惡き位置にあるならば、何の爲めに吾人に救世主が生れてあつたであらうか。新約は此等の約束を只だ一層内的に一層深く捕へたのであつて、破棄したのではない。

馬太福音書第五章一七—二〇。

奇蹟信仰

神の國を得んと努め、而してその立派な福祉を見んと欲する者は、浮世の心を賤しめ、神の詞を信ぜればならぬ。不思議に福祉に呼ばれては、只だ奇蹟に因りてのみ爾は動搖せぬ。闇黒から光明への途上には、

凡ての階段が驚異である。

十二月二十一日

十二月十六日
ヨブ記第三十章一四—三〇。
卷末補遺を見よ。

諸子は基督教に於て、諸子の好奇心若しくは普通の知識慾を起すものをのみを索出すことがないやうに用心せよ、又はかやうな疑問を以て「良心の指導者」、「靈魂の世話人」共しくは他の權威に絶えず訴へることがないやうに用心せよ。是等は全く眞理としての基督教の捕捉から直に人を遠ざからしむる、而して斯様な場合に對して、既に詩篇第十八篇二六に神に就いて、「きよきものには潔きものとなり、僻むものにはひがむ者となりたまふ」と言つてある。神は弄ばれぬ。只だ彼を眞面目に求むる者のみに彼は答を與ふ。

十二月二十二日

十二月十七日
詩篇第百卅九篇二—五、二三、二四。
なんぢはわが坐るをも立つなも知り、又た遠くよりわ

が念をわきまへたまふ。なぢんばわが歩むをもわが臥すをもさぐりいだし、わがもみくの途をこまかく知りたまへり。そはわが舌に一言ありまも、視よ、エホバよ、なんぢこまかく知りたまふ。神よ、わがはくは我をさぐりてわが心をしり、我をこゝろみて、わ

「あなたの情のやうな情は、親切に申しまする偉大の最高處にあります」。是れミケランジェロが井ットリア・コロンナに與へた言葉であるが、悪きも善きも凡てのものか偉大であつた當時に、如何に彼等が生活したかを人に示してゐる。

現今世界は全體に於て當時よりは其の位善きか分らぬ。然るに人々は當時の偉大の幾らかを現今に欲しがつて居る。

十二月二十三日

時々の科學的神學と基督が意つて居た眞正の基督教との間に恒に存在する差異を示せる模型的の章は、約翰福音書第三章である。學者のニコデモ基督を訪問するや、勿論慥に眞面目なる「厚意を得る挨拶」、現今にて「敬意を表す」といふことを以て始め、以て非學者なる基督に尊敬を表したと思つた。然し此挨拶に踵ぐに一種の教訓を以てするつもりであつ

がろくくの思念をしりたまへ。わがはくは我によこしまなる途のありやなしやを見て、われを永遠のみに導きたまへ

十二月廿日

申命記第五章
二五—三〇。
卷末補遺か見よ。
マラキ記第三章一—第四

た。然し此教訓は次のやうな答にて基督から直に遮ぎられた云ふ、「吾々は吾々が見且つ聞いたが故に吾々が知ることを話す。然し爾等は爾等が學び且つ研究したことを話す」。是れ猶ほ今日ある差異である。人は基督教を教ゆることは出来ない、只だ他の人が、見且つ聞くことが出来るやうに之へ導かれ而して穩かに案内されなければならぬ。それだけ基督教は科學の性質を有たないで、寧ろ多く秘教の性質を以て居る。然し其秘教は、其の凡ての部分に於て誰人の眼の前にも開かれて横はつてあるのである。さはいへ只だ多くの人が其を視而して捉へ能はぬだけである。斯様なものは必ずしも非學者でなくして、却て學者である。其故に基督自身も、神の國を小兒の如く、換言せば其の多くの研究なくして堅固なる信仰を以て受取らない人は、決して其に入らないと言つて居る。神學は在らなくてはならぬ。吾人は之が無ければ頗る不自由をするであらう。然し其は基督教自身であることから相距ること遠い。

十二月二十四日

約翰福音書の同じく第三章には、猶ほ他に二の極めて著しき言葉がある、即ち其の第十九節と第二十一節とである。今日勿論世間には教訓が無いことはない、又た啓發せられた悟性の爲め最早神の言葉を信ずることの出来ない人が無いことはない。然し彼等は、充分の光明を堪へない彼等の行爲の爲めに、此光明を欲せない。彼等にして此行爲を更めんことを欲するならば、彼等は信仰を頗る容易に且つ自然的のこゝろ、見出すであらう。

第二の格言は、實際に眞理に奉仕する人は、世間に於ける意義と功果との爲めに憂ふるに及ばない。何故なればそうすれば光明が彼を照らし、而して彼は闇黒に留るこゝろが出来ないからである。

人間は、彼等が幾多の缺陷を有つにも拘はらず、眞理に對するほゞ何

章二。エレミヤ諸章。
卷末補遺を見よ。
イザヤ書第四十八章一八。
願はくはなんぢわが命令にきゝしたがはんことを、もし然らばなんぢの平安は河のこゝろ、なんぢの義は海の波の如し。
同第四十九章一一一六。
補遺九月十四日の下を見よ。

マタイ傳第五章一七一二。
○。
卷末補遺を見よ。

二月廿三日
廿四日

ヨハネ福音書第三章。
補遺十月九日の下を見よ。
ルカ傳第八章五一一五。
補遺を見よ。

十二月廿五日

物に對してもそんなに微妙にして且つ之に欣聽せんことを欲する耳を有たない。たゞひ眞理が今日世界の最も遠隔の隅にて、例へばその當時の文明に所謂「後れたる」重要ならぬ猶太やガリラヤのやうな處にて語らるゝことも、其は直に知られ、而して何等の吹聴なくして自づから幾千の人の耳に達する。然し其が適當なる地を見出し而して根を張るや否やは別問題である。是れ基督が路可傳第八章五——一五に於て有名なる比譬喩を以て闡明した所である。

十二月二十五日

馬太傳第二十三章三八、三九。列王紀上第九章七——九。
是れ當時イスラエルの民に對する判決であつた。神は彼等の國民的靈所より出行き、而して此靈所は神を失つては絶えず侵入する裁判に對して何等の保護を與うるこゝろは出来なかつた。靈が無くなり始まるや否や、

マタイ傳第廿三章三八、三九。視よ、爾らの家は荒地となりて遺されん、われ爾らに告げん、主の名に託りて來る者は福なりと、爾ら云はん、今より我を見ざるべし。歴王紀略上第九章七一九。補遺を見よ。申命記第三十章。補遺二月

何等の形式も多少だに宗教に益することがない。

然しまた豫言の他の部分は一様に確實に近づく、(而して恐らくは人々が思ふより早く近づく)。是は猶太教と基督教とは何時か再び同一物になり、同一の歴史を有つてあらうといふのである。之より前は、基督教の形成は、基督が意つたやうな都合には充分現存してなかつた。

申命記第三十章一—七。耶利米亞書第二十四章六、七。第二十九章一—一四。馬太福音書第五章一七、一八、同二十三章三七。

其故に、基督が(彼自身の言に由れば全く特別に)送られた此彼の國民に對する尊敬が命ぜられてあるのである。馬太福音書第十五章二四。(單に歴史的に解すれば吾人には實にパウロが送られたのである。使徒行傳第十六章九、一七、第二十三章一一。羅馬書第十一章一七、一八、二五二六)。

此古き國民は、カインが當時印誌つけられた如くに、(創世紀第四章九

十六日の下を見よ。エレミヤ第二十四章六、七。同第廿九章一—一四。共に補遺を見よ。マタイ傳第五章一七、一八。われ律法と預言者を廢る爲めに來れりと思ふ勿れ。われ來りて之を廢るに非ず、成就せんが爲めなり。われ誠に爾らに告げん、天地の

一六)、其の世襲的主から充分に印誌をつけられてある。然し正に其が爲めにまた彼の特別な保護を受けて居る。彼のみが獨り其の裁判者であり、而して彼の外には誰人も罰を受けず。其國民を迫害し屈辱を與へてはならぬ。また此國民の福祉は(其が其の信仰に忠實である限り)、今日でも猶ほ特別な力を有ち、また凡ての他のものより大なる効力を有つて居る。

創世記第十二章三。加拉太書第三章八、九。

十二月二十六日

基督が歴史に現はれてより以來、「有らゆる人間的理想若しくは無條件的模範は有害である」、吾人は慥に言つても差支なからう。如何なる人も斯様な鑑として爾の目の前にちらつてはならない。然し必ずや基督への爾の案内者援助者たることが出來やう。爾は斯様な人間的指導者に

盡きざる中に
律法の一瞥一
瞥も遂げつく
さずして廢る
ことなし。
同第廿三章三
七。

噫エルサレム
よ、エルサレ
ムよ、預言者
を殺し、爾に
遣はさる者
を石にて撃つ
ものよ、母鶏
の雛を翼の下
に集むる如く
、我なんちの
赤子を集めん
させしこと幾
ぞや、然し

感謝の情を有つてもいゝ、然し彼を「崇拜」してはならぬ。是れ此過度に
使用せられた語が信に意義を有する限りで於てである。實際此語は大抵
の場合最も普通の感謝といふだけのこころさへ意味せない全くの慣用語で
ある。

四九八

十二月二十七日

人は業務に満ちたる世界に於ては——快樂に満ちたる世界に於てはそう
容易ではないが——誠實に全くよく、「予が情は、予を助くる神には閑靜で
ある」言ふこころが出来ぬ。然し單なる平靜寂寥は、若し神に於ける強き
生活が之に結付いてなければ、未だ誘惑に對する何等の保護、完全への
何等の援助たるこころは出来ない。

最上のこころは、此地上に於ては、多忙と寂靜との兩状態の交替である。
それ故に宗教的團隊は何か實際的の仕事をも有たねばならぬ。事務家に

ご爾らは好ま
ざりき、
マタイ傳第十
五章二四。

答て曰けるは
、イスラエルの
家の迷へる
羊の外に我は
遣はされず。
使徒行傳第
十六章九、一
七。

斯くてパウロ
夜に於て、一
人のマケドニ
ヤ人立ちて己
に請ひ、マケ
ドニヤに涉り
て我儕を助け
よと曰ふを知

は閑靜の時が必要である、而して斯様な時が彼等に必要と神が見る時に
は、彼は疾病を通じて之を彼等に賜ふのである。

眞正の基督教は、有らゆる宗教や哲學の中で、寂靜教に對しても俗世
醜陋に對しても一樣に保護する唯一のものである。之を全く知れる人は
此教が天から來たに相違ないと言はざるを得ない。斯様なものは地上に
は生ぜぬ、全く形式的になつた猶太教からも、また當時の古典的文化か
らも。

十二月二十八日

最も明白であつて、而して最も少なく守らるゝ命令の一は是である、
「汝の神の名を妄に口にあぐべからず。エホバはおのれの名を妄に口にあ
ぐる者を罰せではおかざるべし」。(出埃及記第二十章七)。是れ不信心の人
の如くに一樣に信心の人にも正に願ふべく中する。何故なれば彼等も

四九九

に見たり。
パウロと我儕
に従ひて喊叫
いひけるは、
此人々は至高
き神の僕にて
、救を我儕に
宣る者なり。
同第廿三章一
一。
主その夜パウ
ロの側に立ち
て曰給ひける
は、パウロよ
、勇め、そは
爾われに就い
てエルサレム
に證せし如く
、必ずロマに
も證すべけれ

また、世間からの稱讃名譽のこゝでなくても、維持や黨派の利害が彼等の問題である場合にも、「神の國の事件」にして事を爲すに屢々主張するからである。約翰福音書第五章四四。蓋し斯様な原因からして、近代の神學者(ベック)の傳記に、屢次理由のないこゝの言葉がある。曰く、「人が彼等の奴隷となるつもりでなければ、たしかに上流の階級の敬神者と一緒に生活するこゝは出来ない」。馬太福音書第二十三章八一—一〇。哥林多前書第七章二二三。

五〇〇

十二月二十九日

「世に其の行動」に就いて不平を言ふこゝは、實に世にある最も無益のこゝである。吾人は恐らくはこゝ言ふこゝが出来やう、かやうな世に屬するこゝを欲せぬ敬虔なる人々が、彼等があるべきであり、あるこゝが出来るやうに全く。そうあるであらうならば、社會の不都合は、全くおの

はなり。
ロマ書第十一
章一七、一八
二五、二六。
補遺を見よ。
創世記第四
九—一六。
補遺を見よ。
創世記第十二
章三。
我は汝を祝す
る者を祝し、
汝を詛ふ者を
詛はん。天下
の諸の宗族汝
によりて、福禮
を獲んまがら
テヤ第三章八
、九。
かつ聖書すで

づからそれだけ多く改まるであらう、然し單に不平や説教を以てしては改善せられない。神の保護に彼等の主の不斷の接近を信賴して、落付いて彼等の途を行き、出来るだけ多く善を爲し、教訓に由りてよりは一層多く他人を鼓舞する模範を示すこゝに由りて彼等の主義を傳布する人々の組合たらんこゝが、全く明白に基督教の目的であつた。是から來らんとする基督の新改善もかういふ都合でなければならぬ。世間は今ま、既に久しくあつたよりは、一層之に傾いてある。現今只だ吾人のみがかくないだけである。

十二月三十日

「神は如何なるものであるかを言ふ能はざる如く、人が自己を神の中に失ふこゝに由りて經驗する凡てのこゝは、一樣に言表はし難いものである」。是れバイヨンのエリスベートの言葉であるが、「神秘」若しくは「内

五〇一

に信仰に由りて神の異邦人を義と爲給ふことを豫しめ曉り、まづ福音をアラハムに傳へて、諸國の民は爾に由りて福を得ん云へり。是故に信仰に由るものは信仰ありしアラハムと偕に福を受く。

十二月廿八日

マタイ傳第廿

五〇二

的生活が實際何んであるかを最も善く現はして居る。此事柄其自身を叙述する。ここは不可能である。人が其が出来るにしても、叙述を要せない人のみが實際其を了解するであらう。人々は此靈魂狀態の唯だ個々の結果のみを、大體に於て明かにすることを試みる。ここが出来、而して是もまた矢張常に欺瞞若しくは妄想でないかといふ疑惑に懸るであらう。然しながら人は、若し彼が平生分別の良き世事に経験のある人であるならば、彼の一生の幸福を容易に妄想に卸さない。然るに全く反對に、正に此世間の經驗は、世俗人の幸福が何たる全き妄想的然らずば全く支持し難い基礎の上に立つて居るかを日々示して居る。其故に彼等は恐くは眞正の夢想者であつて、神秘家でない。

然し人はまた全く確實に次のやうに言ふことが出来る。神に順ひ、眞面目に、絶えず、且つ忠實に彼の意志を遂行すること、唯だ是のみが、苟も人間に達せられ得べき完全に人を至らしむるのであり、如何なる種

三章八一—一〇

爾らはラビの稱を受くること勿れ、そはなんぢらの師は一人すなはちキリストナリ、爾らはみな兄弟なり。また地にある者を父と稱ふること勿れ、そはなんぢらの導師は一人すなはちキリストナリ。コリント前書第七章二三。爾らは價をも

類の如何なる道も之を成さない。他の種類の神秘説は凡て甚だしき誤謬であり、而して其が頗る素朴的で且つ信實でない場合には、一様に甚だしき靈魂の毀傷である。

十二月三十一日

誰でも以後只だ正に善きのみ奉仕せん。一旦堅固なる決心を爲し、しかも之への機會が求めずして現はらるやうな都合に此奉仕の決心を爲さば、—是れ慥に凡ての善き決心中の最も理性的なるものである—そして、日、月、四季、年、否な一生の終に於ては彼の大部分の出來事さへも、彼には無關心のものとなり、而して曆は殆んき餘計な家具となる。時は、是から活動でなくして重に歡樂を期待する人に對して、只だ價値に意義を有するのみである。

願くは勇氣を有て、爾が是までよりは異つたものにならうと眞面目に

五〇三

て買はれたる者なり、人の奴隷なる勿れ。

五〇四

思はば、或る一の時期が爾に來るであらう。此時には、爾は有らゆる人間の智慧や教訓が無くても濟ませるこゝが出来る。何故なれば爾は全くおのづから、純化された本性の自然的の衝動傾向からして、常に正にして善であるこゝを考へ且つ爲すからである。

ダンテ淨罪界第二十七歌一一〇—一四二行。

次に爾は神が爾の爲めに彼自身に與へた勞ミ、その目的を達した生活の爲めに神に感謝せよ。

そこで、それまで御別れしやう、さうが御健勝に、而してその事へ勇氣を有て。

さうぞ、アグリツバのやうに、「爾は殆んゞ予を説破せんとした」なき言ふな。かやうな冷淡な生半の承知は、此例ミパウロの反對の例ミが示す如く（使徒行傳第二十六章）反對より一步だけ希望の無いものである。

爾健康たらんと欲するか

（約翰福音書第五章六）

吾人の宗教教育に於ける一缺陷は、恐らくは該教育が、既に現世に於て全く生活があらねばならぬ而してあり得る如く其を見出す勇氣ミ希望ミを餘り甚だしく人より奪取り、而して之の代りに來世を指示するこゝである。さて此來世に就いては、吾人は唯一の信賴すべき本源としての福音書から、其が在るこゝを實に唯だ知るのみであつて、決して其がさういふ短合であるかを別に詳に知らない。

舊約全書は（以賽亞書第六十二章三五。パンヤン天路經歷第二十章參照）既に此地上に於て吾人の使命、しかも可能的使命が達せらるべきこゝに「配偶の國」に就いて、蓋し折々明瞭に語つて居る。またダンテも淨罪

五〇五

キハネ福音書第五章六。
イエスが臥し居るを見て其病の久しきを知り、これに曰ひけるは、愈はんことを欲ふや。
イザヤ書第六十二章三五。
また汝はうるはしき冠の如

くエホバの手
にあり、王の
冕のごとく汝
の神の掌にあ
らん。人再び
汝をすてられ
たる者といは
す、再び汝の
地をあれたる
者といはじ、
却て汝をへフ
ツバ（わが悦
ぶところ）と
さなへ、汝の
地をベウラ
（配偶）とさな
ふべし。そは
エホバ汝をよ
るこびたまふ
。なんぢの地

五〇六
界の最後の數政を、「此地上の樂園」の驚嘆すべく美しき描寫に捧けて居る
而して此描寫は天國の存在の多少不明瞭なる叙述より一層活躍たるもの
である。(一)然し之にも拘はらず、現代人しかも僅少の例外は別として凡
ての人の思想世界は、彼等の地上の生活の進行は、其が終局に近くにか
り、幸福と欣悦とに於て増加するものたるこゝが出来るといふこゝを承
知するこゝからは可なり遠く距つて居る。此に於ける彼等の差は單に多
少の諦を以て一切の存在の此不可避的に悲しき終結に運を委かせ、他の
者は死に由りて廢頽の最底の度から生命の最高の階段に跳躍せんを希望
するこゝに在るのである。

(一)聖アウグスティンの「神の國」の終結も、地上に於ける可能的狀態の
叙述である。

は配偶をいん
。かきもの
。處女をめぐ
る如く、なん
ぢの子輩はなん
ぢを娶らん
。新郎の新娘
をよるこびこ
さく、なんぢ
の神なんぢを
喜びたまふべ
し。

イスラエルの豫言者が彼の「ベウラ」を如何なるものと思つて居たかは
全く明かではない。然し其の意味は恐らくは、靈魂が其の意志上全く神
と一になり、而して有らゆる自己の内的抵抗からの全くの自由を意識し
たる靈魂の狀態である。

境遇に基いてあり得る外的抵抗は、靈魂を惱まさぬ、從て最早や問題
にならない。何故なれば此に對しては恒に用意されたる救助が現存する
からである。(一)只だ此救助に就いては、自由になつた人が、猶ほ彼一人
の標準になる一層高い理由から、又は他人の利害の爲めに之を要求せん
と欲すや欲せざるかが問題であるのみである。(二)

一
ヨハネ福音書
第十五章七。
三八頁頭註を
見よ。
イコ傳第十一

(一)約翰福音書第十五章七。馬可傳第十一章二四。馬太傳第七章七。撒
母耳前書第七章三。約書亞記第一章五、七、七、九。同第二十一章四、
四五。同第二十三章八一、二、一四。同第二十四章一九、二〇。歷代志略下
第九章六。以賽亞書第六十五章二四。
(二)路可福音書第二十四章二六。馬太傳第二十六章五、三、五四。

章二四。
是故に我なん
ぢらに告げん
、凡そ祈禱の
時、その求ふ
所のものは必
ず得べしと信
ぜば必ず得べ
し。
マタイ傳第七
章七。
求めよ、然ら
ば與へられ、
尋ねよ、然
らばあひ、門を
叩けよ、然ら
ば開かるゝと
言ふを得ん。
サムエル前書
第七章三。

時にサムエル
イスラエルの
全家に告げてい
ひけるは汝ら
もし一心を以
てエホバにか
かり、異なる神
とアシタロテ
を汝らの中よ
り棄て、汝ら
の心をエホバ
に定め、之に
のみ事へなば
エホバ汝らを
ヘリシテ人の
手より救ひい
ださん。
ヨシエア記第
一章五―九。
汝が生ながら

他の何物も最早凡ての場合に救助を與うるものとして證明せられそう
でないが故に己むを得ずして、外面的に基督教に屬して居る文明國の人
々が、今日は未だ殆んご事實となつて現はれて居らぬが、該教の斯様な
約束を眞實に見るやうな時期が恐らくは來るであらう。

蓋し人は、平生有らゆる偶然に委ねられたる此生活に於ては、何物に
か信賴するこゝが出来なければならぬ。而して如上のやうな種類の確實
なる救助がなければ、此信賴物は、自分の力及び恰憫、換言せば所謂是
認せられた自己主義の體系でなければならぬ。然し自己主義は、其の限
界を定むるこゝが頗る困難であり、且つ其からして正に吾人を嚇かす有
らゆる災難が成立つのである。

「此世界の邦國」は容易に破壊せられそうでない。而して凡ての人の
爲め、若しくは只だ多數の人の爲めさへ平和と喜びを此に求むるこゝ
は、所謂「文化」の如何なる進歩にも拘はらず、寧ろ少數の人が抱いて居
る空想である。

此「文化」が最高最良の場合に生じたものは、スペンサー、ラスキン、
エマソン、カーライル、ゲーテなどの風の最大可能の好意を有する處世
哲學である。而して、教養ある人々の中の優れた者もが現今猶ほ此哲
學に従つて生活せんことを力むるのである。此哲學は、其が頗る幸福あり秩
序ある外的境遇から擔はれる間は、大畧實行し得べきものである。然し
此哲學は其他の場合に於ては、厭世主義及び人間からの隔離に變ずる甚
だしき危険を帶ぶるものである。其は全く一般に諦めに終りて、欣怡に
終らない。而して其が眞理を言ふ場合さへ、一層高い眞理から駁せらる
ゝ低い程度の眞理である。(一)

(一)之が著しき例として、吾人はエマソンの語を引用する。曰く「神は
各の人に眞理と安息との彼の選擇を提出する。汝が欲する何かを
取れ。汝は決して兩方を有つこゝは出來ない」。是は普通あるやう
な人の生活には全く正當である。然しながら眞理と安息とを結合

ふる日の間、
なんぢに當る
ことを得る人
なかるべし。
我も一せき借
に在りしごと
く汝と階にあ
らん。我なん
ぢを離れず汝
を棄べし、心
を強くしかつ
勇め、汝はこ
の民をして我
が之に與ふる
ことをその先
祖等に誓ひた
りし地を獲せ
しむべき者な
り。唯た心を
強くし勇み勵

して所有する生活も可能であるのである。 五一〇

是れが現今の教養ある人々の中最も才能あり最も幸福なる者の普通の生活徑路である。最良の場合にも之が終結を成すものは、古代文明世界の專政主、成功せるアウグスト皇帝が辭世の時の疑はしき「朋友の喝采」であるか(頭註を)若しくは外的文化に於て吾人の時代に酷似し而して野蠻人の侵入に先ち其文化の高點に達した時代に於て、(一)ハドリアン皇帝が自己の靈から訣別するに用ゐた憂愁人の心を動かす歌かである。其歌に曰ふ。

「不安な、優しき、散漫なる靈魂、肉體の主人にして仲間、爾は今ま蒼白き、硬き場所に移り行く、其處には慣來つた快活が最早や爾の爲めに見出されぬであらう。」

(一)羅馬帝國に野蠻人が侵入したこゝに由り生じたる舊文明の滅亡に關する第五世紀のサルキアンの叙述は、多くの點に於て、全く

んで、我僕モ
一セが汝に命
ぜし律法をこ
まかく守り
て行へ。之を
離れて右にも
左にも曲るな
かれ。然れば
汝いづくに往
きても利を得
べし。
この律法の書
を汝の口より
離すべからず。
夜も晝も之を
念ひて、其中
に録したる所
を悉く守りて
行へ。然ば汝
の途福利を

現今の状態を想起さしむる。

現今古典的に教養された大抵の人々は、かういふ風に考へ、而して成熟した欣怡の老年の眞實の希望も、また未來の一層善き生活の眞實の希望をも有たない。

他の可能的の生活徑路は神の指導の徑路であつて、次のやうなこゝを約束する。「汝等の年老ゆるまで、白髪さなるまで、我汝等を負はん、我それを爲さん、我擡ぐべし、我また負ひ且つ救はん(以賽亞書第 四十六章四)「わが力にたよりて、我こやはらぎを結べ、われミ平和をむすふべし(同第二十 七章五)」汝右に行くも左にゆくも、その耳にこれは道なり、これを歩むべし、後邊にて語るを聞かん(同第三十 章二一)「わが民は平和の家(同第三十 章一八)に居り、思ひわづらひなき住所(同第三十 章一八)にをり、安らかなる休息(同第三十 章一八)に居らん(同第三十 章一八)」疲れたる者には力を與へ勢力なきものには強きをまし加ふ。年少き者も疲れて倦み、壯なる者も

得、汝必ず勝利を得べし。我なんちに命ぜしにあらずや、心を強くしかつ勇め。汝の凡て往く處にて、汝の神エホバ偕に在せば懼る勿れ、戦慄くなかれ。同第二十一章 四四、四五。 八月十三日頭 註三一五頁を見よ。 同第二十三章 八一、二、一四。 唯だ今日まで

爲したる如く、汝らの神エホバに附したがへ。それエホバは大にして且つ強き國民を汝らの前より逐はらひたまへり。汝らにては今日まで當ることを得る人一箇もあざりき。汝らの一人は千人を逐ふことを得ん。それは汝らの神エホバ汝らに寛ひし如く、自ら汝らのた

五二二
衰へおころふ。然はあれごエホバを俟望む者は新なる力を得ん。また鷲の如く翼を張りてのほらん。走れごもつかれず、歩ゆめごも倦まざるべし。(同第四十章 二九―三一) 「汝に向ひて怒る者は皆恥を得て惶てふためかん。汝ご争ふ者は無きもの、如くなりて滅じせん。汝はエホバによりて喜び、イスラエルの聖者によりて誇らん。(同第四十一章 一―一六) 汝等昔のこごを思出すなかれ、また上古のこごを考ふるこごなかれ。視よ、われ新らしき事を爲さん。やがて起るべし。汝等知らざるべけんや、われ荒野に道を設け、沙漠に河を作らん(第四十三章 一八―一九) 「われ東より鷲を招き、遠國よりわが定めおける人を招かん。我このこごを語りたれば、必ず來たらすべし。我このこごを謀りたれば必ず成すべし。(第四十六章 一) 「われよろめかす酒杯を汝の手より取除き、わが憤の大杯を取除きたり。汝再びこれを飲むこごあらじ。我これを汝を惱ます者の手に渡さん。かれらは曩に汝の靈魂に向ひて云へらく、なんぢ伏せよ、われら越行かんご、而してなんぢその背を地の如

くし、衢の如くし、彼等の越行くに任せたり。(同第五十一章 二二、二三) 「すべて汝を攻めんごて製られしうつはものは利あるこごなし。興起ちて汝ご争ひ訴ふる舌はなんぢに罪せらるべし。これエホバの僕等のうくる産業なり、是れかれらが我より受くる義なり。(第五十四章 一七) 「エホバは常に汝を導き、乾ける處にても汝の心を満足しめ、汝の骨を堅うし給はん。汝は潤ひたる園のごごく、水の斷わざる泉の如くなるべし。(第五十八章 一) 「汝は麗はしき厨の如くエホバの手に在り。新郎の新婦を喜ぶ如く、汝の神なんぢを喜びたまふべし。(第六十二 三) 「かれらの勤勞はむなしからず、その生むごころの者はわざはいにかゝらず。彼等はエホバの福祉を賜ひし者の裔にして、その子輩も相共に居る可ければなり。かれらが呼ばざるさきに我答へ、かれらが語りへざるに我聞かん。(第六十五章 二四) 「母のその子をなぐさむる如く我も汝を慰めん。汝等見て心喜ばん。汝等の骨は若草のさかゆるごごくなるべし。エホバの手はその僕等にあらはれ、又その仇をはけしく怒り

めに職ひたまへばなり。然れば汝ら自ら善く慎みて汝らの神エホバ愛せよ。然らずして汝ら若し後もごりしつゝ、是等の國人の漏れのことりて汝らの中間に止るゝ者等と親しくなり、之を婚姻をなして互に相往来し。視よ今日われは世人の皆ゆく途を行かん。汝らは

たまはん」。(第六十六章、一三、一四。凡て此等の以賽亞書が) (らの章句に對する人間的答は詩篇第十四篇である)

五一四

かやうな種類の生活に世に普通あるやうな生活との差は、前者に於ては心配もなく、娛樂や多くの保養の必要もなく、又た最後に自己欺瞞の必要もなくして、事物や事情が其のありのまゝに見られ得るこゝにあるのである。かやうな生活の人は、此事物や事情が毎時にも且つ如何なる場合にも善事に成らざるを得ないやうに此等を變更し得、若しくは不利益なく堪へ得るこゝいふ確信を有つて居る。

約翰福音書第十六章二〇—二七。士師記第五章三一。約書記第二十章四五。

然れば人々此途に於ては、健康を損せられざる力とは、一層屢々見出さるゝであらうけれども、必ずしも之を必要とせさせない。弱き者、患める者も常に欣然として作爲するこゝが出来、而して他の途に於ける最

一心一念に善く知るならん、汝らの神エホバの汝らにつきて宜びし諸の善事は、一も缺くる所なかりき、皆なんぢらに臨みてその一も缺けたる者なきなり。同第二十四章一九、二〇。ヨシエア民に言ひけるは、汝らはエホバに事ふるこゝに能はざらん。そは彼は聖神

も壯健な者より一層多く人類の爲め事を成すこゝが充分屢々ある。

今ま爾これを選択せよ、兩の途が爾の力の中にある。

爾現今再び實際にハドリアン皇帝の時代に於ける如くに、最も貴き者最も賤しき者の大多數、同時に教養ある中流階級の一層多き部分が歩いて居る「凡ての世間の途」を擇むならば、爾の運命が爾に折々酷に思はれども、爾は最早不平を言つてはならぬ。爾は自分自身にそうあらんこゝを欲したのではないか、而して自分自身他の途を有たなかつた指導者に随つたのではないか。

之に反して爾若し基督教的の途を擇ぶならば、爾は自分に之を明かに意識せなければならぬ、即ち信仰告白や教會的形式を多く變せんとするこゝは、今や問題でなくして、寧ろ全く健全にして自然的で、人を欣怡に忍耐ならしめ、且つ誰人に對しても好意を抱かしむる基督教を示すこ

五一五

また妬みたまふ神にして、汝の罪愆を赦るしたまはざればなり。汝ら若しエホバを棄て、他神に事へなば、汝らに福祉を降したまへる後にも、亦ひるがへりて汝らに災禍を降して汝らを滅ぼしたまはん。歴代志略下第九章六。然るに我は來りて目に觀る

まではその言を信ぜざりしが、今視れば汝の智慧のなる事、が聞きたるはその半分にも及ばざりき。汝は我が聞きたる風聞に愈れり。イザヤ書第六十五章二四。七月七日頭註二七六頁を見よ。ルカ福音書第二十四章二六。キリストは此

こが重大であることである。斯様な基督教は自明の如くであり、而して何等の不斷の振作を要しないで、機會ある毎に善き正きを爲すことを常に用意してあるものである。(米迦書第五卷六)

是れ吾人の時代が要求し、而して幾千の人が衷心から本能的に渴望し而して近き將來に豫期する所のものである。蓋し是に優れるものが無く而して只だ是のみが現今の世界を有効に改善することが出来るのである

二

預言者イザヤの書より引用された上記の中の最後の言葉は、教養ある階級の現今の人々が靈魂的健康より一層多く心配するに慣れて居る肉體的健康に就いて、語つてある。眞實の神は亦た肉體的病氣の支配者であることが出来、またあらねばならぬことは、先づ第一に全く明白である。(一) 少なくとも精神の落付き意志の先だてる振作が無ければ、神経病や情

意の病氣の日々増加する無数の大軍は、單に醫術的手段のみを以ては殆き治癒せられ能はぬことは、神への何等の關聯なくとも、常識だけでも明白なることである。(二) 此等の病氣と他の多くの疾病との眞實の原因は一層深き所に在るのである。

(一) 出埃及記第十五章二六。申命記第五章二六。同第七章一五。同第十二章三九。

(二) 是れ馬太福音書第九章の痛風病者の話及び吾人の時代からナルムハルトの經驗が之を證明して居る。米國の所謂サイエンチストも正當に之を主張する。

現今危險にも缺乏し始め、而して既に當今新らしき民族移住の襲撃に殆んき堪へぬであらうやうな現代の健康と體力とは、今日何等の科學や技術に由つても根本的に改善せらるゝことが出来ず、また増長する悪化から救はるゝことも出来ない。之を爲す唯一の方法は教養ある階級が凡ての健康なる肉體的生活の基礎に横はる倫理的命令に自發的に復歸する

等の難を受け
て其榮光に入
るべきに非ず
や。

マタイ傳第二
十六章五三、
五四。

我いま十二軍
餘の天使を吾
父に請ふて受
くるこゝ能は
す。爾ら思ふ
や。もし然か
せば如此ある
べき事を聖書
に如何で應は
んや。

「朋友の喝采」
は、皇帝臨終
の際に朋友等

こゝである。此命令を繼續的に無視したこゝに對する警告は、有らゆる
文明國人の多くの家族に於て既に充分明瞭に現存してある。此状態が猶
は數代も續かない中に、其の害傷が必ず諸民族の生活にも明白に分るや
うになるであらう。

改善の端緒は全く哲學的範圍に於て爲されなければならぬ。衛生學だ
けにてはなかく、充分の効果が無い。之に於ける根本問題は、其の解答
に將來の醫學並に將來の哲學の形成が關係するのであるが、矢張次のや
うな疑問である、即ち、肉體との緊密なる關聯を損せざる人間の精神が
苟もあるものであるか、若しくは吾人が人間の精神を名づくるものは、
只だ肉體的機關の機能に過ぎないか、而して第一の場合には、精神の内
體への作用は可能的のものであるが、しかも其の逆より一層強いもので
あり、少なくともそうあり得るものであるかといふ疑問である。

是れ現今の其勢力ある所の至る處に不幸を生ずる唯物説との争に於け

に「君等は予
は生涯予が役
割を好く演じ
たと思ふ」か
と言ひ、やが
て希臘詩人の
句「凡て好け
れば喜んで汝
等の聲を擧げ
俳優の稱讃の
爲め喝采せよ
」と口吟せり
といふ。(譯
者)
ヨハネ福音書
第十六章二〇
一二七
卷末補遺を見
よ。
士師記第五章

る決定的の疑問である。吾人は思つて居る。醫學社會に於ても、此説に反
對の天秤盤が徐々に下り始めるやうに殆んご思はれて居る。病氣を多少
支配し得る精神的力が存在し、而して醫師は其の共同の作用を要求せね
ばならぬこゝは、許され始めた。只だ次のやうな反對が未だ除かれな
いばかりである。即ち、病人には通例正に此力が缺如して居る。而して彼
は此力を自分自身に生ずるこゝが出来ない、また醫師側若しくは看護者
側からの單なる説得若しくは暗示にて之を得るこゝが出来ないといふ反
對である。かくて最後の論理的に拒むべからざる結論が缺けて居る。即
ち、人間以外に在りて(一)彼の力でない力、然し彼の力となるこゝが出
來且つ彼に於て作用するこゝが出来ない力があらねばならぬといふ結論で
ある。是れ理想論的思考の聯鎖に於ける必然なる終結である。是が無け
れば、唯物論は依然として、凡て其の必ず來り而して斥くるこゝの出來
ない不幸を引連れて居る此世の支配者である。

三一。

エホバよ、汝の敵み。是のごさく、亡びよかし。またエホバを愛するものは日の眞盛に昇るが如くなれよかし。かくて後國は四十年のあいだ太平なりき。

ヨシユア記第二十一章四五。

二一七頁六月廿八日註を見よ。
ミカ書第五章

五二〇

(一)世にある最良の哲學であるカント哲學の缺陷は此に在るのである。該哲學は智力の優れた素地の人のみに満足を與へるだけである。是すら必ずしも凡ての場合にそうでない。該哲學は畢竟最後の言葉でなくして、只だ特に教育と修養とによく適した思考の中間段階に過ぎない。疾病を(從てまた死をも)單純に眞實ならぬものと見んと欲する米國のサイエンチズムの缺點も同様である。

三

人生は今日教養ある階級に於ては實に再び、ダンテが其神曲の最初の數句に描寫して居るやうな疑惑、誤謬、邪路の紛糾たる森に似て居る。現今の教養の有らゆる要素、哲學、文學、藝術、是等に劣らず神學の一部分さへ、各其分を之に貢獻し、而して此迷路よりの出行を輕易にせないで、却て之を困難ならしむる。他方には無教育者及び近代の生半教養者の大部分に對しては、社會主義があつて、多くの成立して居るものに

六。彼ら をもてアツスリヤの地を亡ぼし、ニムロテの地の邑々を亡ぼさん、アツスリヤの人我らの地に攻入り、我らの境を踏あらず時には、彼その手より我らを救はん。

二

出埃及記第十五章二六。
二九頁註を見

對する疑もなく正當なる反對を以てし、同時に健全なる精神生活を彼等に妨ぐる無神論的基礎の上に有益なる哲學を用意するの其の無能力を以てする。思想の此等の慰藉なき荒野に於て、眞理を追求する才智ある人士は、屢々多年の間、途方に暮れ、安靜を失ひ、或は彼の「體系」から、或は此「體系」から確實を庶幾しつゝ、あちらこちらに漂泊する。(一)他方には天稟の薄き人は淺薄なる享樂生活の凡庸に身を委ねて居るのである。

(二)彼等の多くは、ニーツェ及び既に彼の前に多くの他の者の運命であつた如く、最後には完全なる狂氣に移り沈んでしまふ。

ダンテが全く正當に認め、而して描寫して居るこゝであるが、此前者に於ては實に只だ或る健全なる常識の光が猶ほ輝いて居るだけである。然し此光は、彼が善き意志を有つて居れば、之が爲めに彼に於ても神的慈恩から恒に保存せられ、而して彼に少なくも人間の普通の状態の不幸を明白に、而して層一層明白になし得るものである。彼は其後ち次

五二二

よ。

申命記第五章

二六。

三〇頁を見よ

同第七章一五

エホバまた諸

の疾病を汝の

身より除きた

まひ、汝らが

知る彼のエジ

プトの悪しき

病を汝の身に

臨ましめず、

但し汝を惡む

者に之を臨ま

せまたふべし

同第三十二章

第(一)に、若し彼が眞に眞面目であるなれば、此光を以て、地獄の深淵を通過して淨罪の山の峻しき狭き上り途に達して、而して最後に、彼が以前殆んき憎まんばかりであつた生活が、清き空氣、明るき日光、人間の有らゆる低き所にある住居を見卸す遠望を以ての美しき曠廓なる山上の如く彼に思はるゝである。今や有らゆる哲學、有らゆる單に外的である教會事件から離れて、凡ての善の、疑ふべからず存在し、悟性にては認識されぬけれども、容易く且つ明白に感じ得る原因、根本力として力への眞實の愛を、地上に於ける此靈の歴史的に存在した而して恒に現存する化神としての基督への愛のみが彼に残留する。此愛からして全く自然に、人間の命令や意見には別に多く頓着することなくして出来るだけ此の模範に倣はんことを努力し力が生ずる。そうすること重大な死をも征服し、其後には他人が何物をも最早や加うるこゝが出来ないやうな、解放せられ、獨立へ覺醒した靈魂の無類なる幸福の感情があるの

三九。

汝ら今觀よ

我こそは彼な

り、我の外に

は神なし。殺

すこと、活か

すこと、撃つ

こと、愈すこ

さは凡てこ

れを爲す、我

手より救出す

ことを得る者

あらず。

三

默示録第二章

一一。

耳ある者は靈

の諸教會にい

である。(一)

(一) 默示録第二章一一。淨罪界第二十七歌一三二、一三九一四一。

是れ單に何等の他の途にては達せられない地上の存在の高所であるのみならず、まだ同時に全く異つた存在の階段への自然的の過渡であり、而して確に唯一の眞實なる過渡である。是より異なつた思想や性向を以ての「天國」を想像することには不可能である。(一) 又た明かに總て此地上の性質のものであり、此世界の爲めに定められてある科學的若しくは教會的努力を天國に持込むことも不可能である。且つ浮世の心配を、「地上の荒誕」に沈んだ精神生活から、突然に且つ全く他力にて、かやうに全く異つた状態に人が達し得ることを全く不可能である。(二) 吾人の考は此點に於て「基督の犠牲の死」を次のやうな人々に取つても救済の力あるものとする人々の所謂敬虔なる意見から甚だしく異つて居る。即ちその人々といふのは、彼等の生活總體に於て基督自身のこと及び其の

ふ所を聴くべし、勝を得るものは第二の死の禍害を受

けず。

淨罪界第十七

歌

汝の途は是より先は峻はしくなく難達でもない。此後は我が言葉や目示を俟つな。汝が意志は自由で、眞直で、健全である。而してその命に従はぬことが誤であらう。

一。生。の。目。的。の。爲。め。に。は。決。し。て。實。際。に。頼。着。せ。な。い。で、眞。實。の。所。恒。に。他。の。神。々。に。仕。へ。て。居。り、而。し。て。只。だ。基。督。の。死。か。ら。蟲。の。よ。す。ぎ。る。利。益。を。得。ん。ご。欲。す。る。人。々。で。あ。る。然。し。慈。恵。の。世。界。に。於。て。も。勿。論。そ。う。機。械。的。に。は。行。か。な。い。此。慈。恵。を。受。取。り。而。し。て。凡。て。の。他。の。生。活。の。財。寶。よ。り。も。是。の。方。を。擇。む。こ。い。ふ。意。志。が、た。ゞ。ひ。其。が。大。抵。は。多。く。の。迷。行。を。斷。絶。を。以。て。只。だ。週。期。的。に。起。り、し。か。も。屢。々。生。活。の。最。終。階。段。に。起。る。に。し。て。も、苟。も。浮。世。の。波。か。ら。救。は。れ。ん。ご。欲。す。る。人。に。於。て、既。に。其。生。存。中。に。現。存。し。な。け。れ。ば。な。ら。ぬ。

(一) 是れまた黙示録が其第二十一章二二に於て明白に言つて居る。
(二) 若し是が眞實であるとしたならば、成るべく早い死が人間の運命の最善のものであり、此地上の生活は不幸に過ぎないわけである。基督教界に於てもそう思はれたことが屢々あつた。帖撒羅尼迦前書第四章一三一—一八。中世紀の法王中の最も偉大なるものなるインノツエンツ三世がまだ大僧正であつた時に書いた小冊子「世間の蔑視即人間状態の悲酸に就て」に於て、明白に之を言つて居る。「日を見る前に死するもの、生命を感じる前に死を味ふ人を

幸福と稱すべきである。」此厭世主義は基督教から出されればならぬ。然らずば舊約書の方が新約書より更に眞實に更に慰藉あるものであらう。

吾人は今や教養ある人々を、彼等は超感覺的の事物の信仰が無ければ彼等の生活の目的を全く達することが出来ない、否な彼等の健康すらをも自分自身に彼等の子孫の爲めに保存することが出来ないを、徐々に再び説服することが出来なくてはならぬ。のみならず、吾人はまた地上に於ける眞にして善である生活を爲すの勇氣をも彼等に復し與へねばならぬ。而して此勇氣は既に高い程度に吾人の目前から去つてしまつて居るのである。

吾人は知りませぬけれども極めて有望に感ずるのであるが、恐らくは

黙示録第二十

一章二二。

われ城の中に

殿あるを見ず

、そは主たる

全能の神及び

小羊その殿な

れば也。

テサロニケ前

書第四章一三

一—一八。

卷末補遺を見

よ。

再び、前に引用した同一の預言者が言つて居るやうな時代がやがて再び来るであらう。「その日聾者はこの書の言葉を聴き、盲者の目はくらきより闇よりみるこゝを得べし。謙だる者は(不幸の者は)獨語聖書)エホバによりてその歡喜をまし、人のなかの貧しき者はイスラエルの聖者によりて快樂を得べし。暴ぶる者は絶わ、侮慢者は亡せ、邪曲の機をうかゞふ者はこゝろく断滅され、心あやまれるものは知識を得、つぶやけるものは教誨をまなばん。」(以賽亞書第二十九章 一八一—二〇、二四)

是れ全體に對する吾人の希望である。吾人は他に希望を有たない。各個人は、生命を得んことを欲するならば、第一世紀の古代の哲學者の如く語るがい。

永遠の計劃に従ひて宇宙の存在を支配し、
天と地とを造り、初から時を導く父よ。

またわれをも快活な高き處に至らしめよ、
光明に歡聲を挙げつゝ、祝福の泉に飽かしめよ、
災禍から免れ、地上の物質の重みから免かれしめよ、
精神の歡喜ある眼を永遠に爾に注がしめよ。

所謂「ボオエテウスの祈禱」より

頭註補遺

緒 論
頭 註 補 遺

エレミヤ書第三十一章(本文一〇、一一頁を見よ)一エホバいひたまふ、其時われはイスラエルの諸の族の神となり、彼らには我民となり。二エホバかくいひたまふ、劍をのがれて遺りし民は曠野の中に恩を獲たり。われ往て彼イスラエルに安息をあたへん。三遠方よりエホバ我に顯れていひたまふ、我窮なきを以て汝を愛せり、故にわれたはす汝をめぐむなり。四イスラエルの童女よわれ復び汝を建ん汝は建らるべし、汝ふたゝび鼓をもて身を飾り歡樂者の舞にいでん。五汝また葡萄の樹をサマリヤの山に植ん、植る者は植てその果を食ふことを欲ん。六エフライムの山の上に守習者の立て呼はる日きたらん。いはく汝ら起よ我らシオンにのぼりて我儕の神エホバにまうでん。七エホバかくいひたまふ汝らヤコブの爲に歡て呼はり萬國の首なる者のために叫べ汝ら示し且歡ひて言へエホバよ、願くはイスラエルの遺れる者汝の民を救ひたまへ。八みよ我彼らを北の地よりひきかへり彼らを地の極より集めん彼らの中には賢者跛者孕める婦子を産じ婦さにも居る彼らは大なる群をなして此處にかへらん。九彼ら悲泣來らん我かれらをして祈禱をもて來らしめ直くして蹶かざる途より水の流に歩みいたらしめん、我はイスラエルの父にしてエフライムは我長子 ればなり。十萬國の民よ汝らエホバの言をきよ之を遠き諸島に示していへイスラエルを散せしものこれを聚め 牧者のその群を守るが如く之を守らん。十一すなはちエホバヤコブを贖ひ彼等よりも強き者の手よりかれを救出したまへり。十二彼らは來てシオンの頂によばりエホバの賜ひし福なる麥と酒と油および若き羊と牛の爲に寄集はん、その靈魂は灌ふ園のごとくならん、彼らは重て愁ふることを無るべし。十三その時童女は舞てたのしみ壯者と老者もろともに樂しまん我かれらの悲

をかへて喜ばなしかれらの怒をさりてこれを慰さめん。十四われ膏をもて祭司の心を飢しめ我恩をもて我民に満しめん。十五エホバ言たまふ。十六エホバかくいひたまふ歎き悲みいたく憂ふの聲ラマに聞ゆ、ラケルその兒子のために歎きその兒子のあらずなりしによりて慰をいす。十七エホバかくいひたまふ汝の聲を禁て哭こと勿れ、汝の目を禁て涙を流すこと勿れ、汝の工に報あるべし彼らはその敵の地より歸らん。十八エホバかくいひたまふ。十九汝の後の日に望あ、兒子等その境に歸らん。二十エホバいひたまふ。二十一われ固にエフライムのみづから歎くなきけり、云く汝は我を懲しめたまふ我は輒に馴ざる憤のごとくに懲治を受たり、エホバよ汝はわが神なれば我を牽轉したまへ然ば我轉るべし。二十二われ輒りし後に悔い教を承しの中に我鞭を撃つ我幼時の羞を身にもてば耻ぢかつ辱しめらるゝなり。二十三エホバいひたまふエフライムは我愛するところの子悦ぶところの子ならずや、我彼にむかひてかたるごに彼を念はざるを得ず、是をもて我勝かれの爲に痛む、我必ず彼を恤むべし。二十四汝のために指路號なき汝のために柱をたてよ汝のゆける道なる大路に心をさめよ、イスラエルの童女よ婦れこの汝の邑々にかへれよ。二十五遣ける女よ汝いつまで流蕩ふやエホバ新き事を地に創造らん、女は男を抱くべし。二十六萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ、我がの俘囚し者を返さん時人々復ユダの地さその邑々に於て此言をいはん、義き居所よ聖き山よ願くはエホバ汝を祝みたまへ。二十七ユダさその諸の邑々に農夫と群を牧ふもの偕に住はん。二十八われ疲れたる靈魂を飢しめすべての憂ふる靈魂をなぐさむるなり。二十九茲にわれ目を醒しみるに我眠は甘かりし。三十エホバいひたまふ視よ我が人の種と畜の種とをイスラエルの荒れユダの家とに播く日いたらん。三十一我彼らを抜き毀ち覆し滅し難さんさうかとひし如くまた彼らを建植んさうかとふべし。三十二エホバいひたまふ。三十三その時彼らは父が酸き葡萄を食ひしによりて兒子の齒浮くさ再びいはざるべし。三十四人はおのく自己の惡によりて死なん凡そ酸き葡萄をくらふ人は、の齒浮く。三十五エホバいひたまふみよ我イスラエルの家とユダの家とに新き契約を立る日きたらん。三十六この契約はわが祖の先祖の手をさりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立し所の如きにあらず、我かれらを娶りたれども彼らはその我契約を破れり。三十七エホバいひたまふ。三十八然ごかの日の後

にわがイスラエルの家に立んところの契約は此なり、即ちわれ我律法をかれらの裏におきその心の上に録さん我は彼らの神となり彼らに我民さなるべし。三十九エホバいひたまふ。四十人おのく其隣さその兄弟に教へて汝エホバを識ご復いはじそは少より大にいたるまで悉く我をなするべければなり。四十一エホバいひたまふ、我彼らの不義を赦しその罪をまた思はざるべし。四十二エホバかく言すなはち日はあたへて晝の光さなし月さ星をさだめて夜の光さなし海を激してその濤を鳴しむる者その名は萬軍のエホバさ言なり。四十三エホバいひたまふもし此等の規律我前に廢らばイスラエルの子孫も我前に設りて永遠も民たることを得ざるべし。四十四エホバかくいひたまふ若し上の天量ることを得下の地の基探ることをいば我またイスラエルのすべての子孫を其もろくの行のために棄べし。四十五エホバこれをいふ。四十六エホバいひたまふ視よ此邑ハナチルの塔より隅の門までエホバの爲に建つ日きたらん。四十七量繩ふたしび直ちにガレブの岡をこぼザアテの方に轉るべし。四十八屍さ灰の谷またゲデロンの溪にいたるまでさ東の山の馬の門の隅にいたるまでの諸の田地皆エホバの聖き處となり永遠におよぶまで再び拔れまた覆さるゝ事なかるべし。

一 月

マタイ福音書第二十一章(本文一月一日、三五頁) 一かれら橄欖山のベテパゲに至りエルサレムに近ける時、イエス二人の弟子を遣さんとして、二彼等に曰けるは爾曹むかふ村に往け、やがて たる驢馬の其子と偕にあるに遇はん、夫を解て我に牽きたれ。三若なんぢらに何とかな言ものあらば主の用なりと曰へさらば直に之を遣すべし。四預言者の言に視よ爾の王は柔和にして驢馬すなはち驢馬の子に乘なんちに来るさシタンの女に告よ。五云るに應せん爲に如此なせる也。六弟子ゆきてイエスの命ぜり如くなし。七驢馬さ其子を牽きたり己の衣をその上に置ければイエスこれに乗り。八衆人おほくは其衣を途に布あるひは樹枝を找て途に布ぬ。九かつ前にゆき後に従ふ人々呼びひけるはダビデの裔ホザナよ主の名に託て来る者は福なり至上處にホザナよ。十イエス、エルサレムに至れるさき都城ごぞりて疎動いひけるは是誰ぞや。十一衆人いひけるは此はガリラヤのナザレより出たる預言者イエスなり。十二イエス神の殿に入て其中なる凡

の賣買する者を逐出し、兎銀者の案鶴をう。者の椅子を倒し。十三彼等に曰けるは我家は祈禱の家と稱らるべしと録さる。然るに爾曹これを盜賊の巢とせり。十四警者跛者の人々殿へ入てイエスに來りければ之を醫しぬ。十五祭司の長と學者たち其行たまへる奇事を見また兒童輩の殿にて呼はりダビデの裔ホザナと云を聞て怒を含み。十六イエスに曰けるは彼等が言こを聞やイエス答て曰けるは然り嬰兒乳哺者の口に讚美を備たりと録されしを未だ讀ざる乎。十七遂に彼等を離れ都城を出てベタニヤに往そこに宿れり。十八翌あさ都城へ返るとき飢ければ、十九路の傍にある一の無花果の樹を見て其處に來りしに葉の他に何も見ざりしかば今よりのち永久も果を結ぶことを得ざれと之に曰たまひければ、無花果立刻に枯ぬ。二十弟子これを見て奇み曰けるは無花果 枯ること何に速や。二一イエス答て彼等に曰けるは我まここに爾曹に告んもし信仰ありて疑はずば此無花果に於るが如耳ならず此山に命じ此より移されて海に入よと云とも亦成ん。二三且なんぢら信じて祈らば求ふ所こごとく得べし。二四イエス殿に入て教たるとき祭司の長および民の長老たち來り曰けるは何の權威を以て此事をなすや誰この權威を爾に予しや。二五イエス答て彼等に曰けるは我も一言なんぢらに問ん、我にその事を告なば我も何の權威をもて之を行さうと云ふことなんぢらに曰べし。二六ヨハネのバプテスマは何處よりぞ天よりか人よりか彼等たがひに論じ曰けるは若し天よりと云ば然ば何ゆゑ信ぜざるかと云ん。二七もし人よりと云ば我僂民を畏る蓋はみなヨハネを預言者と爲べなり。二八遂に答て知す曰イエス彼等に曰けるは我も何の權威を以て之を行か爾曹に語らじ。二九爾曹いかに意ふや、或人二人の子ありしが長子に來りて曰けるは子よ今日わが葡萄園に往て働け。三〇答て否と曰しがのち悔て往たり。三十一また次子にも前の如く曰けるに答て君よ我往べしと曰しが遂に往ざりき。三二此二人のもの孰か父の旨に遵ひし彼等いひけるは長子なりイエス彼等に曰けるは誠し爾曹に告ん、税吏のよび娼妓は爾曹より先に神の國に入べし。三三夫ヨハネ義道をもて來りしに爾曹これを信ぜず税吏娼妓は之を信じたり爾曹これを見てなほ悔改めず彼を信ぜざりき。三四また一の譬を聞け、ある家の主人葡萄園を樹り籬を環らし其中に酒搾をほり塔をたて農夫に貸て他の國へ往しか。三五果期ちがづきければ其果を收ん爲に僕を農夫のものに遣せり三五

農夫ども其僕等を執へ一人を鞭ち一人を殺し一人を石にて撃てり。三六また他の僕を前より多く遣しけることにも前の如くなせり。三七我子は敬ふならんと謂て終に其子を遣し、に、三八農夫等その子を見て互に曰けるは此は嗣子なり、率これを殺して其産業をも奪べしと。三九即ち之を執へ葡萄園より逐出して殺せり。四〇然ば葡萄園の主人きたらん時にこの農夫に何を爲べき乎。四一彼等イエスに曰けるは此等の悪人を甚く討滅し期に及てその果を納る他の農夫に葡萄園を貸すべし。四二イエス彼等に曰けるは聖書に工匠の棄たる石は家の隅の首石となれり是主の行給ることにして我僂の目に奇とする所なりと録されしを未だ讀ざる乎。四三是故に我なんぢらに告ん神の國を爾曹より奪その果を結ぶ民に予らるべし。四四この石の上に墜るものは壞この石上に墜れば其もの碎かるべし。四五祭司の長等およびパリサイの人かれの譬を聞おのれらを指て言るを識。四六イエスを執へんと欲ひ謀じかご唯民を畏たり、蓋人々かれを預言者とすれば也。

詩篇第二十三篇(一月五日、四二頁) 一ダビデのうた エホバはわが牧者なり。われ乏しきことあらじ。二エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にともなひたまふ。三エホバはわが靈魂をいかし名のゆゑをもて、わたしをまじき路にみちびき給ふ。四たさひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれじ。なんぢ我まもに在せばなり。なんぢの管なんぢの杖われを慰む。五なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけ、わが首にあぶらなそぎたまふ、わが酒杯はあふるゝなり。六わが世にあん限りはかならず、恩恵と憐憫とわれにそひきたらん。我はこころにエホバの宮にすまん。

詩篇第三十八篇(一月七日、四六頁) 記念のためにつくれるダビデのうた 一エホバよれがはくは忿怒をもて我をせめ、はげしき怒をもて我をこらしめ給ふなかれ。二なんぢの矢われにあたり、なんぢの手わがうへを壓へたり。三なんぢの怒によりてわが肉には全きこころなく、わが罪によりてわが骨には健かなることなし。四わが不義は首をすきて、かく重荷のごとく負がなければなり。五われ愚かなるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れたゞれたり。六われ折屈てい

たくなげきうなれたり、われ終日かなしみありく。セわが腰はこきくく焼るがこきく、肉に全きころなければなり。八我おさるへはて甚くきつつけられ、わが心のやすからざるによりて歎息さげべり。九あゝ主よわがべての願望はなんぢの前にあり、わが嘆息はなんぢに隠るゝこきなし。十わが胸をざり、わが力おさるへ、わが眼のひかりも亦われなはれたり。十一わが友わが親めるものはわが痲をみて遙にたちわが隣もまた遠かりてたり。十二わが生命をたづぬるものは蹄をまうけ我をそこなはんとするものは悪言をいひ、また終日たばかりを謀る。十三然はあれどわれは驛者のごきくきかず、われは口をひらかぬ啞者のごし。十四如此われはきかざる人のこきく、口にごきあげせぬ人のごきなり。十五エホバよ我なんぢを俟望めり、主わが神よなんぢかならず答へたまふべければなり。十六われ癡にいふ、おそらくはかれらわが事によりて喜びわが足のすべらんごき我にむかひて誇りにたかぶらんご。十七われ仆るゝばかりになりぬ、わが悲哀はたぬすわが前にあり。十八そは我みづから不義ないひあらはし、わが罪のためになしめばなり。十九わがはいきはたちきて、けく、故なくして我をうらむるものおほし。二十悪をもて善にむくゆるものはわれ善事にしたがふが故にわが此ごなれり。二十一エホバよわがはくは我をなはれたまふなけれ、わが神よわれに遠かりたまふなけれ。三三主わがすくひよ速きたりて我をたすけたまへ。

詩篇第七十三篇(一月七日、四六頁) アサフのうた 一神はイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひてまごきに惡あり、二然はあれどわれはわが足つまづけばかり、わが歩すべるばかりにてありき。三こはわれ惡きもの、榮ゆるを見てその誇れる者をなれたみしによる。四かれらは死ぬるに苦しみなく、そのちからは反てかたし。五かれらは人のごきく憂にならず人のごきく患難にあふごきなし。六このゆゑに傲慢は妝飾のごきくその頸をめぐり強暴はころものごきく彼等をおほへり、七かれら肥ふごきりてその目ごきびいで、心の欲ひにまざりて物をうるなり。八また嘲笑をなし惡をもて暴虐のごきくばをいだし高ぶりてものいふ。九その口を天におき、その舌を地にあまねくしむ。十このゆゑにかれの民はこゝにかへり水のみちたる杯をしぼりいだして十一いへらく、神いかで知たまはんや、至上者に一識あらんや。十二視

よかれらは惡きものなるに常にやすらかにしてその富ましくは、れり。十三誠ニわれはいたづらに心をきよめ罪ををかさすして手をあらひたり。十四そはわれ終日なやみにあひ朝ごきに責をうけしなり。十五われもし斯るごきを逃んごいひしならば、なんぢが子輩の代をあやまらせしならん。十六われこれらの道理をしらんごして思ひめぐらしゝにわが眼いたく痛たり。十七われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふか、思へるまでは然りき。十八誠ニなんぢはかれらを滑かなるごころにおきかれらを滅亡におさしいれたまふ。十九かれらは瞬間にやぶゝたるかな、かれらは恐怖をもてごきく減びたり。二十主よなんぢ目をさましてかれらが像をかるしめたまはんごきは夢みし人の目さめたるがごきし。二二わが心はうれへ、わが腎はさゝれたり。二三われおろかにして知覺なし聖前にありて黙にひごしかりき。二四されど我つれになんぢごにもあり、汝わが右手をたもちたまへり。二五なんぢその訓諭をもて我をみちびき、後またわれをうけて榮光のうちに入たまはん。二六汝のほかは我にれをか天にもたん地にはなんぢの他にわが墓ふものなし。二七わが身ごわが心ごはおさるふされど神はわがごころの磐石ごごしへの嗣業なり。二八視よなんぢに遠きものは滅びん。汝をばなれて姦淫をおこなふ者はみななんぢ之をほろぼしたまひたり。二九神にちかづき奉るは我によきごきなり、われは主エホバを避所ごしてそのもろくの事跡をのべつたへん。

イザサ書第六十章(同上) なんぢを苦しめたるもの、子輩はかゞみて汝にきたり、汝をさげしめたる者はごきくくなんぢの足下にふし斯くてなんぢをエホバの都イスラエルの聖者のシオンごごなへん

二 月
 エレミヤ第三十一章一―一四(二月四、九二頁)。補遺緒論の下を見よ。

三 月
 ヘブライ書第六章(三月十四日、一三八頁) 一是故に我儕キリストの教の始を離れ死行の悔改め神に屬る信仰。二萬殊の洗の禮ま手を按こと死し人の復生かゞりなき審判ごごらの教の基は再び置ごきをせずして完全に進むべし。三もし

神許し給はゞ我儕これを行ん。四は一び光照を天の賜をうけ聖靈を蒙り。五神の善言を來世の機能を嘗ひて後。六墮落する者は神の子を再び十字架に釘て顯辱とするが故に復これを悔改に立返らするこ能はざ也。七それ地しはしは其上に降る雨を吸入て耕者の爲になるべき榮殖を生ぜば神より恩を受。八然ご荆棘とあざみを生せば棄られ且つ詛に近く其終は焚るべし。九愛する者よ我儕如此いへご爾曹が此に愈れること即ち救に近ことを深く信ぜり。十神は爾曹が先に聖徒に事へ今も尙これに事するその功勞と聖名の爲に顯し、其愛を忘るゝ不義なる者に非ず。十一爾曹おのゝ終に至るまで疑を懐かざる望を保んが爲に以前と同じ懇勉を表し忘らすして、十二かの信仰と忍耐を以て約束を嗣る者に傲んことを我儕欲へり。十三それ神はアブラハムに約束し給はざき己より大なる者の指て誓ふべきが故に己を指て誓ひ。十四曰給けるは我なんぢを大に惠まん又なんぢの子孫を大に益ん。十五かれ忍て此の如く約束のものを得たり。十六凡そ人は己より優れる者を指て誓ふ、また事を定る誓は凡て彼等の争辯を止るなり。十七然ば神は約束のものを嗣者に其旨の易らざることを愈々表さんとして約束の上にもまた誓を立給へり。十八神の訛謊るこ能ざる此二件の易なきことは前に立さるる望みを執んとして怒を避たる我儕を慰めんが爲なり。十九我儕が此望は靈魂の鑑の如く堅固して動かす暇の内に入る。二十我儕の爲にイエス前驅して其處に入りメキルセテラの班の如く窮なく祭司の長となれり。詩篇第六十一篇(三月二十日、一四六頁) エドトンの體にしたがひて伶長にうたはしめたるダビアのうた。一わがたまひしは黙してたゞ神をまつ、わがすくひは神よりいづるなり。二神こそはわが誓わがすくひなれ、またわが高き楯にあらば我いたくは動かされじ。三なんぢらは何のさきまで人におしせまるや、なんぢら相共にかたぶける石垣のごとく搖ぎうごける籬のごとくに人をたふさんとするか。四かれらは人をたふさき位よりおさんさのみ謀りいつはりなるこび、またその口にてはいはひその心にてはのろふ。五わがたまひよ黙してたゞ神をまつ、そはわがのぞみけ神よりいづ。六神こそはわが誓わがすくひなれ、又わがたかき楯にあらば我うごがされじ。七わが救とわが榮は神にあり、わがちがらの誓わがさげごころに神にあり。八民よいかなる時にも神によりたため、その前になんぢらの心をそ

ぎいだせ、神はわれらの避所なり。九實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり、すべてかれらを權衡におかば上にあがりて虚しきものよりも輕きなり。十暴虐をもて恃するなかれ、掠奪ふもてほこるなかれ、富のまじくは、る時はこれに心をかくるなかれ。十一ちからは神にあり神ひきたび之をのたまへり、われ二次これをきけり。十二あゝ主よあはれみも亦なんぢにありなんぢは人おのゝの作にしたがひて強をなしたまへばなり。

四 月

イザヤ書第二十五章(四月三日、一六二頁) 一エホバよ汝はわが神なり我なんぢを崇めなんぢの名をほめたへん、汝さきに妙なる事をおこなひ古時より定めたることを眞實をもて成たまひたればなり。二なんぢ邑をかへて石堆となし堅固なる城を死墟となし外人の京都を邑となしめす永遠にたつることを得ざらしめたまへり。三この故につよき民はなんぢをあげめ慕ひたる國々の城はなんぢをおそるべし。四はなんぢ弱きもの、保岩となり、乏しきもの、難のさきの保岩となり、風雨のふき、たりて垣をうつごこく暴ぶるもの、荒きたるとき避所となり、熱をさくる蔭となりたまへり。五なんぢ外人の喧嘩をおさへて早ける地より熱をさりのぞく如くならしめ、暴ぶるもの、凱歌をこめて雲の蔭をもて熱をさむる如くならしめたまはん。六萬軍のエホバの山にてもろゝの民のために肥たるものをもて宴をまうけ久しくたくはへたる葡萄酒をもて宴をまうけ隨おほき肥たるもの久しくたくはへたる清るぶだう酒の宴なり。七又この山にてもろゝの民のかぶれる面帕もろゝの國のおほへる外帳をさのぞき。八さこしへまで死を吞たまはん、主エホバはすべての面より涙をぬぐひ、全地のうへよりその民の凌辱をのぞきたまはん、これはエホバの語りたへるなり。九その日此如いはん、これはわれらの神なり、われら俟望めり彼われらを救ひたまはん是エホバなり、われらまぢのぞめり我らそのすくひを歡びたのしむべし。十エホバの手は、この山にさまりモアアはその處にてあくたの水のなかにふまるゝ藁のごとく蹂躪られん。十一彼そのなかにて游者のおよがんとして手をのばすがごこく己が手のばさん、然ごエホバその手の詭計もにその傲慢を伏たまはん。十二なんぢの垣たかき堅固なる城はエホバかたぶけたふし地に

おきて塵にまじへたまはん。

イザヤ書第六十一章(四月三日、一六二頁) 一主エホバの靈われに臨めり、こはエホバわれに膏をそそぎて貧きものに福音をのべ傳ふることを仰だれ我をつかはして心の傷める者をいやし俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ 二エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告しめ又すべて哀むものをなぐさめ 三灰にかへ冠をたまひてシオンの中のかなしむ者にあたへ、悲哀にかへて歡喜のあぶらを与へ、うれひの心にかへて讚美の衣をあたへしめたまふなりかれらは義の樹エホバの植たまふ者その榮光をあらはす者となへられん 四彼等はひさしく荒たる處をつくるひ上古より廢れたる處をおこし荒たる邑々をかされて新にし世々すたれたる處をふたゝび建べし 五外人はたちてなんぢらの群をかひ異邦人はなんぢらの畑をたがへす者となり葡萄をつくる者とならん 六然らばなんぢらはエホバの祭司となへられ、われらの神の役者よばれ、もろくの國の富をくらひ、かれらの榮を以て自らほこるべし 七曩にうけし恥にかへ倍して賞賜をうけ、凌辱にかへ嗣業を以て樂むべし、而してその地にありて倍したる賞賜をたもち永遠によるこびを得ん 八われエホバは公平をこのみ邪曲なるかすめことをにくみ眞實をもて彼等にむくいをあたへ、彼等こそこしへの契約をたつべければなり 九かれらの裔はもろくの國のなかに知れ、かれらの子輩はもろくの民のなかに知れん、すべてこれを見るものはそのエホバの祝したまへる裔なるを辨ふべし 十われエホバを大によるこび、わが靈魂はわが神をたのしまん、そは我にすくひの衣をきせ義の外衣をまさはせて新耶が冠をいたゞき新婦が玉こがれの飾をつくるが如くなしたまへばなり 十一地は芽をいだし畑はまけるものを生するがごとく、主エホバに義と譽をもちもろくの國のまへに生ぜしめ給ふべし。

五月

イザヤ書第四十九章一六(五月七日、二〇六頁) 一もろくの島よ、われにきけ。遠きところのもろくの民よ、耳をかたむけよ。我うまれいづるよりエホバ我を召し、われ母の胎をいづるよりエホバわが名をかたりつけたまへり。二

エホバわが口を利劍となし我をその手のかげにかくし我をささましたる矢さなして塵にをさめ給へり。三また我にいひたまはく汝はわが僕なり、わが榮光のあらはるべきイスラエルなり。四されど我いへり、われは徒然にはたらき益なくむなしく力をつひやしぬ。然はあれど誠にわが審判はエホバにあり、わが報はわが神にあり。五ヤコブをふたゝび己にかへらしめイスラエルを己のまことにあつませんとて我をうまれいでしより立ておのれの僕となしたまへるエホバいひたまふ。我はエホバの前にたふさくせらる又わが神はわが力となりたまへり。六その聖言にいはく、なんぢわが僕となりてヤコブのもろくの支派をおこしイスラエルのうちののこりて全うせしものを歸らしむることはいさ輕し、我また汝をたて、異邦人の光となし我がすくひを地のはてにまで到らしむ。

イザヤ書第五十章四一一(五月七日、二〇六頁) 一主エホバは教をうけしもの、舌をわれにあたへ言をもて疲れたるものを扶支ふることを知得しめたまふ、また朝ごとに醒しわが耳をさまして教をうけし者のごとく聞ことを得しめたまふ。五主エホバわが耳をひらきたまへり、われは逆ふことをせず退くことをせざりき。六われを挫つものにわが脊をまかせわが鬚をぬくものにわが頬をまかせ聴き唾をさくるため面をおふことをせざりき。七主エホバわれを助けたまはん、この故にわれ聴くことなかるべし、我わが面を石のごとくして聴しめらるることなきを知る。八われを義とするもの近きもあり、たれか我とあらそはんや、われら相共にたつべし、わが仇はたれぞや近きとたれ。九主エホバわれを助けたまはん誰かわれた罪せんや、視よかれらはみな衣のごとくふるび黻のためにくひつくされん。十汝等のうちエホバをおそれその僕の聲をきくものは誰ぞや、暗をあゆみて光を照さることもエホバの名をたのみ、おのれの神にたよれ。十一火をおこし火把を帶るものよ、汝等みなその火のほのく、なかなあゆめ、又なんぢらの燃したる火把のなかなあゆめ、なんぢら斯のごとき事をわが手よりうけて悲みのうちに臥すべし。

マタイ傳第十八章二一三五(五月八日、二〇七頁) 二一其時ペテロ、イエスに來りて曰けるは主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯を赦すべきか七次まで乎。二三イエス彼に曰けるは爾に七次とは言ひ七次を七十倍せよ。二三是故に天國は主

その臣と會計を調んとするが如し。二四 調べ始しき千萬金の負債したる者を王に曳來りしに、三五 償ひ方なかりければ之に命じて其身その妻孥とあらゆる所有をみな鬻て償へし曰り。二六 その臣俯伏て拜し曰けるは請われを寬し給はゞ皆償ふべし。二七 是に於てその臣の主憐みて之を釋しその負債を免したり。二八 其臣いで、己より銀一百の負債したる友に遇ければ之を執へ喉をさり負債を返せと曰。二九 その友足下に俯伏て求めいひけるは我を寬し給はゞ皆償ふべし。三〇 然るに之を肯はずしてその負債を償ふまで彼を獄に入れぬ。三一 外の友その爲る事を見て甚だ哀み往て此事を皆その主に告げしかば、三二 主かれを召て曰けるは惡き臣よ爾われに求めしに因て我その負債を悉く免したり。三三 我なんぢを憐みし如く爾も亦友を憐むべきに非ずや。三四 その主いかりて負債をみな償ふまで彼、獄吏に付せり。三五 若しおの、其心より兄弟を救はずば我が天の父も亦なんぢに此の如く行給ふべし。

詩篇第 篇(五月十日、二〇九頁) 一 惡きもの、謀略にあゆまず、つみびさの途にたす嘲るもの、座にすわらぬ者はさいはひなり。二 かゝる人はエホバの法をよるこびて日も夜もこれをおもふ。三 かゝる人は水流のほとりにうゑし樹の期にいたりて實をむすび葉もまた凋まざるこごとく、その作すこころ皆さかぬん。四 あしき人はしからず風のふきさる糞のごとし。五 然ばあしきものは審判にたへず罪人は義きもの、會にたつこころを得ざるなり。六 そはエホバはただじきもの、途をしりたまふ、されど惡きもの、途はほるびん。

詩篇第二篇(五月十日、二〇九頁) 一 何なればもろく、國人はさわぎたち諸民はむなしきこころを謀るや。二 地のもろく、王はたちかまへ群伯はさきに謀り、エホバこそその受膏者とにさからひていふ。三 われらその械をこぼち、その繩をすてんと。四 天に坐するもの笑ひたまはん主かれらを嘲りたまふべし。五 かくて主は忿怒をもてものいひ大なる怒をもてかれらを怖まごはしめて宜給ふ。六 しかれども我わが王をわがきよきシオン山の山にたてたりと。七 われ詔命をのべんエホバわれに宣まへり、なんぢはわが子なり今日われなんぢを生り、八 われに求めよ、さらば汝にもろく、の國を嗣業としてあたへ地の極をなんぢの有としてあたへん。九 汝くるがれの杖をもて彼等をうちやぶり、陶工のうつはもの、

こごとく、打碎かんぞ。十 されば汝等もろく、王よ、ささかれ地の審士輩をしへをうけよ。十一 畏をもてエホバにつかへ戦慄をもてよろこべ。十二 子にくちつけせよ、おそらくはかれ怒をばなち、なんぢら途にほるびん、その忿怒はすみやかに燃べければなり、すべてかれに依頼むものは福ひなり。

創世記第十二章一〇—二〇(五月廿五日、一二四頁) 十 茲に饑饉其他にありければアブラムエジプトに寄寓らんとして彼處に下れり其は饑饉其地に甚しかりければなり。十一 彼近く來りてエジプトに入らんとする時其妻サライに言けは、視よ我汝を觀て美麗き婦人なるを知る。十二 是故にエジプト人汝を見る時は彼の妾なりとて我を殺さん然ど汝をば生存ん。十三 請ふ汝わが妹なりと言へば我汝の故によりて安にしてわが命汝のために生存ん。十四 アブラムエジプトに至りし時エジプト人此婦を見て甚だ美麗となせり。十五 またパロの大臣等彼の視て彼をパロの前に譽めければ婦遂にパロの家に召入られたり。十六 是に於てパロ彼のために厚くアブラムを待ひてアブラム遂に羊牛僕婢牝牡の驢馬および駱駝を多く獲るに至れり。十七 時にエホバアブラムの妻サライの故によりて大なる災、一以てパロを其家を憫したまへり。十八 パロ、アブラムを召して言けるは汝が我になしたる此事は何ぞや汝何故に彼が汝の妻なるを我に告ざりしや。十九 汝何故に彼はわが妹なりといひしや、我幾彼をわが妻にめざらんせり、然ば汝の妻は此にあり擧去るべしと。二十 パロ即ち彼の事を人々に命じければ彼ら其妻および其有る諸の物を送りさらしめたり。

六 月

エレミヤ第三十章(六月六日、二三七頁) 一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ。ニ イスラエルの神エホバ、く告ていふ我汝に言し言をこごとく、書に録せ。三 エホバいふわれ我民イスラエルエジプトの俘囚人を返す日きたらんエホバ、これをいふ我彼らなその先祖にあたへし地にかへらしめん、彼らは之をたもたん。四 エホバのイスラエルエジプトにつきていひたまひし言は是なり。五 エホバかくいふ我ら戦慄の聲なき、驚懼あり平安あらず。六 汝ら子を産む男あるやを尋れ觀よ我男が昔子を産む婦のごごとく手なその腰におき且その面色青青く變るをみるこは何故ぞや。七 哀かなその日は大

にして之に擬ふべき日なし、此はヤコブの患難の時なり然と彼はこれより救出されん。八 萬軍のエホバいふ其日我なんちの項よりその輻をくだきはなし汝の繩目をさかん異邦人は復彼を便役はざるべし。九 彼らに其神エホバと我彼らの爲に立んところの其王ゲビデにつかふべし。十 エホバいふ我僕ヤコブよ懼るゝ勿れ、イスラエルよ驚く勿れ、我汝を遠方より救ひかへし汝の子孫を其らへ移されし地より救ひかへさん。ヤコブは歸りて平穩と寧靜を以ん彼を畏れしむる者なかるべし。十一 エホバいふ我汝と偕にありて汝を救はん、設令われ汝を散せし國々を悉く滅しつくすも汝をば滅しつくさじ、されど我道をもて汝を懲さん、汝を全たく罰せずにはおさざるべし。十二 エホバかくいふ汝の創は愈す汝の傷は重し。十三 汝の訟を理す者なく汝の創を裏む膏藥あらず。十四 汝の愛する者は皆汝を忘れて汝を求めず、是汝の愆の多きと罰の數多なるによりて我仇敵の撃がごとく汝を撃ち嚴く汝を懲せばなり。十五 何ぞ汝の創のために叫ぶや、汝の患は愈ることなし汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我これを汝になすなり。十六 然とすべて汝を食ふ者は食はれ、すべて汝を虐ぐる者は皆さらはれ、汝を掠る者は掠られん、凡て汝の物を奪ふ者は我これをして奪はるゝ事にあはしむべし。十七 エホバいふ我汝に膏藥を貼り汝の傷を醫さんそは人汝を棄られし者さよび尋る者なきシオンさいへばなり。十八 エホバかくいふ視よわれかの據移されたるヤコブの天幕をかへし其住居をあはれまん、斯邑はその故の丘埜に建られん城には宜き様に人住はん。十九 感謝と歡樂者の聲とその中よりいでん、我かれらを増ん彼ら少からじ。我彼らを崇せん彼ら蕪められじ。二十 其子は曠昔のごとくあらん、其集會は我前に固く立ん凡かれを虐ぐる者は我これを罰せん。二十一 其首領 本族よりいで其督者はその中よりいでん、我彼をちかづけ彼に近かん、誰かその生命を繋て我に近くものあらんやエホバいふ。二十二 汝等は我民となり我は汝らの神さならん。二十三 みよエホバの暴風あり怒と旋轉風いでゝ惡人の首をうたん。二十四 エホバの烈き忿はかれがその心の思を行ひてこれを送るまでは息じ末の日に汝ら明にこれを曉らん。

ホセア第二章(六月六日、二三七頁) - 汝らの兄弟に向ひてはアンミ(わが民)と言ひ汝らの姉妹にむかひてはルハマ

(憐まるゝ者)と言へ。ニ なんぢらの母さあげつらへ論辯ふことをせよ、彼はわが妻にあらず我はかれの夫にあらざるなり、なんぢら斯してかれにその面より淫行を除かせ、その乳房の間より姦淫をのぞかしめよ。三 然らざれば我かれを剥て赤體にしその生れいでたる日のごとくにし、また荒野のごとくならしめ潤ひなき地のごとくならしめ、渴によりて死しめん。四 我その子等を憐まし淫行の子等なればなり。五 かれらの母は淫行をなせり、かれらを生る者は恥べき事をおこなへり蓋かれいへる言あり、我はわが戀人 につきたがはん、彼らはわがパン、わが水わが羊毛、わが麻、わが油、わが飲物などを我に與ふるなり。六 この故にわれ荊棘をもてなんぢらの路をふさぎ、垣をたてゝ彼にその徑をぬざらしむべし。七 彼はその戀人たちの後をしたひゆげども追及ことなく、之をたづねれども遇ことなし、是においで彼はん我ゆきてわが前の夫にかへるべし、かのごときわが状態は今にまさりて善かりき。八 彼が得る穀物と酒と油はわが與ふるところ彼がバアルのために用ぬたる金銀はわが彼に増あたへたるところなるを彼はしらざるなり。九 これによりて我わが穀物をその時におよびて奪ひわが酒をその季にいたりてうばひ、又かれの裸體をおほふに用ぬべきわが羊毛およびわが麻をさらん。十 今われかれの恥るところをその戀人等の目のまへに露はすべし、彼をわが手より救ふものあらじ、十一 我かれがすべての喜樂すなはち祝筵新月のいはひ安息日および一切の節會をして息しめん。十二 また彼の葡萄の樹と無花果樹をそこなはん、彼さきに此等をさして我が戀人の我にあたへし賞賜なりと言しが、われこれを林さなす野の獸をしてくらはしめん。十三 われかれが耳環頸玉などを掛てその戀人らをしたひゆき我をわすれ香をたきて事へしもしろくのバアルに目のゆゑをもてその罪を罰せんエホバかく言たまふ。十四 斯るがゆゑに我かれを誘ひて荒野にみちびきいり、終にかれの心をなぐさめ。十五 かしこを出るや直ちにわれかれにその葡萄園を與へアコル(患難)の谷を望の門となしてあたへん、彼はわかゝりし時のごとくエジプトの國より上りきたりし時のごとくかしこにて歌うたはん。十六 エホバ言たまふその日にはなんぢ我をふたゝびバアリさよばすしてイシ(吾夫)さよばん。十七 我もろくのバアルの名をかれが口よりさりのぞき、重ねてその名を世に記憶せらるゝこと無らしめん。十八 その日には我かれら(吾民)のために

野の獸そらの鳥および地の昆蟲と誓約をむすび、また弓箭をかり戦争を全世界よりのぞき、彼らをして安らかに居しむべし。十九われ汝をめぐりて永遠にいたらん、公義と公平と寵愛と憐憫をもてなんぢを娶り、二十かはるこなき眞實をもて汝をめぐるべし、汝エホバをしらん。二一エホバいひ給ふその日われ應へんわれは天にこたへ天は地にこたへ、二二地は穀物と酒と油とに應へ、または是等のものはエズレルに應へん。二三我わがためにかれを地 まき憐まれざりし者をあはれみ、わが民ならざりし者にむかひて汝はわが民なりといはん、かれらは我にむかひて汝はわが神なりといはん。

七 月

セバニヤ書第三章一四—二〇（七月十五日、二八六頁） 十四シオンの女よ歡喜の聲を擧よ、イスラエルよ樂み呼はれエルサレムの女よ心のかぎり喜び樂め。十五エホバすでに汝の鞫り止め、汝の敵を逐はらひたまへり、イスラエルの王エホバ汝の中にいます、汝はかされて災禍にあふこあらじ。十六その日にはエルサレムに向ひて言あらん、懼るゝなかれシオンよ汝の手をしなへ垂るゝなかれ。十七なんぢの神エホバなんぢの中にいます、彼は拯救を施す勇士なり彼なんぢのために喜び樂しみ、愛の餘りに黙し汝のために喜びたりたまふ。十八われ節會のこゝにつきて憂ふるものを集めん 彼等は汝より出し者なり、恥辱かれらに蒙むること重負のこゝし。十九視よその時われ汝を虐過る者を盡く置し足蹙たるものを救ひ逐はなれたる者を集め、彼らをして其羞辱を蒙りし一切の國にて稱譽を得させ、名を得させべし。二十その時われ汝らを携へその時われ汝らを集むべし、我なんぢらの目の前において汝らの俘囚をかへし汝らをして地上の萬國に名を得させ稱譽を得させしエホバこれを言ふ。

マタイ傳第二十六章三七—四六（七月十九日、二九一頁） 三セペテロ及セバダイの二人の子を携へ憂へ哀みを催し、三八彼に等曰けるは我心いたく憂へて死るべし、り也、こゝに待て我と偕に目を醒しなれ。三九少し進往てひれふし祈いひけるは吾父よ若かなは、此杯を我より離ち給へ、然ぞ我心の從を成んとするに非ず、聖旨に任せ給へ。四十而して弟子に來り

其寢たるを見てセテロに曰けるは此如一時も我と偕に目を醒るこゝ能はざる乎。四一惑に入ぬやう、目を醒かつ祈その靈には願ふなれど肉體よわきなり。四二二次ゆきて復いのり曰けるは吾父よ若われに此杯を飲まで離つこゝ能すば聖旨に任せ給へ。四三來りて又かれらの寢たるを見これ彼等の目疲たる也。四四彼等を離れて又ゆき第三次も同言をもて祈れり。四五遂に其弟子に來りて曰けるは今寢て休め時は近し、人の子罪人の手に付されん。四六起よ我偕往べし、我を賣す者近きたり。

八

マタイ傳第十二章一八一—三六（八月二日、三〇五頁） 十八視よ我が選し我僕すなはち我心に適たる我が愛む者われ之に我靈を賦へん、彼異邦人に審判を示すべし。十九彼は競こなく喧こなき人街に於て其聲を聞こなき。二十審判をして勝せしむるまでは傷める葦を折こなく煙れる麻を熄こなき。二一異邦人も亦その名に頼べしこ有に應せん爲なり。二二爰に鬼に憑たる譬の一ざる者をイエスの所に携來りければ此譬の瘡を醫して言ひ見るやうに爲り。二三衆人みな奇みて曰けるは此はダビデの裔には非ざる乎。二四パリサイの人きゝて曰けるは此人は鬼、王マルセルを役ふに非ざれば鬼を逐出こなき。二五イエスその心を知て彼等に曰けるは凡て相争ふ國は亡び、凡て相争ふ邑や家は立べからず。二六サタン若サタンを逐出さば自ら相争ふなり、然ば其國いかで立んや。二七若われマルセルに由て惡鬼を逐出さば爾曹の子弟は誰に由て之を逐出すや、夫かれらは爾曹の裁判人となるべし。二八若われ神の靈に由て鬼を逐出しならば神の國はもはや爾曹に至れり。二九また勇士をまづ縛らざれば如何ぞ其家に入その家具を奪ふこゝを得んや、縛て後に其家を奪ふべし。三十我と偕ならざる者は我に背き、我と偕に飲ざる者は散すなり。三一是故に爾曹に告ん人々の凡て犯す所の罪と神を瀆こは赦れん、然ぞ人々の聖靈を瀆こは赦ざるべからず。三二言を以て人の子に背く者は赦さるべし、然ぞ言をもて聖靈に背く者は今世に於ても亦來世に於ても赦さるべからず。三三或は樹をも善とし其果をも善とせよ、或は樹をも惡とし其果をも惡とせよ、夫樹は其果に由て知るゝなり。三四あゝ、蝮の裔よ爾曹惡にして何

で善を言ふことを得んや、夫心に充るより口に言ふ者なれば也。三五善人は心の善庫より善ものを出し、悪人はその悪庫より悪ものを出せり。三六われ爾曹に告ん凡て人のいふ所の虚言は審判の日に之を訴へざるを得じ。

詩篇第七十一篇(八月五日、三一―二頁) 一エホバよ我なんぢに依頼む、れがはくは何の日までも耻うくることなからしめ給へ。二なんぢの義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ、なんぢの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ。三れがはくは汝わがすまひの誓となりたまへ、われ恒にそのまゝに往くことを得ん、なんぢ我をすくはんとて勅命をいだしたまへり、そは汝はわが誓わが城なり。四わが神よあしきもの、手より、不義、殘忍なる人のてより我をまぬかれしめたまへ。五主エホバよ、なんぢはわが望なり、わが幼少よりの恃なり。六われ胎をはなるより汝にまもられ母の腹にありしときより汝にめぐまれたり。我つれに汝をほめたへん。七我おほくの人のにあやしまるゝごとき者となれり、然ごなんぢはわが堅固なる避所なり。八なんぢの頌辭となんぢの頌美とは終日わが口にみちん。九わが年老ゆるごとき我をすてたまふなかれ、わが力おとろふるごとき我をばなれたまふなかれ、十わが仇はわがことを論らひ、わが靈魂をうかふ者はたがひに議ていふ十一神かれを離れたり、彼をたすくる者なしかれを追てさらへよ。十二神よわれに遠ざかりたまふなかれ、わが神よこゝろ來りて我をたすけたまへ。十三わがたましひの敵ははぢ且おそろへ我をそこなはんとするものは勝と辱におほはれよ。十四されど我はたへず望をいだきていやますく汝をほめたへん。十五わが口はひれもす汝の義となんぢの救をなたらん、われその數をしらざればなり。十六われは主エホバの大能の事跡をたづさへゆかん、われは只なんぢの義のみをなたらん。十七神よなんぢわれを幼少より教へたまへり、われ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたへたり。十八神よれがはくはわれ老て頭髮しろくなるも我がなんぢの力を次代にのべつたへ、なんぢの大能を世にうまれいづる凡のものに宣傳ふるまで我をばなれ給ふなかれ。十九神よなんぢの義もまた甚たかし、なんぢは大なることをなしたまへり、神よたれか汝にひこしき者あらんや。二十汝われを多のおもき苦難にあはせたまへり、なんぢ再びわれを活し、われらを地の深所よりあげたまはん。二一れがはくは我をいよく大ならしめ歸り

きたりて我をなぐさめ給へ。二二わが神よさらばわれ筆をもて汝をほめ、なんぢの眞實をほめたへん。二三イスラエルの聖者よわれ琴をもてなんぢを誦うたはん。二四われ聖前にうごまきわが口唇よろこびなんぢの頌ひたまへるわが靈魂おほいに喜ばん。二五わが舌もまた終日なんぢの義をかたらん、われを害はんとするもの愧慚つればなり。

詩篇第百十五篇(同上) 一エホバよ榮光をわれらに歸するなかれ、われらに歸するなかれ、なんぢのあはれみ汝のまこと、の故によりてたゞ名にのみ歸したまへ。二もろくの國人はいかなればいふ、今かれらの神はいづくに、りやご。三然ぞわれらの、は天にいます、神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり。四かれらの偶像はしるがれと金にして人の手のわざなり。五その偶像は口あれどいはず、目あれどみず。六耳あれどきかず、鼻あれどかかず。七手あれどさらず、脚あれどあやまず、喉より聲をいだすことなし。八此をつくる者ごこれに依頼むものごは皆これにひこしからん。九イスラエルよなんぢエホバに依頼めエホバはかれらの助かれらの盾なり。十アロンの家よなんぢエホバによりたのめエホバはかれらの助かれらの盾なり。十一エホバを畏るゝものよエホバに依頼めエホバはかれらの助かれらの盾なり。十二エホバは我儕をみこゝろに記たまへり、われらを恵みイスラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ。十三また小なるも大なるもエホバをおそるゝ者めぐみたまはん。十四願くはエホバなんぢらを増加へなんぢらごなんぢらの子孫ごをまじくはへ給はんことを。十五なんぢらは天地をつくりたまへるエホバに恵まるゝ者なり。十六天はエホバの天なり、されど地は人の子にあたへたまへり。十七死人も幽寂ごころに下れるものもヤハを讚稱ふるごことなし。十八然ぞわれらは今より永遠にいたるまでエホバを讚まつらむ汝等エホバをほめたへよ。

詩篇第百十六篇(同上) 一われエホバを愛しむ、そはわが聲ごわが願望ごなき。たまへばなり。二エホバみしを我にかたぶけたまひしが故にわれ世にあらんかぎりエホバを呼まつらむ。三死の繩われをまさひ陰府のくるしみ我にのぞめりわれは患難ごうれへまにあへり。四その時われエホバの名をよべり、エホバよ願くはわが靈魂をすくひたまへ。五エホバ恩恵仰たかにして公義まじませり、われらの神はあはれみ深し。六エホバは愚かなるものを護りたまふ、われ卑く

せられしがエホバ我をすくひたまへり。セわが靈魂よなんぢの平安にかへれ、エホバに豊かになんぢを待ひたまへばなり。八 汝がわがたましひを死より、わが目をなみだより、わが足を顛蹶よりたすけいだしたまひき。九 われは活るもの、國にてエホバの前にあゆまん。十 われ大になやめりさいひつゝもなほ信じたり。十一 われ惶てしききに云らく、すべての人はいつはりなりき。十二 我いかにしてその賜へるもろく、恩恵をエホバにむくいんや。十三 救のさかづきをさりてエホバの名をよびまつらむ。十四 我すべての民のまへにてエホバにわが誓をつくのはん。十五 エホバの聖徒の死はそのみまへにて貴し。十六 エホバよ誠にわれはなんぢの僕なり、われはなんぢの婢女の女にして汝のしもべなり、なんぢのが縲縄をさきたまへり。十七 われ感謝をそなへものとして汝にさげん、われエホバの名をよばん。十八 すべて民のまへにてエホバにわがちかひを償はん。十九 エルサレムよ汝のなかにてエホバのいへの大庭のなかにて此をつくのふべし、エホバを讃まつれ。

詩篇第四百七篇(同上) 一 エホバをほめたまへよ、われらの神をほめうたふは善きことなり樂しきことなり稱まつるはよろしきに適へり。二 エホバはエルサレムをきづきイスラエルのさすらへる者をあつめたまふ。三 エホバは心のくだけたるもつを醫し、その傷をつゝみたまふ。四 エホバはもろくの星の數をかぞへて、すべてこれに名をあたへたまふ。五 われらの主はおほいなり、その能力もまた大なり、その智慧はさきまりなし。六 エホバは柔和なるものをさへ、惡きものを地にひきおこしたまふ。七 エホバに感謝してうたへ琴にあはせてわれらの神をほめうたへ。八 エホバは雲をもて天をおほひ地のために雨をそなへもろくの山に草をははしめ。九 くひものを獸にあたへ、並なく小鴉にあたへたまふ。十 エホバは馬のちからを喜びたまはず人の足をよみしたまはず。十一 エホバはおのれを畏るゝもののおのれの憐憫をのぞむものを好したまふ。十二 エルサレムよエホバをほめたまへよ、シオンよなんぢの神をほめたまへよ。十三 エホバはなんぢの門の關木をかたうし汝のうちなる子輩をさきはたまひたればなり。十四 エホバは汝のすべての境にやはらぎをあたへいと嘉麥をもて汝をあかしめたまふ。十五 エホバはそのいましめを地にくだしたまふ、その聖言はいとすみや

かにはしる。十六 エホバは雪をひつじの毛のごとくからせ霜を灰のごとくにまきたまふ。十七 エホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふ、たれかその寒冷にたふることをいんや。十八 エホバ聖言をくだしてこれを消しその風をふかじめたまへばもろくの水はながる。十九 エホバはそのみこさばをヤコブに示しそのもろくの律法とその審判をイスラエルにせしめたまふ。二十 エホバはいづれの國をも如此あしらひたまひしにあらず、エホバのもろくの審判をかれらはしらざるなり、エホバをほめたまへよ。

マコ徳第九章一四—二九(八月十七日、三二—三五頁) 十四 イエス弟子等の所にきたり多の人々の彼等を環圍るゝ學者たちの彼等と論じたりしを見たり。十五 衆人たゞちに彼を見て駭き趨よりて禮をなせり。十六 イエス學者に問けるは弟子の何事を論ずる乎。十七 衆人のうち一人こたへけるは師よ我ものいはぬ惡鬼に憑れたる我子を爾に携來れり。十八 惡鬼の憑時は彼傾跌され沫をふき齒を切て疲勞はつる也これを逐出さんことを我なんぢの弟子に請しかど彼等能ざりき。十九 イエス彼等に答て曰けるは噫信なき世なる哉いつまで我なんぢらと共に在んや何時まで我なんぢらを忍んや彼を我に携來れ。二十 彼等その子を携來りしに惡鬼イエスを見て忽ち彼を拘攣しむ彼地に仆れ輾轉て沫を出ぬ。二一 イエスその父に問けるは幾何時より如此なりしや父いひけるは少時より也。二三 惡鬼しばしば之を火の中あるひは水の中に投入て殺んさせり爾もし爲こまを得ば我儕を憐みて助よ。二四 イエス彼に曰けるは爾もし信する事を得ば信する者に於て爲あたはざる事なし。二五 其子の父たゞちに聲をあげ涙を流して曰けるは主よ我信す我が信なきを助たまへ。二六 イエス衆人の叢集を見て惡鬼を叱いひけるは噫にして雙なる惡鬼よ我なんぢに命す出て再び之に入なかれ。二七 惡鬼さげびて大に彼を拘攣しめて出しかば彼死たる者の如なりぬ人々これを已に死り云。二八 イエスその手を執て扶ければ彼たてり。二九 イエス家に入りて其弟子ひそかに問けるは我儕これを逐出こと能ざりしは何故ぞ。三〇 イエス彼等に曰けるは此族は所食と斷食に非れば逐出こと能ざる也。

三〇 傳第十二章三一(八月廿一日、三三〇頁) 斯世はいま審判せらる斯世の主はいま逐出さるべし。

ミカ書第七章二一〇(八月廿九日、三四一頁)ニ善人地に絶ゆ、人の中に直き者なし、皆血を流さんさ伏て何ひ各々網をもてその兄弟を獲る。三兩手は悪を善なすに急がし牧伯は要求め裁判人は賄賂を取り方ある人はその心の悪き罪を言あらはし斯共にその悪をあざなひ合す。四彼らの最も善き者も荆棘のごとく最も直き者も刺ある樹の垣より悪し汝の觀望人の目すなはち汝の刑罰の日いたる、彼らの中に今混亂あらん。五汝ら伴侶を信する勿れ朋友を恃むなかれ、汝の懐に寝る者にむかひても汝の口の戸を守れ。六男子は父を藐視め女子は母に背き媳は姑に背かん、人の敵はその家の者なるべし。七我はエホバを仰ぎ望み我を救ふ神を望み俟つ、我神われに聽たまふべし。八わが敵人よ我につきて喜ぶなかれ、我仆るれば興あかる、幽暗に居ばエホバ我の光となりたまふ。九エホバわが訴訟を理し我ために審判をおこなひたまふまで我は忍びてその忿怒をかうむらん其は我これに罪を得たればなりエホバつひに我を光明に携へいだしたまはんと而して我エホバの正義を見ん。十わが敵これを見ん、汝の神エホバは何處に在るや我に言る者恥辱をかうむらん我かれを目に見るべし彼は街衢の泥のごとくに踏つけらるべし。

詩篇第九篇(八月廿九日、三四一頁) ムツラベン(調子の名)にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた。一われ心をつくしてエホバに感謝し、そのもろくの奇しき事述をのべつたへん。ニわれ汝によりてたのしみ且よろこばん、至上者よなんちの名をほめうたはん。三わが仇しりぞき置きたふれて御前にほるぶ。四なんちわが義をわが訟をまほりたまへばなり、なんちほたらしき審判をしつ、寶座にすわりたまへり。五またもろくの國をせめ惡きものをほろぼし世々かぎりなくかれらが名をけしたまへり。六伊はたはてて世々あれすたれたり、汝のくつがへしたまへるもろくの邑はうせてその跡だにもなし。七エホバはごこしへに聖位にすわりたまふ、審判のためにその寶座をまうけたまひたり。八エホバは公義をもて世をさばき直をもてもろくの民に審判をおこなひたまはん。九エホバは虚げらるゝもの、城また難みのさきの城なり。十聖名をしるものはなんちに依頼ん、そはエホバよなんちを尋るもの、棄られしこと斷てなければなり。十一シオンに住たまふエホバに對ひてほめうたへ、その事述をいらくの民のなかにのべつたへよ

十二血を間糺したまふものは苦しむものを心にさめてその號呼をわすれたまはず。十三エホバよ我をあはれみたまへ、われを死の門よりすくひいだしたまへる者よ、わがはくは仇人のわれを難むるを視たまへ。十四されば我なんちのすべての頌美をのぶるを得またエオンのむすめの門にてなんちの救をよるこばん。十五もろくの國民はおのがつくれる階におちいりそのかくしまうけたる網におのが足をさらへらる。十六エホバは己をらしめ審判をおこなひたまへり、あしき人はおのが手のわざなる蹄にかゝれり、ヒガイオン、セラ。十七あしき人は陰府にかへるべし、神をわするゝもろくの國民もまたしからん。十八貧者はつねに忘らるゝにあらす苦しむもの、望はごこしへに滅ぶるにあらず。十九エホバよ起たまへ、わがはくは勝を人にけしめたまふなかれ御前にてもろくのくにびごに審判をうけしめたまへ。二十エホバよ願くばかれらに懼をおこさしめたまへ、もろくの國民におのれた人なることを知しめたまへ、セラ

九 月

詩篇第五十一篇(九月一日、三四七頁) ダビデがバテセバにかよひしの際言者ナタンの來れるさきよみて伶長にうたはしめたる歌。一あゝ神よわがはくはなんちの仁慈によりて我をあはれみ、なんちの憐憫のおほきによりてわがもろくの愆をけしたまへ。ニわが不義をこころあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ。三われはわが愆をしる、わが罪はつねにわが前にあり。四我はなんちにむかひて獨なんちに罪をなかし聖前にあしきことを行へり、されば汝ものいふさきは義とせられ、なんち鞠くさきは咎めなしとせられ給ふ。五視よわれ邪曲のなかにうまれ罪にありてわが母われをばらみたりき。六なんち眞實をこころの衷にまでぞみ、わが隠れたるこころに智慧をらしめ給はん。七なんちヒツブをもて我をきよめたまへ、さらばわれ淨まらん、我をあらひたまへさらばわれ雪よりも白からん。八なんち我によろこび快樂をなきかせ、なんちが碎きし骨をよろこばせたまへ。九わがはくは聖顔をわがすべての罪よりそむけ、わがすべての不義をけしたまへ。十あゝ神よわがために清心をつくり、わが裏になほき靈をあらたにおこしたまへ。十一われを聖前より棄たまふなかれ、汝のきよき靈をわれより取たまふなかれ。十二なんちの救のよろこびを我にかへし自

由の儘をあたへて我をたもちたまへ。十三さらばわれ慰をさせる者になんちの途をなしへん罪人はなんちに歸りきたるべし。十四神よわが救のかみよ血をながし、罪より我をたすけいだしたまへ、わが舌は聲たからかになんちの義をうたはん。十五主よわが口唇をひらきたまへ、然ばわが口なんちの頌をあらはさん。十六なんちは祭物をこのみたまはず、もし然らずば我これをさげん、なんちまた燔祭をも悦びたまはず。十七神のもさめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり、神よなんちは碎ける悔しころを藐しめたまふまじ。十八わがはくは聖意にしたがひてシオンにさいはひし、エルサレムの石垣をきづきたまへ。十九その時なんち義のそなへもの燔祭を全きはんさいさを悦びたまはん、かくて人々なんちの祭壇に牡牛をさぐべし。

イザヤ書第四十九章一四—二六(九月十四日、三六三頁) 然ぞシオンはいへり、エホバ我をすて主われをわすれたまへり。十五婦その乳兒をわすれて己がはらの子をあらはれまざるこゝあらんや、縦ひかれら忘るゝこゝありとも我はなんちを忘るゝこゝなし。十六われ掌になんちを彫刻めり、なんちの石垣はつれにわが前にあり。十七なんちの子輩はいそぎ來り、なんちを毀つもの汝をあらす者はなんちより出せん。十八なんち目をあげて環視せよ、これらのもの皆あひあつまりて汝がもこに來るべし、エホバ宣給く、われは活なんち此等をみな身によそほひて飾さなし新婦の帯のごまくに之をまこふべし。十九なんちの荒かつ廢れたるこゝろ毀たれたる地はこのち住ふもの多くして狭きをおぼへん、なんちを吞つくし、もの遙にはなれ去るべし。二十むかし別れたりなんちの子輩はのちの目なんちの耳のあたりにて語りあはん云く、こゝは我がために狭しなんち外にゆきて我にすむべき所をいじめよ。二一その時なんち心裏にいはん、誰がわがために此等のものを生じや、われ子をうしなひて獨居かつ伴はれ且さすらひたり誰かこれを育じや、視よわれ一人のこされたり此等はいづこに居しや。二二主エホバいひたまはく、視よわれ手をもろくの國にむかひてあげ旗をもろくの民にむかひてたてん斯てかれらは、その懐中になんちの子輩をたづさへ、その肩になんちの女輩をのせきたらん。二三もろくの王はなんちの養父となり、その後、はなんちの乳母となり、かれらはその面を地につけて汝にひ

れふし、なんちの足の塵なめん而して汝わがエホバなるをしり、われを俟望むもの、恥をかうむるこゝなきを知るならん。二四勇士がうばひたる掠物をいかでさりかへし強暴者がかすめたる辱をいかで救ふことを得んや。二五されどエホバ知此いひたまふ云く、ますらをが掠めたる辱もさりかへされ強暴者がうばひたる掠物もすくひいださるべし、そは我なんちを攻るものをせめてなんちの子輩をすくふべければなり。二六我なんちを虐ぐるものにその肉をくらはせまたその血をあたらしき酒のごまくにのませて酔しめん、而して萬民はわがエホバにして汝をすくふ者なんち贖ふものヤコブの全能者なるこゝを知るべし。

イザヤ書第五十章六一—(九月十四日、三六三頁)補遺五月の下を見よ。

イザヤ書第五十五章一一—二(九月十四日、三六三頁) 一噫なんちら渴ける者こまろくく水にきたれ、金なき者もきたるべし汝等きたりてかひ求めてくらへ、きたれ金なく價なくして葡萄酒と乳をなかへ。二なにゆゑ糧にもあぬ者のために金をいだし飽こまざるもの、ために勞するや、われに聽従がへ、さらばなんち、美術をくらふなを脂をもてその靈魂をたのしめるを得ん。三耳をかたぶけ我にきたりてきけ汝等のたましひは活べし、われ亦なんちらこゝしへの契約をなしてダビデに約せし變らざる恵をあたへん。四視よわれ彼をたて、もろくの民の證さし又もろくの民の君さなし命令する者さなせり。五なんちは知ざる國民をまねかん、汝をしらざる國民はなんちのもこに走りきたらん此はなんちの神エホバイスラエルの聖者のゆゑによりてなり、エホバなんちを尊くしたまへり。六なんちら過こをうる間にエホバを尋ねよ近くぬたまふ間によびもこめよ。七惡き者はその途をすて、よこしまなる人はその思念をすて、エホバに反れ、されば憐憫をほこしたまはん我等の神にかへれ豊に救をあたへたまはん。八エホバ宣給くわが思はなんちらの思ここなり、わが道はなんちらのみちさ異なれり。九天の地よりたかきごまろく、わが道はなんちらの道よりも高、わが思はなんちらの思よりもたかし。十天より雨くだり雪おちて復かへらす地をうるほして物をはらしめ萌をいださしめて播ものに種をあたへ食ふものに糧をあたふ。十一如此わが口よりいづる言もむなしくは我にかへらす、わが

喜ぶところを成しわが命じ遣りし事をはたさん。十二なんぢらは喜びて出きたり平穩にみちびかれゆくべし山と岡とは
聲をはなちて前にうたひ野にある樹はみな手をうたん。十三松樹はいばらにかはりては松岡栝樹は棘にかはりてはゆべ
し、此はエホバの頌美となり並にこしへの微となりて絶ることからん。

へブライ書第十章二六―三九(九月廿二日、三七二頁) 二六若われら眞理を曉得せられし後なほ放縱に罪を犯さば罪を
贖ふ犠牲また有ることなく。二七惟おそれて審判を待たざるは仇敵を禁滅さんとする烈火のみ遺るなり。二八モーセの律法
を廢る者もし二三人の證あらば恤まるゝこと無して死べし。二九況て神の子を蹂躪みづから潔られし契約の血を尋常の
ものとなし又恩を施す體を侮る者の受べき其罰の重こと幾何と意ふや。三十主いはく仇を報るは我にあり我報べし又い
はく主その民を鞠かん如此いへる者を我儕は知。三一活神の手に陥るは畏るべき事なり。三二なんぢら昔し光照を受し
のち大なる苦の戰爭を忍たりし日を憶起べし。三三或は詭詐と艱辛なうけ人に觀玩の如くせられ或は斯る事にあふ者に
興ることな爲り。三四そは爾曹わが縲纆に在る體恤また己かために天に於て愈美たる常に存つべき業あるを知り人の爾
曹が業を奪んとするをも喜びて受たり。三五是故に爾曹の大なる報を受べき信仰を投棄ること勿れ。三六なんぢら必ず
用べきものは忍耐なり是神の旨を行ひて約束の者を受んが爲なり。三七今片時ありて來る者きたらん必ず遅らじ。三八
義人は信仰に由て生べし若し退かば我が靈魂これを喜させじ。三九然も我儕退きて沈淪に及ぶべき者に非ず信じて靈魂
の救を得べき者なり。

ルカ傳第六章一九―三八(九月廿三日、三七二頁) 一九衆みなイエスに捫らんせり是能力の其身より出て彼等を成く
譬せば也。二十イエス目を舉弟子を見て曰けるは爾曹貧者は福なり神の國は即ち爾曹の所有なれば也。二一爾曹いま餓
たる者は福なり飽こまを得べければなり。二二人の子の爲に人なんぢらを憎また絶け置り爾曹の名を惡しめて棄なば
爾曹福なり。二三其日には欣び踊れ爾曹天に於て賞賜大なれば也その先祖が預言者に行たりしも是の如し。二四爾曹富
者は福なる哉すでに安樂を受ばなり。二五爾曹飽者は福なるかな餓んとすればなり爾曹いま貧者は福なるかな哀み哭ん

と爲ばなり。二六凡の人なんぢらを察なば爾曹福なる哉その先祖が偽の預言者に行たりしも是の如し。二七我に聽こ
ろの爾曹に告ん其仇を愛し爾曹を憎者を善し。二八詛者を祝し虚過者の爲に祈禱せよ。二九人なんぢの頰の右方を撃ば
亦左方の頰を向よ爾の外服を奪ば裏衣をも禁され。三十凡て爾に求ば之に與へ爾の物を奪ば其をまた索る勿れ。三一己
人に施れんとする事は亦人にも其如く施よ。三二己を愛する者は何の賞賜あらんや惡人にても己を愛する者は
愛する也。三三己に善を行者は善を行は何の賞賜あらんや惡人もまた是の如く行なり。三四爾曹貧るゝ事を得んとおも
ふ人に借 何の賞賜あらんや惡人も其ごとく償を得んとして亦惡人に借なり。三五爾曹仇を愛し又善をなし何をも望すし
て借與よ然ば其賞賜は大なり且至上者の子と爲ん夫上者は恩を忘るゝ者及び不善者にまで慈愛を施せば也。三六是故に
爾曹の父の憐憫の如く亦憐憫を爲べし。三七人を議すること勿れ然ば爾曹ま議せられず人を罪すること勿れ然ば爾曹も
罪せられず人を恕せ然ば爾曹も恕さるべし。三八人に與よ然ば爾曹も予らるべし彼等量を嘉して搖いれ撼いれ溢るゝ迄
にして爾曹の懐に納ん爾曹量る所の其量にて亦人に量らるべし。
ダニエル第四章三一―三五(九月廿四日、三七四頁) 三一その言なほ王の口にある中に天より聲降りて言ふ子アカデテ
ザル王よ汝に告ぐ汝は國の位を失はん。三二汝は逐れて世の人と離れ野の獸と共に居り牛のごとくに草を食はん斯のご
とくにして七の時を経て汝つひに知ん至高者人間の國を治めて己れの意のままにこれを人に與へたまふ。三三その時
直にこの事アカテザルに臨み彼は逐れて世の人に離れ牛のごとくに草を食ひてその身は天よりくだる露に濡れ終に
その髪毛は鷹の羽のごとくになりその爪は鳥の爪のごとくになりぬ。三四斯てその日の満たる後我子アカテザル目を
あげて天を望みしにわが分別性我に歸りたれば我至高者に感謝しその永遠に生る者を讀かつ崇めたり彼の御宇は永遠の
御宇彼の國は世々かぎり無し。三五地上の居民は凡て無き者のごとし天の衆群にも地の居民にも彼は其の意のままに事
をなしたまふ誰も彼の手をおさへて汝なんぞ然するやと言こまを得る者なし。
詩篇第卅三篇八一―八 (九月廿四日、三七四頁) 八全地はエホバをおそれ世にすめるもろくの人はエホバをおぢ

かしこむべし。九そはエホバ言たまへば成り、おほせたまへば立るがゆゑなり。十エホバはもろくの國のはかりごとを虚くし、もろくの民のおもひを徒勞にしたまふ。十一エホバの謀略はごこしへに立ち、そのみこゝろのおもひは世々にたつ。十二エホバをおのが神とする國はさいはひなり。十三エホバ副業にせんてて撰びたまへるその民はさいはひなり、エホバ天よりうかひてすべての人の子を見。十四その在すこゝろより地にすむもろくの人をみたまふ。十五エホバはすべてかれらの心をつくり、その作さるるをこゝろくく鑿みたまふ。十六王者いくさび多をもて救をせず取士ちか 大なるをもて助をばさるなり。十七馬はすくひに益なく、その大なるちからも人をたすくることなからん。十八視よエホバの目はエホバをおもるもの並その憐憫をのぞむもの、うへにあり。

コリント前書第一章二二—二九 九月廿四日、三七四頁) 二三我儕は十字架に釘られしキリストを宣傳ふ即ち此はユダヤ人には疑く者ギリシヤ人には愚なる者なり。二四然ぞ召れたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にもキリストは神の大能また神の智慧なり。二五それ神の愚は人よりも慧く神の弱は人よりも強し。二六兄弟よ召を蒙れる爾曹を觀よ内に循る智慧あるもの多らず能ある者おほからず貴き者多らざる也。二七神は智慧を愧しめんとて世の愚なる者を選び強者を愧しめんとて世の弱者を選ぶ。二八また神は有者を減さんて世の賤者藐視らるゝもの即ち無が如き者を選び給へり。二九これ凡の人の前に誇こまからん爲なり。

ルカ傳第十六章九—三一(九月廿六日、三七六頁) 九我ながらに告ん不義の財を以て己が友を得よ此は乏からん時彼ら爾曹を永遠宅に接んが爲なり。十小事に忠き者は大事にも忠く小事に忠からざる者は大事にも忠からず。十一故に若なんぢら不義の財に忠からず誰か眞の財を爾曹に託んや。十二爾曹もし人の所有に不義ならば誰か爾曹の所有を爾曹に興んや。十三一人の僕は二人の主人に事ること能す蓋これを悪かれを愛し或は此を重んじ彼を輕んずれば也なんぢら神の財に兼事る事能す。十四怒ふかきパリサイの人々此事を聞てイエスを嘲哂たり。十五イエス彼等に曰けるは爾曹は人々の前に自己を義とする者なり然ども神は爾曹の心を知り夫人の崇ぶ所の者は神の前に惡るゝ者なり。十六律法と預

言者はヨハネまでなり其のち神の國は宣傳らる皆用力て之に入ん爲なり。十七天地の廢るは律法の一畫の廢るよりも易し。十八凡そ其妻を出して他の者を娶ば姦淫を行ふ也また夫に出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。十九爰に富人あり紫袍と細布を衣て日々奢樂めり。二十亦ラザロと云る貧者あり甚く腫物を患て富人の門に置れ。二一其案より落る餘屑にて養はれん欲へり又犬きたりて其腫物を舐。二二貧者死たれば天の使者たち依てアブラハムの懷に送れたり富人も死て葬られしが。二三陰府にて痛苦をうけ其目をあけ遙 アブラハムと其懷に在ラザロを見て。二四喊叫いひけるは父アブラハムよ我を憐みラザロを遣して其指の尖を水で漱 舌を涼しめ給へ我この火燄の中に苦めばなり。二五アブラハム曰けるは子よ爾は生たり時に爾の福を受またラザロは其苦を受しを憶へ今かれは慰られ爾は苦めらるゝなり。二六斯耳ならず此より爾曹に涉んごするも得ず彼より我儕に涉んごするも亦ばざる爲に我儕と爾曹との間に限おかれたる巨なる淵あり。二七答けるは然ば父願くは我父の家へラザロを遣たまへ。二八蓋われに五人の兄弟あり亦かれらが此苦の所に來ざる爲にラザロを證據に爲しめよ。二九アブラハム曰けるは彼等にはモーセと預言者あれば之に聽べし。三十答けるは然す父アブラハムよもし死より彼等に往者あらば悔改べし。三一アブラハム曰けるは若モーセと預言者に聽ずば縱ひ死より甦る者ありとも其勸を受ざるべし。

十

ヨハネ福音書第三章(十月九日、三九三頁) 一ユダヤ人の室にてパリサイのニコデモと云る人あり。二かれ夜イエスに來て曰けるはラビ我儕なんぢは神より來し師なりと知そは神もし人と偕ならずば爾が行ふこの休徵は人これを行ふこと能ざれば也。三イエス答て曰けるは或に實に爾に告ん人もし新に生ずば神の國を見こと能はし。四ニコデモ彼に曰けるは人はや老ぬれば如何で復生るゝ事を得んや、再び母の腹に入て生る可んや。五イエス答けるは誠に實に爾に告ん人は水と靈とに由て生ざれば神の國に入んこと能ざる也。六肉に由て生るゝ者は肉なり靈に由て生るゝ者は靈なり。七我なんぢに新に生るべき事を言しを奇と爲なかれ。八風は己が任に吹なんぢ其聲を聞ごも何處より來り何處へ往を知らず、凡て靈

に由て生るゝ者も此の如し。九ニコテモ答て如何で此事あらん乎と曰。十イエス答て曰けるは爾はイスラエルの師なるに猶この事を知ざる乎。十一誠に實に爾に告ん我儕 知し事をいひ見し事を證するに爾曹は我儕の證を受す。十二若われ地の事を言に爾曹信ぜずば況て天の事を言んには何で信するこゝを爲んや。十三天より降り天に在る人の子の外に天に升し者なし。十四モーセ野に蛇を擧じ如く人の子も擧らるべし。十五凡て之を信する者に亡るこゝ無して永生を受しめんが爲なり。十六それ神は其生たまへる獨子を賜ほごに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡る事無して永生を賜めんが爲なり。十七神の其子を世に遣し給へるは世を審判んに非ず彼に由て世を救んが爲なり。十八彼を信する者は審判れず信ぜざる者は既に審判れたり蓋神の生たまへる獨子の名を信ぜざに因。十九罪の定る所以は光世に臨しに人その行の惡に因て光を愛せず反て暗を愛すれば也。二十凡て惡をなす者は光を惡み其行を責られざらんが爲に光に就らず。二一眞理を行ふ者は其行の顯れんが爲に光に就る蓋神に遵て行へば也。二二此後イエス弟子ミユダヤの地に至り偕に彼處に留りてバプテスマを施す。二三ヨハネも亦サリムに近きアイノムに在てバプテスマを施す彼處は水おほきが故なり人々來りてバプテスマを受たり。二四此時ヨハネは未だ獄に入られざりき。二五ヨハネの弟子ミユダヤ人ニ潔事に就て争辨ありけるが。二六彼等ヨハネに來りて曰けるはラビ視よ爾と偕にヨルダンの外に在て爾が證せし者バプテスマを施すに皆かれに來れり。二七ヨハネ答て曰けるは人は天より賜ふに非ざれば受るこゝ能ざる也。二八我はキリストに非ず惟その先に遣されし者なりと言し事を證する者は爾曹なり。二九新婦をもてる者は新郎なり新郎の友たちて其聲を聞ば之に縁て喜び多し我いま此喜び満るこゝを得たり。三十彼は必ず盛んになり我は必ず衰ふべし。三一天上より來る者は萬物の上にあり地より出る者は地に屬その言さるも地の事なり天より來る者は萬物の上にあ。三二彼は自ら其見しこゝろ聞し所の事を證さ爲に其證を受る者なし。三三その證を受し者は印をもて神の眞なる事を證す。三四神の遣しし者は神の言を語る蓋神これに靈を賜ひて限量なければ也。三五父は子を受して萬物を其手に授たり。三六子を信する者は窮なき生命を子に從はざる者は生命を見こゝを得じ且神の怒の上に留らん。

十月十日(三九六頁)

マタイ傳第五章二〇 我なんぢらに告ん學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義とを誇すば、す天國に入こゝ能じ。
 第八章二二 三三 イエス曰けるは我に從へ死たる者に其死し者を葬らせよ。
 第十一章二七 二七 父は我に萬物を予たまへり父の外に子を識もの無また子および子の顯す所の者の外に父を識者なし。
 第十二章三一、三二、四八―五〇、三一、三二は補遺八月二日の分を見よ。四八 イエス告し者に答て曰けるは我母は誰ぞ我兄弟は誰ぞや。四九手を伸その弟子を指て曰けるは是わが母わが兄弟なり。五十蓋すべて我が天に在す父の旨を行ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なれば也。
 第十五章七、八、十四 七 善者よイザヤは能なんぢらに就て預言し。八 此民は口にて我に近き毎にて我を敬へども其心は我に遠かり。十四 彼等を棄おけ譬者の相する譬者なり若めしひのもの譬者の相せば二人とも溝に落べし。
 第十七章五 五 如此いへる時かマヤける雲かれらに蔽ふ聲雲より出て言けるは此は我旨に適ふわが愛子なり爾曹これに聽べし。
 第廿一章四二、四四 補遺一月一日の分を見よ。
 同 第廿三章九、一〇 九また地にある者を父と稱るこゝ勿れ爾曹の父は一人すなはち天に在す者なり。十また導師の稱を受るこゝ勿れ蓋なんぢらの導師は一人すなはちキリストなり。
 同 第廿四章三五 三五 天地は廢ん然ぞ我言は廢じ。
 同 第廿六章六三、六四 イエス默然たり祭司の長こたへて彼に曰けるは爾キリスト神の子なるか我なんぢを活神に誓せて之を告しめん、六四 イエス彼に曰けるは爾が言る如し且われ爾曹に告ん此のち人の子大權の右に坐し天の雲に乗て來るを爾曹みるべし。

同 第二十七章四三、六三 彼は神に依頼めり神も彼を愛しまば今救ふべし蓋し我は神の子なり云也。
 六三 主よ我懐憶起せり彼の偽者いきて在しき三日のち甦らん言し。
 同 第二十八章一八、一八 イエス進て彼等に語いひけるは天のうち地の凡の權を我に賜れり。
 マコ福音書第三章二八、二九 二八われ誠に爾曹に告ん人の凡の罪を瀆す所の褻瀆は赦るべけれど。二九 聖靈を瀆す者は限なく赦さる可からず限なき刑罰に干らん。
 同 第十三章三一、三二 三一 天地は廢ん然ぞ我言は廢じ。三二 其日その時を知者は惟わが父のみなり天にある使者も子も誰も知者なし。
 ルカ福音書第五章一七、一七 一日イエス教を爲せる時パリサイの人と法師ガリラヤの諸郷ユダヤエルサレムより來て此に坐しぬ彼等の病を醫すべき主の能顯はれたり。
 同 第七章二三、二三 凡そ我爲に贖かざる者は福なり。
 同 第九章五〇、六〇 六十 イエス曰けるは禁ること勿れ我儕に敵抗ざる者は我儕に屬者なり。
 同 第十章二二、二三 此時イエス心に喜びて曰けるは天地の主なる父よ此事を智者と達者に隠して赤子に顯し給ふを謝す父よ然そ是の如きは意旨に適るなり。
 同 第十一章五二、五三 なんぢら禍なるかな教法師よ智識の論を奪て自ら入す且入んとする者をも限り。
 マコ福音書第二章二五、二五 また人の心の中を知が故に人について證を立る者を求ざれば也。
 同 第三章三六、三六 補遺十月十日の分を見よ。
 同 第四章二四、二四 神は憚れば拜する者もまた靈を眞をもて之を拜すべき也。
 同 第五章二二、三〇 三二 それ父は誰をも鞠す審判は凡て子に委たり。三三 われ何事をも自ら行ふこと能す聞きこるに違ひて審判す我審判は公平そは我わが意を行ふことを求す我を遣し、父の意を行ふことを求めばなり。

同 第六章三七、四〇、五一 凡て父の我に賜し者は我に就らん我に就る者は我かならず之を棄す。四一 凡そ子を見て之を信する者は永生を得われ復これ末の日に甦らすべし是れを遣し、者の意なればなり。五一 我は天より降し生るパンなり若人此パンを食はば窮なく生べし我あたふるパンは我肉なり世の生命の爲に、これを賜へん。
 同 第七章一七、三八 人もし我を遣し、者の旨に従はば此教の神より出るか又已に由て言なるかを知べし。三八 我を信する者は聖書に録し、如く其腹より活る水川の如に流出べし。
 同 第八章三一、三二 三二 イエス已に信ぜしユダヤ人に曰けるは爾曹もし我道に居ば誠に我弟子なり。三三 眞理を識ん眞理は爾曹に自由を得さすべし。
 同 第九章三九、三九 イエス曰けるは我審判せん爲に世に臨る即ち見ざる者をしてみい見る者を反て譬を爲しむ。
 同 第十章三〇、三四、三六 三〇 我と父とは一なり。三一 イエス答けるは爾曹の律法に我いふ爾曹は神なりと録されしに非ずや。三五 聖書は毀る可らず若神の命を奉し者を神と稱んには、三六 父の聖別ちて世に遣し、者われは神の子なりと稱ばとて何ぞ之を褻瀆とこをいふと曰べけん乎。
 同 第十一章二六、二六 凡て生て我を信する者は永遠も死ることなし爾これに信するや。
 同 第十二章四四、四六 四四 イエス呼り曰けるは我を信する者は我を信するに非 我を遣し、者を信するなり。四五 又われを見者は我を遣し、者を見なり。四六 我は光にして世に臨れり凡て我を信する者をして暗に居ざらしめん爲なり
 同 第十四章一〇、一三、二三 十われ父になり父の我に在ることを信ぜざる乎われ爾曹に語し言は自ら語しに非ず我になる父その行なせる也。十三 爾曹すべて我名に託て求ふ所のことは我すべて之を行ん父の榮の子に因て顯れんが爲なり。二三 イエス答て彼に曰けるは若人われを愛せば我言を守ん且わが父は之を愛せん我儕きたりて彼と偕に住べし。
 同 第十五章七、二六 七 爾曹もし我に居また我いひし言なんちらに居ば凡て欲ふことを求に從ひて予らるべし。二六 われ訓慰師を父より遣らん即ち父より出る眞理の靈なり其きたる時わが爲に證をなすべし。

第十七章三 永生は唯獨の眞神なる爾に其遺し、イエスキリストをしる是なり。

同 第十八章三七 三七 ヒラト彼に曰けるは然ば爾は王なるかイエス答けるは爾の言まことの如く我は王なり我これが爲に生、これが爲に世に臨れり蓋眞理について證を爲んため也すべて眞理に屬者は我聲を聽。

哀歌第三章二一三三(十月廿日四九〇頁) 三三 われらの尙ほるびざるはエホバの仁愛によりその憐憫の盡ざるに因る
三三 これは朝ごに新なり、なんぢの誠實はおほいなるかな。三四 わが靈魂は言ふ、エホバはわが分なり、このゆゑに我彼を待ち望まん。三五 エホバはおのれを待ち望む者をおのれを尋ねもさむる人に恩恵をほごこしたまふ。三六 エホバの救拯をのぞみて靜にこれを待は善し。三七 人わかき時に輻を負は善し。三八 エホバこれを負せたまふなれば獨坐して黙すべし。三九 口を塵につけよ、あるひは望あらん。四十 おのれを撃つ者に頬をむけ、充足るまでに恥辱をうけよ。三一

そは主は永久に棄ることゝ爲たまはざるべければなり。三二 かれは患難を與へたまふさいへごもその慈悲おほいなればまた憐憫を加へたまふなり。三三 心より世の人をなやまし、かつ苦しめたまふにはあらざるなり。

ガラテヤ書第三章二六(十月廿二日、四一三頁) 二六 爾曹は皆キリストイエスを信するに由て神の子となれり。
創世記第二十六章二六(十月廿九日、四二二頁) 二六 茲にアビメレク其友アホザテ及び其軍勢の長ヒコルと共にゲラルよりイサクの許に來りければ。三七 イサク彼等に言ふ汝等は我を惡み我をして汝等をはなれて去しめたるなるに何ぞ我許に來るや。三八 彼等いひけるは我等確然にエホバが汝と偕にあるを見れば、我等の間即ち我等と汝の間に誓詞を立て汝と契約を結ばんと謂へり。三九 汝我等に惡事をなすなかれ其は我等は汝を害せず只善事のみを汝になし且汝を安然に去しめられたれば汝はエホバの祝みたまふ者なり。四十 イサク乃ち彼等のために酒宴を設けたれば彼等食ひ且飲り。四一 斯て朝風に起て互に相誓へり而してイサク彼等を去しめられたれば彼等イサクをはなれて安然にかへりぬ。

十一月

ヘブライ書第十一章(十一月五日、四三二頁) 一 それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據するもの也。二 古の

人これに由て美稱を得たり。三 われら信仰に由て諸の世界は神の言にて造れ如此みゆる所のものに見べき物に由て造れざることを知。四 信仰に由てアベルはカインより愈れる祭物を神に獻て義者と證せられたり蓋神その禮物について證し給へば也かれ死れども信仰に由て今なほ言へり。五 信仰に由てエノクは死ざるやうに移されたり神これを移し、に因て人見出すことを得ざりき彼いまだ移されざる先に神に悦ばる、者と證せられし也。六 信仰なくば神を悦ばずこと能はず蓋神に來る者は神あるを信じ且神は必ず己を求る者に報賞を賜ふ者なるを信すべければ也。七 信仰に由てノアは未だ見ざる事の示を蒙り敬みて其家族を救ふ爲に舟を設けたり之に由て世の人の罪を定めまた信仰に由る義を受べき嗣子となれり。八 信仰に由てアブラハムはその承繼べき地に往きの命を蒙り之に遵ひその往きころを知ずして出たり。九 彼また信仰に由て異邦に在が如く約束の地に寓り同じ約束を相嗣るイサクヤコブと共に幕屋に居り。十 彼は神の造營める所の基ある京城を望めば也。十一 信仰に由てサラも孕を寓さるゝ力をうけ年邁しかども子を生り是約束せし者は誠信なりとしつれば也。十二 是故に死たる者の如き一人より天の星の多と海邊の砂の數へ難きが如く生出たり。十三 此等は皆信仰を懷きて死り未だ約束の者を受ざりしが遙かに之を望て喜び地に在ては自ら賓旅なり寄寓 なりと言ひ。十四 如此いふ者は家郷を尋る事を表す也。十五 彼等もしその出し地を念は、歸るべきの機ありしなるべし。十六 然ど彼等は更に愈れる所すなはち天に在るを慕へり是故に神は其神と稱することを恥せざりき蓋かれらの爲に京城を備へ給ふれば也。十七 信仰に由てアブラハムは試られし時イサクを獻たり彼は約束を受し者なるが其獨子を獻たり。十八 此子に就ては爾の子孫イサクに由て稱らるべしと云れたりき。十九 彼おもへらく神は死より之を復活し得るに即ち死より彼を受しが如なりき。二十 信仰に由てイサクは來らんとする事に就てヤコブミエサウを祝せり。二一 信仰に由てヤコブは死んとする時にヨセフの二人の子を祝し又その杖の頭に扶て崇拜をなせり。二二 信仰に由てヨセフは死んとする時にイスラエルの子孫のエジプトより出る事について語り又おのが骸骨の事に就て命じたり。二三 信仰に由て父母はモーセの生れたる時その美き子なるを見て三月の間これを匿し又王の命をも畏ざりき。二四 信仰に由てモーセは成長し時パロの女の子と

稱るゝを辭たり。二五暫く罪の樂を享んよりは寧ろ神の民と共に苦難を受んことを善とし。二六キリストの爲に受る詭評はエジプトの財貨も寶貴を意へり蓋報賞を認て望ばなり。二七信仰に由て彼はエジプトを離れ、王の怒を畏れざりきは見ざる者を見が如く耐忍べば也。二八信仰に由て彼は逾越節の血を瀆ぐ禮を守れり蓋長子を滅す者の彼等に抵ざらんが爲なり。二九信仰に由て彼は紅海を陸の如く渉しがエジプトの人は之を渉らんとして溺れ死たり。三〇信仰に由り七日の間エリコの城を環巡するに遂にその石垣くづれたり。三一信仰に由て妓婦のラハブは信ぜざる者と共に亡ざりき蓋偵者を接て之を平安ならしめられた也。三二われ更に何を言んや若キテオン、バラク並サムソン、イヒタ、ダビデ並サムエル及び預言者等の事を言んには時足ざる也。三三かれら信仰に由て諸國に服し義を行ひ約束の者を以て獅の口を箝み、三四火勢を滅し劔の刀を避け荏弱よりして剛強せられ戰爭に於て勇しく異邦人の陣を退せたり。三五婦も亦死たる者の復活を受しことあり亦ある人は最も愈れる復生を得べき爲に酷刑られて免るゝことを欲まざりき。三六また或人は嘲笑をうけ鞭打れ縲纒と圍圍の苦を受。三七石にて撃れ鋸にてひかれ火にて焚れ及にて殺され綿羊と山羊の皮を衣て經あるき窮乏して艱苦めり。三八世は彼等を居に堪ず彼等は曠野と山と地の洞と空とに周流たり。三九彼等は皆信仰に由て美名を得たれども約束の所を得ざりき。四〇それは彼等も我儕と借ならざれば成全すること能はざる爲に更に愈れる者を神預じめ我儕に給へり。

天國界第七卷五〇一六九行(十一月廿一日、四四四頁) 其が(ダンテの追放)人々が欲することであり、既に人々が既に求めて居ることである。基督が日々賣買せらるゝ處にて、やがて其はそれを志ざす人々から成さるゝであらう。罪は世の習である如く、評判にては、傷けられたものゝ方が蒙るであらう。然し懸報は之を興ふる道理を證明する。御前は最も大事な愛する凡てのものを見棄てればならぬ。此が追放の弓が射出す最初の矢である。御前は他人の麵麩が如何に揃からく、他人の階段の昇降が如何にづらいかを経験するであらう。然し御身の肩に一番重く苦しめるのは、御前が一緒に此谷へ落下る惡き莫迦な仲間であらう。彼等は皆恩知らずで、全く氣狂じみ、不信心で、御前に敵對するであらう。

う。然しやがて御前でなく、彼等が紅の額を有つてであらう。(赤面のこと)彼等の行爲が彼等の愚を證明するであらう。それで御前は御前自身を仲間としたことが御前の熱であるであらう。

ダニエル第三章一六一三〇(十一月廿一日、四四五頁) 十六シヤテラク、メシヤクおよびアマテネゴ對て王に言けるはネアカテネザルよこの事においては我ら汝に答ふるに及ばず。十七もし善らんには王よ我らの事ふる我らの神我らを救ふの能あり彼その火の燃る爐の中汝の手の中より我らを救ひださん。十八假令しからざるも王よ知たまへ我らは汝の神々に事へすまたこの立たる金像を拜せじ。十九是においてネアカテネザル怒氣を充しシヤテラク、メシヤクおよびアマテネゴにむかひてその面の容を變へ即ち爐を常に熱くするよりも七倍熱くせよと命じ。二十またその軍勢の中の力強き人々を喚てシヤテラク、メシヤクおよびアマテネゴを縛りてこれを火の燃る爐の中に投こめと命じたり。二一是なもて此人々はその褲子羽織外套およびその他の服裝を着たるまゝにて縛られて火の燃る爐の中に投こまれたりしが。二二王の命はなはだ急にして爐は甚だしく熱しぬたれば彼のシヤテラク、メシヤクおよびアマテネゴを引抱へ仰ける者等はその火爐に燒ころされたり。二三また此シヤテラク、メシヤク、アマテネゴの三人は縛られたるまゝにて燃る爐の中に落りりぬ。二四時にネアカテネザル王驚ろきて急忙たちあがり大臣等に言ふ我等は三人を縛りて火の中に投いれざりしや彼ら王にこたへて言ふ王よ然り。二五王また應へて言ふ今我見るに四人の者縲纒解て火の中に歩みたり凡て何の害をも受すまたその第四の者の容は神の子のごとし。二六ネアカテネザルすなはちその火の燃る爐の口に進みよりて呼て言ふ至高神の僕シヤテラク、メシヤク、アマテネゴよ汝ら出きたれ是においてシヤテラク、メシヤクおよびアマテネゴその火の中より出きたりしかば。二七州牧、將軍、方伯および王の大臣等集りて此人々を見たり此人々の身は火もこれを害する力なかりきまたその頭の髪は燥すの衣裳は傷れず火の臭氣もこれに付ざりき。二八ネアカテネザルすなはち宜て曰くシヤテラク、メシヤク、アマテネゴの神は讚べ。哉彼その使者を遣りて己を頼む僕を救へ。また彼ら似己の神の外には何の神にも事へすまた拜せざらんとして王の命をも用ひず自己の身をも捨んとせり。二九然ば我今命

を下す諸民諸族諸音の中凡てシヤテラク、メシヤクおよびアペテネゴの神を誓る者あらばその身は切裂れその家は厩にせられん其は是のごとくに救を施す神他にあらざればなりと。三十かくて王またシヤテラク、メシヤクおよびアペテネゴのを位すゝめてバビロン州におらしむ。

十 二 月

一 日 本文四六一頁

淨罪界第二十八歌一二七、一二八行 此方には其が(河が)罪の記憶を除去する力を以て流れる。

同 第二十九歌三、七一行。罪の蔽はるゝ者は福なり。此流のみが彼等から予を隔てた。

同 第三十歌一四二—一四五行。涙を漉がしむる後悔の税を拂ふことなくして、レーテが横ぎられ而してかやうな食物が味はれるならば、神の尊き命令は破らるゝであらう。

同 第三十一歌四〇—四二、九四—一〇三行。罪の訴が自分自身の頬から躍出づるならば、吾等の法院に於ては、(即ち淨罪界に於ては)車(砥石車)が及に掛けらるゝ。(公然の罪の白状は罪を免し、若しくは罪の鋭さを減する)。「私をつかまつて、私をつかまつて」と彼女は叫んだ。彼女は喉の處まで予を河の中に沈め、自分の後に予を引すりながらさながら梭の如く輕快に水の上を歩いた。予福社ある岸に近づいた時、「なんぢヒツプを以て我をさよめ給へ」(詩篇第五十篇七)の歌を聞いた。その歌の心地よさは、予之を想出すことも出来ない、まして書きしるすことは一層出来ない此美しき婦人は腕を廣げ、予が頭を抱き、水を吞まざるを得なかつた位に深く予を水に沈めたが、やがて予を水から引上げた。

ルカ福音書第十二章一五—二〇、二九—三四(十二月七日四七一頁) 十五イエス衆人に曰けるは戒心して貪心を慎めよ夫人の生命 所蓄の饒なるには困ざる也。十六たま譬を彼等に語て曰けるは或富人その田畑よく豊ければ、十七自ら付いひけるは我が作物を藏る所なきを如何せん。十八又曰けるは我が爲ん我倉を毀ち更に大なるを建すべて我が作物と

貨を其所に藏べし。十九斯て靈魂に對ひ靈魂よ多年を過ほごの許多の貨物を有たれば安心して食飲樂めよと言んす。二十 然るに神これに曰ける 無知なる者よ今夜なんぢが靈魂さらるゝこと有べし然ば爾の備し物は誰か有になる乎。

二十一 爾曹何を食ひ何を飲んぞ求むる勿また思ひ惑ふこと勿れ。三十 凡て是等の物は世界の邦人の求るもの也なんぢらの父は是等の物の爾曹に無て叶ぬ事を知。三十一 たゞ神の國を求めよ然ば是等の物は爾曹に知らるべし。三十二 小き羣を懼るゝ勿れ爾曹の父は喜びて國を爾曹に予へ給はん。三十三 爾曹の所有を售て施し己が爲に常に舊ざる財布すなはち盡ざる財寶を天に備よ其は盜賊も近よらず蠹も壞はざる也。三十四 爾曹の財寶の在る處には爾曹の心も亦そこに在べし。

地獄界第一歌四九—六〇(十二月七日、四七二頁) その瘦せたる體は飢を載せたるやうに見ゆ、既に多くの人の生命を悲惨たらしめた牝狼は、(貧乏の徴象)その眼より出づる怖ろしさによりて、われに苦難を與へ、われは登攀の望を失つた、(得んぞ欲したのに、失はした時が来た時に、念毎に泣き而して悲しむ人の如くに、われを平和なき歌はなした。歌は近づきつゝ、段々と日の沈黙するあたりにわれを追かへした。

申命記第三十章二、一一—一九(十二月十四日、四八一頁) 汝と汝の子 ともに汝の神エホバに起かへり我が今日なんぢに命する所に全たく循がひていをつくし精神をつくしてエホバの言に聽したがは。十一 我が今日なんぢの命する誠命は汝が理會がたゞ者にあらすまた汝に遺き者にあらす。十二 是は天に在なれば汝は誰か我らのために天にのぼりてこれを我 に持くだり我らにこれを開せて行はせんかと言ふにおよばず。十三 また是は海の外にあるなられば汝は誰か我らのために海をわたりゆきてこれを我らに持きたり、我らにこれを開せて行はせんかと言ふにおよばず。十四 是言は甚だ汝に近くして汝の口にあり汝の心にあれば汝を行ふことを得べし。十五 視よ我今日生命と福徳および死と災禍を汝の前に開り。十六 即ち我今日汝にむかひて汝の神エホバを愛しその道に歩みその誠命と法度と律法とを守ることを命するなり然らば汝生ながらへてその數衆くならんまた汝の神エホバ汝が往て獲るこの地にて汝を祝福たまふべし。

十七 然らば汝もし心をひるがへして聽従がはず誘はれて他の神々を拜みまたこれに事へなば。十八 我今日汝らに告ぐ汝ら

は必ず滅びん汝らはヨルダンを渡りゆきて獲るところの地にて汝らの目を永うすることを得ざらん。十九我今日天と地を呼て證さなす我は生命と死および祝福と呪詛を汝らの前に、リ汝生命をわらぶべし然せば汝の子孫生存らぶることを得ん。

同 第三十三章二六―二九(同上) 二六 エシユルンよ全能の神のごとき者は外に無し是は天に乘て汝を助け雲に駕てその威光をあらはしたまふ。二七 永久に在す神は住所なり下には永遠の腕あり敵人を汝の前より驅はらひて言たまふ滅ぼせよと。二八 イスラエルは安然に住をりヤコブの泉は穀と酒との多きに獨り在んその天はまた露をこれに降すべし二九 イスラエルよ汝は幸福なり誰か汝のごときエホバに救はれし民たらんエホバは汝を護る楯汝の榮光の劍なり汝の敵は汝に詔ひ服せん汝はかれらの高處を踐ん。

マタイ福音書第二十四章三一―四(同上) 三イエス橄欖山に坐し給へるごとき弟子ひそかに來りて曰けるは、何の時このこと有や又爾の來る兆と世の末の兆は何なるぞや我儕に告たまへ。四イエス答て彼等に曰けるは爾曹人に欺かれざるやう慎よ。五蓋おほくの人が名を冒きたり我はキリストなりと云て多の人を欺くべし。六又なんぢら戰と戦の風聲をきか、然ぞ慎く懼る、勿れ此等の事は皆ある可なり、然ども末期は未だ至らず。七民おこりて民をせめ國は國をせめ饑饉、疫病地震とくるく、に有ならん。八是みな福の始なり。九其ごとき人なんぢらを患難に付し爾曹を殺すべし、又なんぢら我名の爲に萬民に憎まれん。十此ごとき許多のもの礙かつ互に付し互に憾むべし。十一また偽預言者おほく起て多の人を欺かん。十二また不法みつるに因て、人の愛情ひやゝかに爲べし。十三然ぞ終まで忍ぶ者は救る、ことを得ん。

マタイ福音書第三章二、三、一七、一八(同上) 二されど其來る日には誰か堪はんや、その顯者る時には誰か立はんや、彼は金をふきわくもの、火の如く布晒、灰汁のごと、ならん。三かれは銀をふきわけてこれを潔むる者のごとき坐せん、彼はレビの齋を潔め金銀の如くかれらなきよめん、而して彼等は義をもて獻物をエホバにささげん。一七、一

八は十二月廿日の分を見よ。

エレミヤ書第二章九(同上) 故にわれ尙汝等とあらそはん且なんぢの子孫とあらそふべしエホバいひたまふ。

ヨブ記第三十三章一四―三〇 まごに神は一度二度と告示した、ふなれど人これを曉らざるなり。一五以下は六頁以下頭註を見よ。

申命記第五章二五―三〇(十二月廿日、四八七頁) 二五我らなんぞ死にいたるべけんや此大なる火われらを焼ほろぼさんとするなり、我らも此上になほ我、の神エホバの聲を聞ば死べし。二六凡そ肉身の者の中誰か能く活神の火の中より言ひたまふ聲を我らのごとくに聞てなほ生る者あらんや。二七請ふ汝進みゆきて我らの神エホバの言たまふところを都て聽き我らの神エホバの汝に告給ふところを都て我らに告よ我ら聽て行はん。二八エホバなんぢらが我に語れる言の聲を聞てエホバ我に言たまひけるは我の民が汝に語れる言の聲を聞け彼らの言ごころは皆善し。二九只願しきは彼等が斯のごとき心を懷いて恒に我、畏れ吾が誠命を守りてその身もその子孫も永く福祉を得にいたらん事なり。三十汝ゆきて彼らに言へ汝らおのくの天幕にかへるべしと

マラキ記第三章一三―第四章二(十二月廿日、四八九頁) 十三エホバ云たまふ汝らは言詞をばげしくして我に逆らへりしかるも汝らは非濟にんぢらにさからひて何をいひしやさいへり。十四汝らけ言らく神に服事ることは徒然なり、われらその命令をまもりかつ萬軍のエホバの前に悲みて歩みたりさて何の益あらんや。十五今われらは驕傲ものを幸福なりと稱ふ、また惡をおこなふものも盛になり、神を試むるものすらも救はる。十六その時エホバをおそる者互に相かたりエホバ耳をかたむけてこれを聽たまへり、またエホバを畏る者およびその名を記憶る者のためにエホバの前に記念の書をかきしるせり。十七萬軍のエホバいひたまふ我わが設くる日にかれらをもて我實さなすべし、また人の己につかふる子をあはれむがごとき我彼等をあはれまん。十八その時汝らは更にまた義者と惡きものと神に服するものと事へざる者との區別をしらん。一萬軍のエホバいひたまふ視よ爐のごとくに燒、日來らん、すべて驕傲者と惡をおこなふ者

は驚のごとくならん。きたらんとする日彼等を焼つくして根も枝ものこらざらしめん。ニされど我名をおそるゝ汝らには義の日いで、昇らんその翼には醫す能をそなへん、汝らは牢よりいでし積の如く躍跳ん。

エレミヤ書第二章一三、一七、一八、一九(同上) 蓋わが民はふたつの悪事をなせり即ち活る水の源なる我をすて自己水溜を掘れりすなはち壊れたる水溜にして水を有たざる者なり。十七汝の神エホバの汝を途にみちびきたまへる時に汝これを棄たるによりて此事汝におよぶにあらずや。十八汝ナイルの水ハ飲んきてエジプトの路にあるは何ゆゑまた河の水を飲んきてアツスリヤの路にあるは何故ぞ。十九汝の悪は汝をこらしめ汝の背は汝をせめん斯く汝 神エホバをすてたるを我を畏るゝこと汝の裏にあらざるは悪く且つ苦きことなるを汝見てしるべしとまなる萬軍のエホバいひ給ふ。

同 第三章七、一一(同上) 七彼このすべての事を爲せしを我かれに汝われに歸れと言しかどもわれに歸へらざりき其悖れる姉妹なるエダ之を見たり。十一エホバまた我にいひたまひけるは背けるイスラエルは悖れるエダよりも自己を義とす。

同第卅二章一九、二三、三八―四二(同上) 十九汝の謀略は大なり汝は事をなすに能あり汝の目は人のことら諸の途を窺はしおのくの行に循ひその行爲の果によりて之に報いたまふ。二十汝休徵を跡をエジプトの地に行ひたまひて今日にまでいたるまたイスラエルと他の民の中にも然りかくして今日のごとくに汝の名を揚たまへり。二一汝は休徵と奇跡と強き手と伸たる腕と大なる怖じき事をもて汝の民イスラエルをエジプトの地より導きいだし。二三この地を彼らにたまへり是即ち汝がかれらの先祖等に與へん、誓ひたひし乳と蜜の流るゝ地なり。二三彼等すなはち入てこれを獲たりしかども汝の聲に應はず汝の例を行はず汝がなせし命じたまひし事を爲さしによりて汝の災を其上にくらしむ。三八彼らは我民となり我は彼らの神ならん。二九われ彼らに一の心一の途をあたへて常に我を畏しめんこは彼らと其子孫とに福をゆせしめん爲なり。四〇われ彼らを棄すして恩を施すべしさいふ永遠の契約をかれらにたて我を入こと能じ。

畏るゝの畏なかれらの心におきて我を離れざらしめん。四一われ悦びて彼らに恩を施し心を盡し精神をつくして誠に彼らに此地に植べし。四二エホバかくいひたまふわれ此諸の大なる災をこの民に降せことくわがかれらに言し諸の福をかれらに降さん。

マタイ傳第五章一七―二〇(十二月廿日、四九〇頁) 十七われ律法と預言者を廢る爲に來れりと思ふ、われ來て之を廢るに非ず成就せん爲なり。十八われ誠に爾曹に告ん天地の盡さる中に律法の一と一畫も遂つてくすして廢ることなし。十九是故に人もし誠の至微き一を壞り又その如く人に教なば天國に於て至微き者と謂れん凡そ之を行ひ且人に教る者は天國に於て大なる者と謂るべし。二十我なんぢらに告ん學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義こそ勝すば必ず天國に入ること能じ。

ヨハネ傳第三章(十二月廿三日、四九二頁)補遺十月九日の分を見よ。
ルカ傳第八章五一―五五(十二月廿四日、四九五頁) 五種まく者種を播んきて出ぬ播るべき路旁に遺し種あり踐踏られ且天空の鳥これを食へり。六また石上に遺し種あり萌出て稿たり是潤なきが故なり。七また棘の中に遺し種あり棘も同じ生長て之を蔽り。八また沃壤に遺し種あり生出て實を結べるこそ百倍せり是を言畢て呼びけるは耳ありて聽ゆる者は聽べし。九其弟子さふて曰けるは是はいかなる譬ぞ。十答けるは神の國の奧義を爾曹には知こきを賜と他の者には譬を以てす此は視ても見ず聽ても悟ざる爲なり。十一夫この譬の釋種は神の道なり。十二路の旁に遺しは聽き喜びて道を受けども根なければ信すより道を奪るゝ者なり彼は人の信じて教れんことを恐る。十三石上に遺しは聽き喜びて道を受けども根なければ信すること暫のみ患難に遇時は道に背く者なり。十四棘の中に遺しは聽て往この世の諸慮と貨財と宴樂とに蔽れて實ざる者なり。十五沃壤に遺しは正かつ善心にて道を聽きこれを守り忍て實を結ぶ者なり。

歴王紀略上第九章七―九(十二月廿五日、四九五頁) 七我イスラエルをわが與へたる地の面より絶ん又わが名のために我が聖別たる此家をば我わがまへより投げ棄んじかしてイスラエルは諸の民の中に諺語となり嘲笑となるべし。八且又

此家は高くあれども其傍を過る者は皆之に驚き嘶きて言んエホバ何故に此地に此家に斯爲たまひしやと。九人答へて彼等は己の父祖をエジプトの地より導き出せし其神エホバを棄て他神に附従ひ之を拜み之に事へしに因てエホバ此の凡て害惡を其上に降せるなりと言ん。

エレミヤ書第二十四章六、七(同上、四九六) 六我彼等に目をかけて之をめぐみ彼らに此地にかへし彼等を建て侍さす植て拔じ。七我彼らに我のエホバなるを識るの心をあたへん彼等我民となり我彼らの神ならん彼等は一心を以て我に歸るべし。

同 第廿九章一一一四(同上) 十一エホバいひたまふ我が汝らにむかひて懐くまこと念は我これを知らずなはち災をあたへんまにあらず平安を與へんまおもひ又汝らに後望をあたへんまおもふなり。十二汝らわれを顧り往て我にいのらん我汝らに聽べし。十三汝らもし一心をもて我を崇めなば我に尋ね遇はん。十四エホバいひたまふ我汝らの遇まことならんわれ汝らの伴據を解き汝らを萬國よりすべて我汝らを逐やり 處より集め且我汝らをして携はれて離れしめし之處に汝らをはき歸らんまエホバいひたまふ。

ロマ書第十一章一七、一八、二五、二六(同上、四九六頁) 一七もし幾數の枝を折れたるに爾野の橄欖なるそれを其中に接れ共に其根により共に其汁漿を受るならば。一八原の枝に向ひて誇る勿れ假令はこるまも爾は根を保す根は爾を保てり。二五兄弟よ我爾曹が自己を智とする事無らん爲に此奧義を知らざるを欲まず即ち幾分のイスラエルの頑梗 異邦人の數盈るに至らん時まで也。二六然てイスラエルの人悉く救るを得ん緣して救者はシオンより出てヤコブの不虔を取除かん。

創世記第四章九一六(同上、四九六頁) 九エホバカインに言たまひけるは汝の弟アベルは何處に在るや彼言ふ我しらず我あに我弟の守者ならんやと。十エホバ言たまひけるは汝何をなしたるや汝の弟の血の聲地より我に叫べ。十一されば汝は詛れて此地を離るべし此地其口を啓きて汝の弟の血を汝の手より受たればなり。十二汝地を耕すまも地は再其

力を汝に致さじ汝は地に吟行ふ流離子となるべしと。十三カインエホバに言けるは我が罪は大にして頁々能はず。十四 視よ汝今日斯地の面より我を逐出したまふ我汝の面を觀るまことなきにいたらん我地に吟行ふ流離子ならん凡そ此に遇ふ者我を殺さん。十五エホバ彼に言たまひけるは然らば凡そカインを殺す者は七倍の罰を受んまエホバカインに遇ふ者の彼を撃ざるため印誌を彼に與へたまへり。十六カインエホバの前を離て出でエデンの東なるノドの地に住り。

爾健康たらんま欲するか

ヨハ子福音第十六章二〇一二七(本文五一四頁) 二〇誠に實に我なんぢらに告ん爾曹は哭き哀み世は喜ぶべし爾曹憂るならん然ど其憂は變て喜びとなるべし。二一 婦子を産んまする時は憂ふ其期いたるに因てなり然ど此世生ば前の苦をわする世に人の生たる喜樂に因てなり。二二 此の如く爾曹も今憂ふ然ど我また爾曹を見ん其時なんぢらの心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者あらじ。二三 其日なんぢら我に問まこと無べし誠に實に爾曹に告ん凡そ我名に託て父に求る所のもの父これを爾曹に授たまふべし。二四 なんぢら今まで我名に託て求ることなきを然ば受んして爾曹の喜ひ滿べし。二五 譬喩を用して爾曹に語り父に就て明かに示す時いたらん。二六 其日なんぢら我名に託て求ん我なんぢらの爲に父に求ふま曰す。二七 蓋父みづから爾曹を愛すれば也これ爾曹われを愛し且父より我來しことを信するに因。

テサロニケ前書第四章一三一八(本文五二四頁) 十三兄弟よ爾曹の憂戚望なき他人の如ならざらんまことを欲ふが故に我儕すでに寢れる者に就て 爾曹の知ざるを好まず。十四 我儕もしイエスの死て甦りし事を信するならばイエスに由る所の既に寢れる者を神かれま偕に携へ來らんまことを信すべき也。十五 われら主の言に託て爾曹に告ん主の臨らん時に至り活て存れる我儕は直に寢れる者よりも先だまじ。十六 それ主號令と使長の聲と神の箴を以て自ら天より降らん其時キリストに在て死し者先に甦へり。十七 後に活て存る我儕かれま偕に雲に携へられ空中に於て主に遇べし斯て我儕いつまでも主ま偕に居ん是故に此等の言を以て互に慰むべし。

大正九年五月十五日印刷
大正九年五月二十日發行

不許
複製

眠られぬ夜の爲め

正價金參圓五拾錢

譯者 平田元吉

發行者 八坂淺次郎
京都市九太町寺東

印刷者 佐藤靜
京都市夷川川端東南

發行所

京都市九太町寺東
電話掛入一七〇五番
電話掛出二〇〇九番

弘文堂書房

~~392~~

~~101~~

194

H58

終